
満洲の記憶

第5号

一少年の大連記憶 執筆：秦 源治
編集：甲賀 真広、大野 絢也

満洲紀行 執筆：竹内 一郎 解題・編集：菅野 智博

公主嶺教育関連写真目録 追記：土屋 洸子
解題：大石 茜 編集・整理：甲賀 真広

20 世紀大連会議会報『The Great Connection』記事目録
..... 佐藤 仁史、大野 絢也

公主嶺調査記 甲賀 真広

寄贈資料目録 ／ 活動記録 ／ 報告要旨 ／ お知らせ

「満洲の記憶」研究会

2018 年 10 月

一少年の大連記憶

執筆：秦 源治

(大連常盤小、大連二中、南満工専卒)

編集：甲賀 真広、大野 絢也

凡例

- ・本回想記は、大野絢也、尹国花、菅野智博「一位日本少年の大連記憶——秦源治先生訪問記録」(『口述歴史』第14期、2016年)として台湾で発表された内容が基になっている。本稿は秦源治氏のご意向により、日本語版を本号へ掲載することとなった。なお、原稿は2017年夏に原稿をいただいたものである。
- ・本回想記の翻訳は秦源治氏が依頼した第三者によって行われ、秦氏が内容の加筆修正を行った。
- ・秦源治氏の執筆意図を尊重し、文中の表記や表現は原文のままで掲載している。

本文



昭和3年七五三祝い 母・源治・茂治・一郎

私は、大正 15 年（1926）12 月に、大連で生まれました。父助市は大連で洋服商を営んでおりました。昭和 8 年（1933）に大連常盤小学校、昭和 14 年（1939）に大連第二中学校に入学し、中学時代は“愛鳩部”に所属していました。昭和 19 年（1944）南満洲工業専門学校鉱山工学部に進学し、昭和 20 年（1945）4 月から弓長嶺鉱山で勤労働員に従事しました。同年 8 月、徴兵検査前に第二国民兵の召集令状を受け、動員先から帰連したのが 8 月 15 日午後 3 時過ぎで、その直前の正午には戦争は敗戦に終わったことが分かりそのゝ自宅待機、私は戦地に征かずに済みました。昭和 21 年（1946）3 月南満工専は繰上げ卒業となり、昭和 22 年（1947）3 月 29 日には遂に大連最後の日を迎え“さらば大連！”引揚船「高砂丸」に乗船して大連港を出港、4 月 3 日佐世保港に上陸し、故国への第一歩を印しました。

その後、三重県鈴鹿市神戸町に居住地を構えました。昭和 23 年（1948）1 月に地元の百五銀行に就職、同 61 年（1986）12 月に定年を迎えて退職した後も、二～三の職場で第二の人生を過ごし、平成 8 年（1996）11 月以後は、完全に年金生活者となりました。その一方で、大連関係の絵はがき・資料を収集し、満洲からの帰国者の組織である「20 世紀大連会議」の活動にも携わっていました。



大連市大山通り 丁子屋洋服店開業



大山通り界限

（たうんまっぷ大連から抜粋）

平成 28 年（2016）12 月に卒寿（九十歳）を迎えましたが、日常は至って健康で自由気儘に過ごしております。

一、両親の渡鮮と大連で独立開店

明治 38 年（1905）日露戦争終結直後に、三重県津市で屋号「丁子屋」の洋服店を営んでいた店主・小林源六は、丁稚小僧として私の父・秦助市と同僚・建部永吉の二人を従えて朝鮮京城へ進出し、同じ屋号で営業を始めて、二人には洋服店経営法を体験させ一人前に仕立てあげました。父は独立経営を志し、店主の諒解を得て退店と屋号の暖簾分けを許され、大正 9 年（1920）1 月に「丁子屋洋服店」を大連大山通りに開店しました。同僚の建部氏は、京城本店直系の「櫛満洲丁子屋」を奉天に設在・経営に当たり、のちに新京に移転して終戦を迎えました。京城本店はのちに「丁子屋百貨店」に発展しました。京城・奉天（新京）・大連と基盤は異なるが、常にお互いに交流しておりました。

母しげは、作法見習いに津市の小林家に奉公していて、父と大正 4 年（1915）2 月に結婚し、直ちに京城に渡りました。子供は 5 人儲け、姉は京城で、男兄弟 4 人は何れも大連で出生しました。

二、連鎖街と丁子屋洋服店

私が生まれた時は、我が家の丁子屋洋服店は、支那大連市大山通り 32 番地でした。昭和 4 年（1929）12 月に大連連鎖商

店街が竣工開業し、丁子屋洋服店はその真ん中の銀座通り西側に移転しました。それ以来、戦争が終わり引揚げるまで、ずっとそこで暮らしていました。普段は連鎖街銀座通りと称していましたが、正式の住所地は大連市常盤町 30 番地でした。



市街の寵児、市民を吸引する連鎖商店街



連鎖街銀座通り
丁子屋洋服店移転

新たに建設された近代的商店街は、次の図面に示すように、A～Hの8ブロックに分かれて各業種の商店・事務所約二百戸が連なる状態で、恰も百貨店仕様のようでもあったので、「連鎖商店街または連鎖街」と呼ばれて市民に親しまれました。

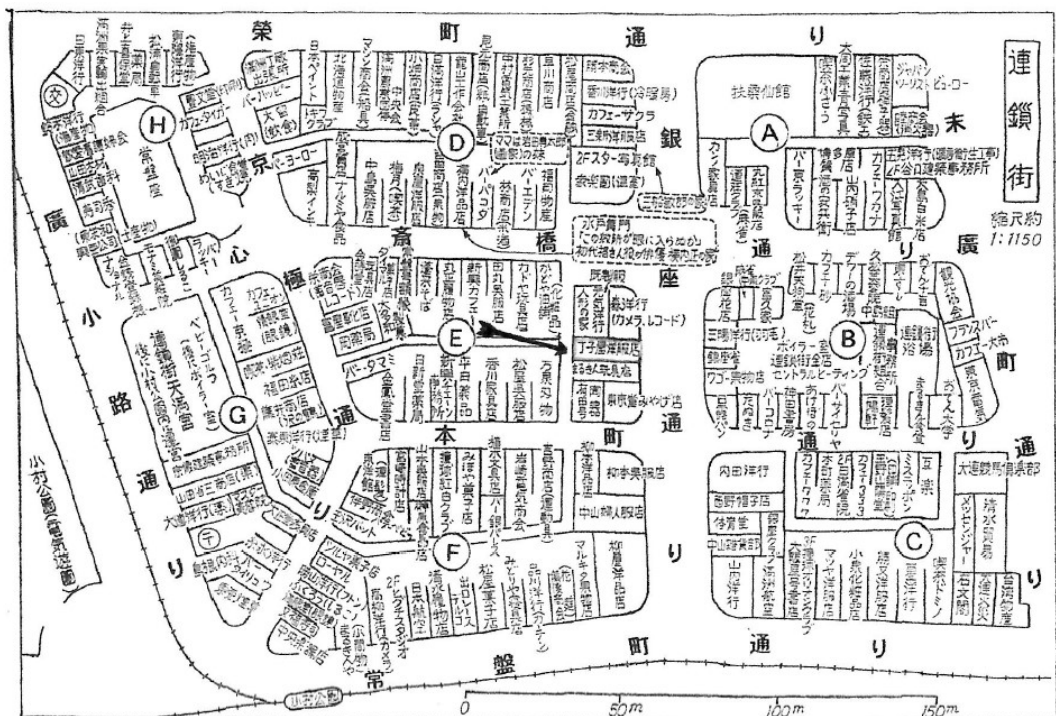
当初は大通りに面した四囲の通りは三階建て、内部の通りは二階建てに統一されていました。そして、南側の電車通りは常盤橋に因んで常盤町通りと呼ばれていましたが、その他の通りは、日本内地の有名繁華街の名称が付けられていました。即ち、東側ダルニー川に面して末広町通り（大阪）、西側電気遊園を挟んで広小路通り（名古屋 or 東京上野）、北側大

通りは栄町通り（名古屋 or 神戸）、中央南北に貫く銀座通り（東京）、西寄り少し折れて京極通り（京都）、東西に走る二条の北側は心斎橋通り（大阪）、南側は本町通り（大阪）、と夫々が愛称で呼ばれていました。

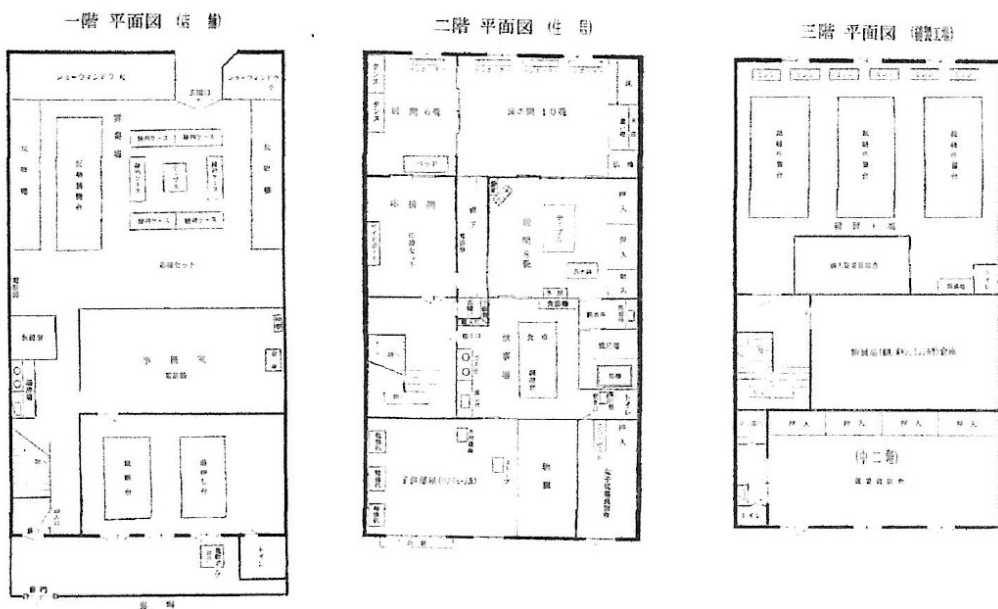


連鎖街銀座通り

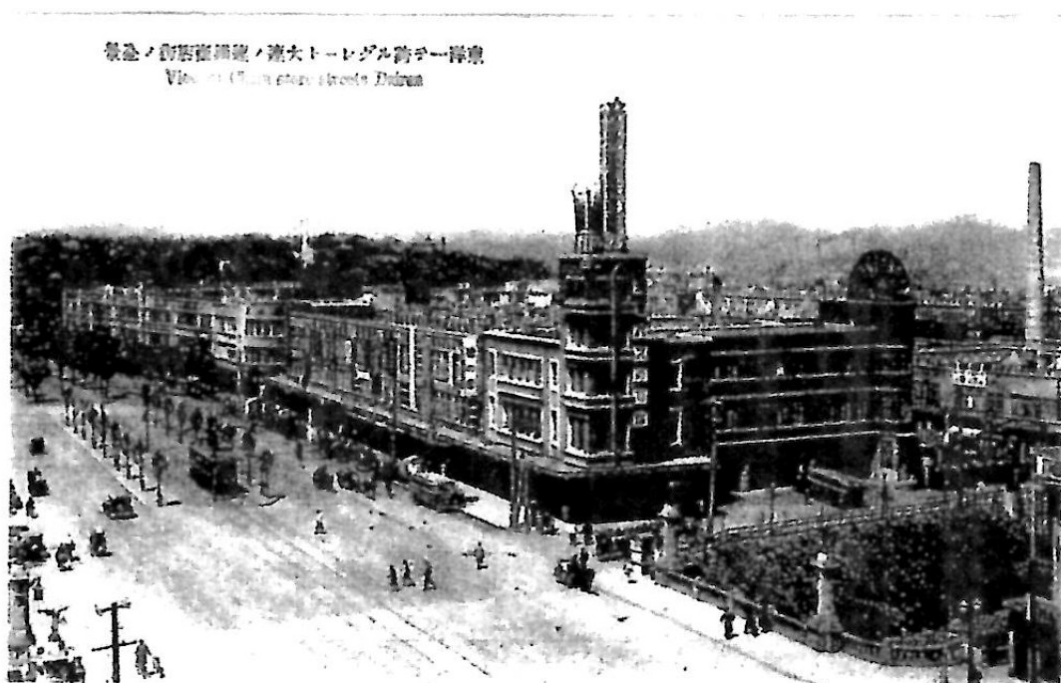
右：森洋行南隣りが丁子屋



たうんまっぷ大連から抜粋（昭和13年～15年頃）



連鎖街における丁子屋の見取り図 (増築後)



東洋一ヲ誇ルグレート大連ノ連鎖商店街ノ全景

連鎖街の建築構造は、その名の通り、区画ごとに途切れることなく、連なった近代的な建物で、ライフラインは電気、ガス、上下水道とも完璧に整い、トイレは全戸水洗で、街中清潔感に溢れていました。最も特徴的と云えるのは、Bブロックの地階に大ボイラー・大煙突があって、街区全体を一括して行なう中央集中暖房装置（セントラル・ヒーティング）が設置されていました。各棟全戸の窓際には、ラジエーターがあり、冬期は毎日明け方にスチームが通って起床時には暖かくなり、夜は十時になると止まる仕組みでした。また、この大ボイラーの湯を利用して、公衆大浴場が設けられ、町中の人々は年間を通じ毎日入浴を楽しむことができました。

大山通りから引越してきた我が家は、一階は店舗、二階表側が家族の住居で、裏側は職人達の仕立作業場でした。

次に掲げる写真は、昭和8年（1934）に京城丁子屋本社、満洲丁子屋の重役一行が来連したときの店舗前での記念撮影、および星ヶ浦海岸での姉兄弟5人です。

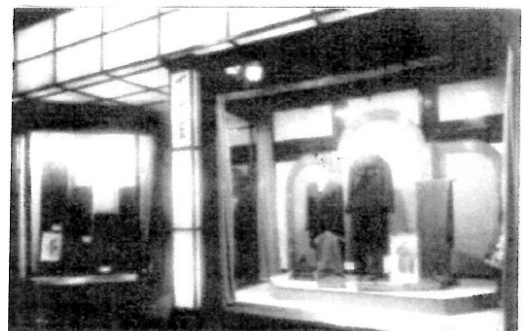
昭和10年（1935）頃になると、二階建て統一の内部通りでも三階建てに増築したり、裏の土地に余裕のある处では高層建築が建ち貸しアパートなどが増えました。我が家も昭和11年（1936）秋に二階建てを三階建てに増改築し、二階は全フロアを住居部とし、三階表側は仕立工場、裏側に裏地・ボタン類の倉庫を設け、また裏側の中二階は男性従業員宿舍となり



京城丁子屋本店・満洲丁子屋の役員一行
来店 昭和8年



星ヶ浦海岸にて姉と兄弟揃い



増築改装後のショーウィンドー



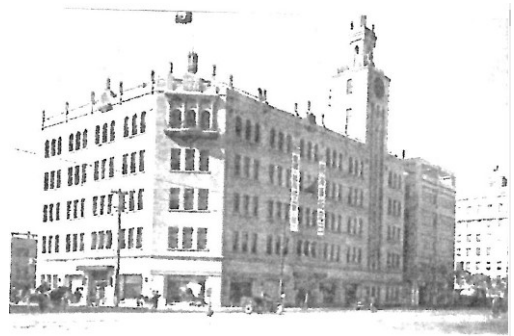
小波町の別荘



大連大山通り三越と郵便局



連鎖街子供神輿 弟と連鎖街天満宮



近代的麗容を誇る三越百貨店の景観

ました。改築工事中の一階店舗内で、夜間に長兄と二人で、ベルリン・オリンピック女子二百メートル平泳決勝で、河西アナの「前畑ガンバレ！前畑ガンバレ！」の絶叫放送を聴きました。

昭和10年（1935）の夏休みは、郊外の小波町の別荘で暮らし、静ヶ浦で海水浴、近所の紫河橋上からの鯊釣り、老虎灘沖での太刀魚漁などに興じ、日々楽しく一夏を過ごしました。この家は、後日父の実弟で、幼児の時に養子に行かれて吉田三治となった叔父に譲られました。大山通り時代から父の店の手伝いをし、その頃は支配人を務めていました。

春・秋の大連神社例季大祭は、大御神輿の渡御に従って、街の子供が担ぐ子供神輿も街中を練り歩き、お祝儀にお菓子やサイダーを貰って大喜びをしました。夏には、天満宮境内で昼間は子供相撲が催されて盛り上がり、夕暮れともなれば個々の商店が店先に思い思いの品を揃えて夜店が並び、金魚掬いやカキ氷と、夕涼みのそぞろ歩きが楽しみでした。お盆の夜が更けると、天満宮境内では盆踊りの輪が幾重にも広がり、賑わいをみせました。天満宮は後にベビーゴルフ場となり、子供ながらボールを追って遊びに興じました。



新三越の屋上にて 弟建四郎と



大連の中心股脈を極む常盤町連鎖商店街
と三越前の景観

昭和 12 年（1937）6 月に新しい大連駅が竣工・開業し、9 月には電車通りを隔て、連鎖街と向き合って三越大連支店が新装開店し、連鎖街は大連駅前と云う地の利を生かして、所謂「駅前商店街」の性格を持つこととなり、浪速町に次ぐ繁華街となりました。大山通り時代の旧三越は、大連中央郵便局と接して日本橋畔近くにありましたが、店内は履物を脱いで上がらねばならず、下足番に番号札と引



現在の旧丁子屋 2015 年撮影

替えると云う旧態依然の処がありました。が、新店舗は最新近代的なハイカラ気分が漂い、自ずと足が向く感じでした。

丁子屋と斜め向かいにあった文房具店・内田洋行では、しょっちゅうノート・鉛筆や書道道具などの学習用品を買っていました。南満工專の頃は製図器具など高価なセットも揃えて入手しました。改築するまでは内風呂がなかったので、入浴は大浴場に通いました。冬には湯上がりのタオルを廻しながら帰路につけば、凍って氷棒になるのを面白がっていました。本屋は金鳳堂、大阪屋號書店と二店舗もあって、少年漫画や参考書の購入に

よく利用しました。

現在、大連の旧建物取壊しは急ピッチで進められているようですが、連鎖街は銀座通りの東側部分は撤去済、西側部分は未だ残っていると云うことで、最近訪連された方が、現在の丁子屋跡の写真を撮って来てくださいました。一階部分は隣の森洋行と内部は連続しているようですが、二・三階の外観は昔のまゝのようでした。

三、大連での食生活

戦前の大連では、西洋料理・中華料理・日本料理など、色々な料理が豊富で自由に食べられました。父が家族を連れて、三ヶ月に一度は外食に出掛けました。吉野町の西洋料理店“大連亭”へは馬車に乗って行きました。フランス料理のフルコースです。日本人経営の有名な中華料理店“扶桑仙館”は、町内の目と鼻の先と近く、玄関を入ると係員が銅鑼を叩いて来客を告げます。大きな音に客は一瞬怯みますが、その歓迎ムードに気分は直ぐに和みます。出される料理を次々に平らげていると、終わり近くに出される火鍋子が食べられなくなるので要注意でした。

“扶桑仙館”の他にも電気遊園(のちの小村公園)の西崗子に面した裏門近くに、“登瀛閣”という支那料理店がありました。時の満鉄総裁が大いに支那料理通を發揮し、袁世凱の料理人を連れて来て、満鉄が出資し、此処に料理店を経営させ、



大連連鎖商店街
中華料理店扶桑仙館



大連市伏見台
電気遊園 登瀛閣

建築から調度品まで運営一切を委託していたもので、本格的な北京料理がご自慢でした。子豚の丸焼きなどをそのまゝの形で銀の盆にのせ、主客に披露したのちに切り分けて出すなど、如何にも支那風でありました。二階の窓からは大連湾が一望でき、素晴らしい眺めが楽しめる場所でもありました。

母に連れられて浪速町へ買物に出掛けるときは、何ととってもデパート幾久屋の食堂でお子様ランチを食べるのが目的の一つでした。それと帰途磐城町の浪速鮓に立寄って食べる子供用ちらし寿司も

楽しみでした。

日常の家庭料理は、当然母も手懸けていましたが、主に雇いの中国人料理人が、朝昼晩三食とも、我が一家と住込み従業員の分を賄ってくれていました。

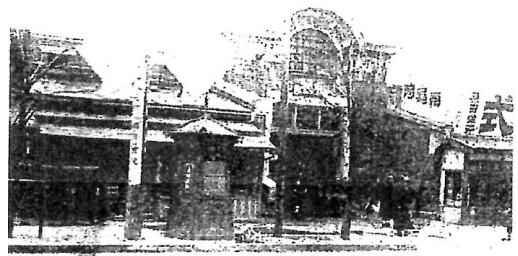
朝食は和食が主で、味噌汁と海苔・漬物が必ず付きました。父の朝食だけは別で、オートミールに牛乳と半熟卵に決まっていました。

昼食は、家にいるときは、斜向かいにある日露パンで買った食パンのトーストかあんパン・ジャムパン・クリームパンかでした。通学用弁当は母が作ってくれましたが、お菜には明太子・焼塩鮭・蒲鉾・コロッケなどがよく入っていました。

夕食はオムレツ・カレー・豚カツ・肉団子（今で云うハンバーグ）や、焼き、煮るの魚類も豊富でした。月一回は必ずすき焼きがあり、家族一同で鍋をつゝき食べました。時には餃子も作ってくれました。その時は皮に具を包むのをよく手伝いました。あちらでは、湯で茹でる水餃子が主で、焼餃子は日本に引揚げの後初めて食しました。その外にも、ユーピン（メリケン粉を水に溶き幾重にも折り込みこねて薄焼きにしたもの）・ガタタン（中華風すいとん）なども美味しくいただきました。何と云っても忘れられないのは、大浴場へ行って湯上がりの帰途、浴場前空地の中国人屋台で、蒸したての肉汁たっぷり、「小籠包」ほどの大きさで一個一銭の「天津包子」を十個買って、道々食べた美味しさです。態々銭湯へ入浴に行った

のも、これがあったからと、懐かしい思い出です。

常盤橋の辺に、古くから信濃町市場がありました。米穀・薪炭・青果・鮮魚・精肉・食料雑貨・日用品の全般に亘る小売市場でした。市内に七ヶ所あったうちで最も古い市場でした。



信濃町市場

この信濃橋市場は、新大連駅の開業に伴う駅前広場の整備のため、移転を余儀なくされ、昭和 12 年（1937）に羽衣町（新三越の裏手）に鉄筋コンクリート造り三階建ての堂々たる近代設備完備の市場が完成して移転し、以後は大連市場と称するようになりました。

一階の内部は回廊式に通路を挟んで日・華人商店が店を連ねており、食料は何でも揃う市民の台所でした。二階も回廊式に、呉服店・洋服店・洋品店・小間物屋・本屋・文具店・玩具店・和洋菓子屋等凡ゆる業種の店舗が並び、恰もデパートのようで、三階はホール等の文化施設や事務所関係の入居があり、静かな雰囲気でした。



駅前広場として整備された
信濃町市場跡地の全貌



商業界に異彩を放つ大連市場の壮観



文化施設の完備せる大連市場の偉観

米・味噌・醤油などは専門のお店に注文すれば、直ぐに配達してもらえますが、日頃の野菜・魚肉類の買出しは、母が取り仕切っており、毎日が市場通いでした。いつも種別毎に決まった商店での買物でした。肉類と野菜は中国人の店でしたが、日本語が通じ言語の不便は全く感じられませんでした。

お菓子類も沢山ありました。毎日のお八つは用意されていて、欠かさず与えられました。何もないときは五銭か十銭貰って、お菓子屋さんで森永や明治のキャラメルを買って食べました。時にはチョコレートを買ったこともありました。到来物の羊羹やカステラも、ドーナツやケーキも、よく口にしました。しかしそれも戦況悪化前の話であり、徐々に食物は窮屈になってきました。

落花生、ピーナッツと呼び名は変われど、思い出深いのは赤い皮付き南京豆。中学校帰りの道すがら小村公園前で、リヤカーに積んで売っていて、とても廉価で一銭でも結構な量があり、空腹を満たすに格好のものでした。いつも買って食べていました。

一寸贅沢と云えば、“甘栗太郎”の天津甘栗です。店頭で大きな鉄鍋に細石と一緒に生栗を煎っていて、その煎りたてを浪速町本店と常盤橋天満屋ホテル一階で売っていました。

日本から大連に来た人が帰るとき、手土産として沢山の物を持ち帰りました。時計・カメラ・煙草・砂糖・ザラメ等々で

す。大連は免税港なので、これらの商品は関税がかゝらず、少々廉価だったのです。この他、良く歓迎された土産品は春雨でした。支那素麺とも呼ばれていて、大変喜ばれました。

四、学生時代

(1) 大連常盤小学校

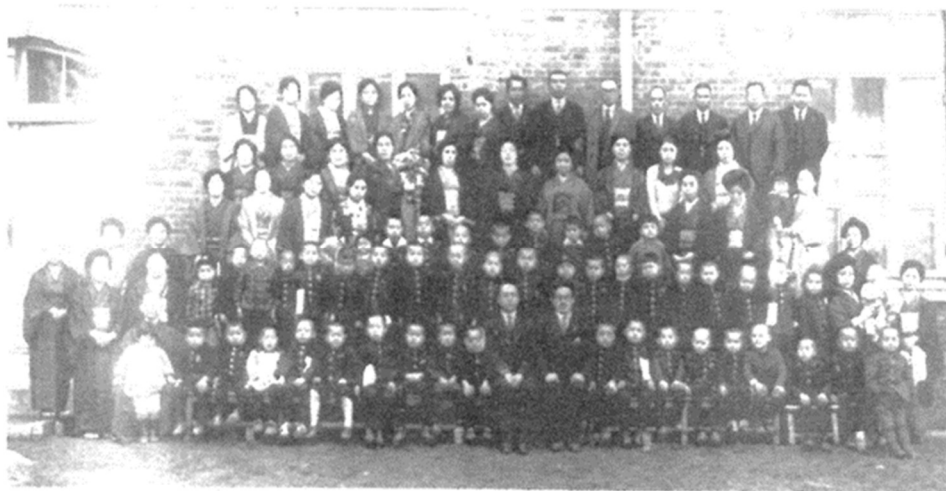
昭和8年(1933)4月4日、学齢に達して、最寄りの大連常盤小学校に27回生として入学しました。元は、明治44年(1911)3月に開校した大連第三尋常高等小学校という大連では三番目に古い学校ですが、常盤橋近くということで、大正13年(1924)4月1日に大連常盤尋常小学校と改称されました。所在地は西公園町8番地でした。



大連常盤尋常小学校
南東角よりの眺望



大連常盤尋常小学校校章



昭和八年四月四日 入学記念
校長 謝康寧先生
二級教授 土川卓郎先生

大連常盤小学校入学記念写真

昭和8年4月4日



常盤小学校六年二組



土川・久保両先生
昭和 38 年



土川・久保両先生
昭和 43 年

各学年は、1 クラス約 50 人の男（青組・黄組）女（赤組・桃組）四クラスで 200 人程です。私は二組（黄組）ですが、入学 52

名、転入 23 名、転出 26 名、卒業 49 名でした。6 年間通年の者は 32 名ですが、転入生を含めクラスメートは 75 名です。平成 29 年（2017）4 月現在、連絡のとれるクラスメート生存者は僅かに 7 名のみとなり、淋しい限りです。

我ら 27 回生二組の担任教師は、一年入学から三年まで土川卓郎先生、四年から六年卒業まで久保勘一先生でした。両恩師の学習指導により小学課程の学業を修め、同時に将来の人生基盤となる薫陶を受けて、今に至っていることを沁々と思ひ知らされて、感謝の一言に尽きます。

茲に両恩師のご略歴を記しておきます。

土川卓郎先生

明治 40 年（1907）8 月 1 日岐阜県揖斐郡池田町で出生 昭和 3 年（1928）3 月岐阜師範卒 昭和 4 年（1928）3 月旅順師範学堂研究科卒業後、兵役を経て同年 9 月大連朝日小学校に奉職 昭和 7 年（1932）4 月常盤小学校に転任 昭和 8 年（1933）4 月～11（1936）年 3 月の 3 年間は我ら二組を担当 次いで昭和 15 年（1940）3 月まで中国人小学校に当たる土佐町公学堂で奉職し、以後北京へ留学して中国語の習得を深めて復職し、終戦まで約六百人の教え子を育成しました。

戦後昭和 22 年（1947）4 月岐阜県公立学校教諭となり、揖斐郡小・中学校長を歴任 昭和 42 年（1967）3 月退職 引続き昭和 49 年（1974）9 月まで不破郡赤坂

町教育長、揖斐郡池田町教育委員を務む
昭和 57 年（1982）6 月、来日した土佐町
公学堂時代の教え子と対面の新聞記事が
報道される。その後もこれらの教え子と
の交流のために中国語の修練を続けてい
たと、ご自身で仰言ってみえました。平
成 17 年（2005）7 月 3 日逝去 97 歳 土
川先生は、教育畑一筋に撒し、大連時代
の中国人を含む多くの子弟を熱心に育て
られた真の教育者と云えます。

久保勘一先生

明治 43 年（1910）10 月長崎県五島で出
生 昭和 5 年（1930）3 月長崎師範卒 昭
和 10 年（1935）4 月大連常盤小学校に赴
任 昭和 11 年（1936）4 月～14 年（1939）
3 月の 3 年間は我々 27 回生二組を担当
次に女子組を 1 学期間のみ担任し、同年
7 月末に教職を辞し、市内沙河口でゴム
工場の経営を始む 戦後長崎県に引揚げ、
漁協組合長・県漁協連合会長を経て県会
議員・県会議長から、昭和 37 年（1962）
参議院長崎地方区で初当選、農林政務次
官・文教常任委員長を歴任して国政の一
翼を担い、二期目途中の昭和 45 年（1970）
2 月に転進して長崎県知事に当選し、連
続三期を務む 平成 5 年（1993）11 月 23
日逝去 83 歳 久保先生は、独立不羈、
政治界に転身して自ら雄飛を果たした実
行力の持ち主、戦後困難の時期を生き抜
くための情熱を身近に示してくださいま
した。

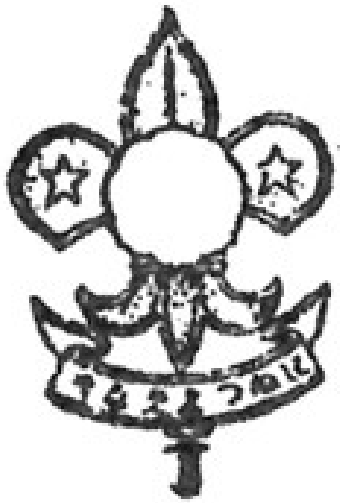
昭和 35 年（1960）頃には、漸く世の中

も落ち着きが戻りつゝあり、各学校の同
窓会なども行われ始めました。我々二組
は土川先生を迎えてミニクラス会を行な
うようになりました。その頃に久保先生
が参議院議員当選で初めて消息が知れた
ので、両先生を一堂に囲む会を企画し、
昭和 38 年（1963）8 月に「雲仙ホテル」
で、昭和 43 年（1968）8 月には岐阜県笠
松町「四季の里」で、と二回の機会を設け
ました。

五年生に進級して大連少年団に入団、
常盤隊に所属で、隊長は久保先生が務め
られました。ネッカチーフは常盤小スク
ールカラーの「濃いグリーン色」でした。



大連少年団常盤隊（ボーイ・スカウト）



団章

綱領：

- 一、忠孝を重んじ義勇奉公の誠を致す
- 二、正義を尊び博愛精神の実を挙ぐ
- 三、身心を練り質実剛健の気を養う

この三綱領を具体化し、敬礼は三本指を揃えて行ないました。「そなえよつねに」をモットーに団体訓練を通じて心身を鍛え、社会に奉仕する青少年運動の一環でした。森林や海浜でのキャンプは自立克己協力の精神が鍛えられ、街頭での交通

整理など社会ルール観念の習得に大いに役立っています。

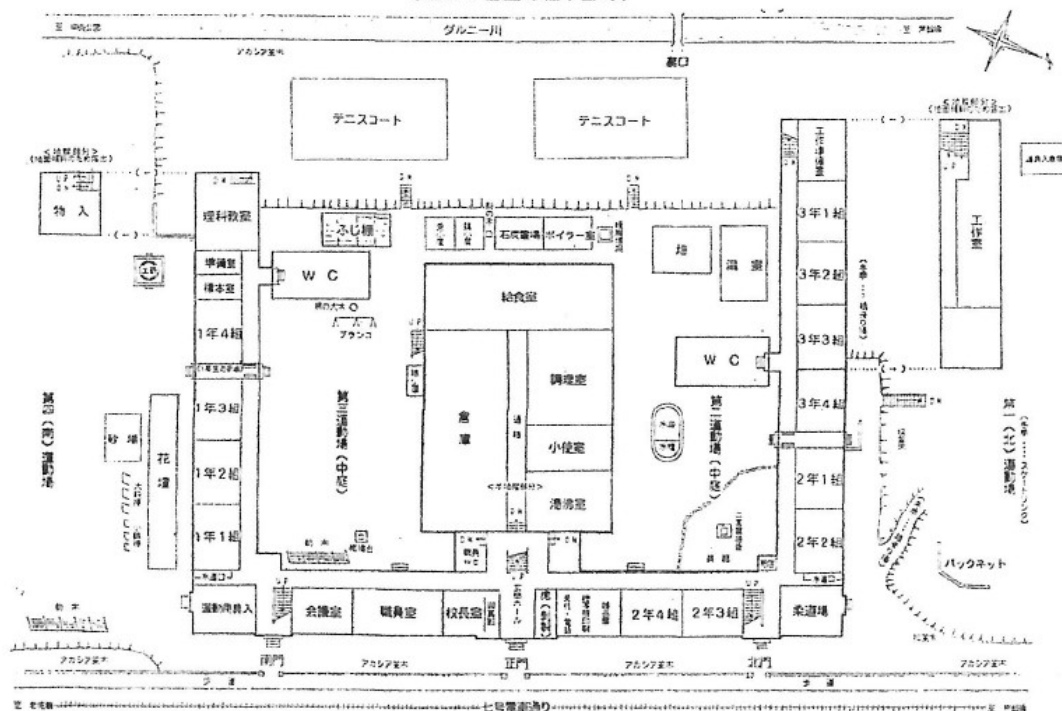
校舎の写真は多くの方から古いスナップや母校再訪の折りの現況がいろいろと披露されておりますが、校舎内部はどうなっていたのだろうか、記憶のあるうちに当時の面影を記録しておくことが必要だろうと考え、平面図を作成しました。建物は一部地階付きの総二階建てでした。二階の北側一番奥の最も寒い部屋が男子六年男子一組と二組の教室に当てられていました。女子六年三組と四組および五年三組・四組は暖かい二階の南側にありました。「男女七歳にして席を同じゅうせず」の規範が歴然としておりました。それなのに、男子六年の教室の手前には保健室があり、応急手当や昼休みに肝油を飲みに女子生徒が保健室に来るのは当り前で、来た序でに男子生徒の教室が覗かれていました。また、土俵は南運動場に設けられていましたが、男子生徒が体操時間に褌しを締めた裸身で相撲をとる様子を、二階の窓から女子生徒が面白がって覗いていました。



大連常盤小学校全景

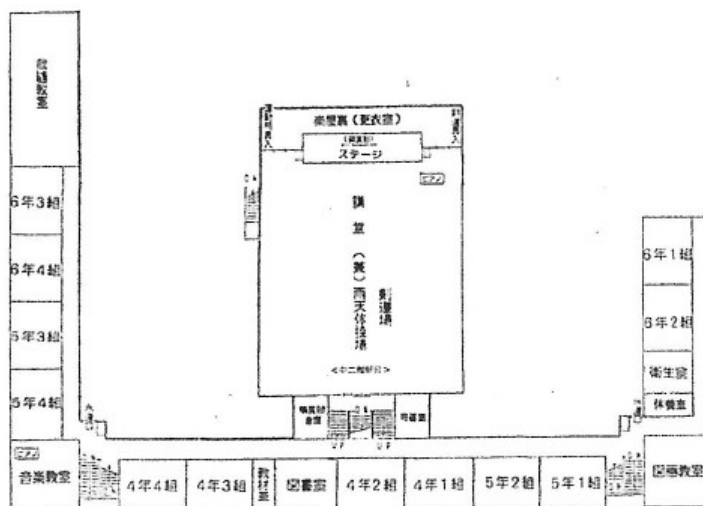
1

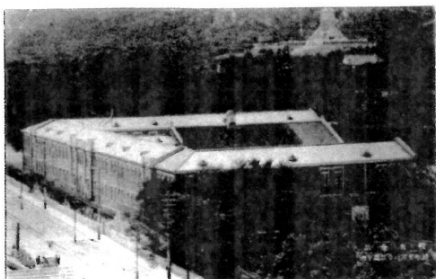
大連常盤尋常小学校 校舎平面図（一階部分）
昭和8年4月入学 ～ 昭和14年3月卒業
（第27回生の在学当時）



2

大連常盤尋常小學校 校舍平面圖(二階部分)



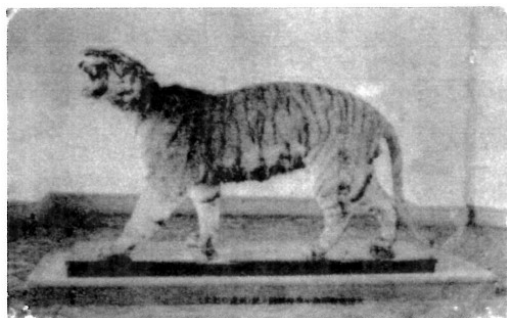


校舎全景

今でも私は小学校の校歌は歌えます。同窓会の時には皆で一緒に歌いました。歌詞の冒頭は「まぢかに仰ぐ忠霊塔をゝしまことおもいつゝ」です。学校の近くに忠霊塔がありました。また、学校のテニスコートの裏側にダルニー川と云う小川が流れて常盤橋の下を通っていました。新しい校歌は、昭和12年(1937)4月に制定されました。古くから明治41年(1908)5月制定の大連小学校共通の校歌がありましたが歌った記憶はありません。それまでは「ダルニーの水我庭の……」と云う歌を校歌と思っていたが、これはダルニール行進曲と云う別の歌で、運動会などで歌うものでした。



大連西公園の猛虎

大連常盤尋常小学校所蔵
剥製の虎(丙寅紀念)

常盤小学校の正面玄関を入ると、右手に大きなガラスケースに収まったシベリア虎の巨大な剥製が置かれていました。学校のお守りと云われ、常盤小の名物でもありました。その猛々しい姿は、常盤小出身者には齊しく強烈な印象を残しています。虎視眈々と辺りを睥睨する容姿は弩迫力に満ち、新入りの一年生は怖じ気づき、在校生も急ぎ足で通り過ぎていました。外来者も度肝を抜かれたと云う評判でした。

ロシア統治時代に、この虎は時の奉天総督から極東太守アレキセイエフへ献上され、戦後も明治44年(1911)秋まで西公園で飼育されていました。虎の死後は剥製にして常盤小にて保存されていましたが、どうして常盤小の玄関番になったのかは詳らかではありません。

日露戦争当時、一人の日本人婦人が機密書類を盗んだ女スパイとして捕らえられ、虎の檻に放り込まれて咬殺されたとの風説が流され、公園の虎の檻の立て札

にもそのことが記されていました。明治の戦時画報には、絵入りでその事件が報道されていました。

西公園は、初め市の西端にあったので、そう呼ばれていましたが、古くは虎の檻があり、巨大なシベリア虎が飼育されていたので虎公園とも称せられていました。市街地が次第に西に発展するに連れて、市の中央に位置する格好となり、昭和3年（1928）に、中央公園に改称されました。

余談になりますが、常盤小の所在地は西公園町ですが、改称されても町名はそのまま変わらず、満鉄本社近辺の東公園町も東公園が消滅した後もそのままでした。



大連虎公園



風致に富む冬の大連中央公園

平成12年（2000）8月に、『われらが母校 名はこれ常盤 ～二七回生の軌跡～』を自作で80部作成し、当時ご存命でした土川先生をはじめ、同期二七回生男女の生存者へ無償配布しました。これは、終戦のどさくさに、また動員先から直接引揚げ復員したために、思い出の写真を失ったものを共有して、同じく郷愁を分かちあえたら・・・との思いに駆られ、男女クラスメートに呼び掛けて集めた資料の複製写真集です。内容は次の通りで、A4版、カラーコピー、116ページでした。



われらが母校名はこれ常盤
～二七回生の軌跡～ 表紙

第一章 母校『大連常盤小学校』のプロフィール（沿革・歴代校長・校章・校旗・校歌・校舎等）

第二章 われら二七回生 入学から卒業まで（各クラスの入学式・一年から五年までの修了と六年卒業記念写真等）

第三章 忘れ得ぬ恩師たち（思い出の

写真・文集等)

第四章 大連常盤会および同窓会（スナップ写真等）

付録（1）『卒業記念写真帖』（複製）

付録（2）常盤小二七回生名簿（組別）

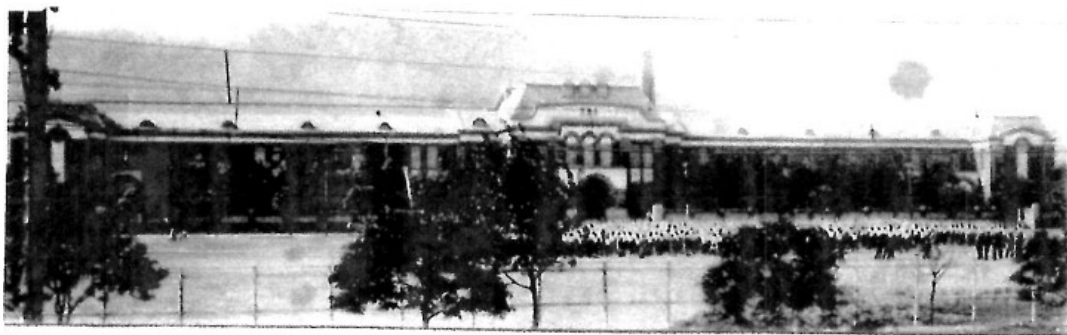
受取られた皆様方からは、心底喜んでくださり、土川先生からは次の歌をいただきました。

「ふるさとは遠い異国の街となり 思い出かなし あゝ吾がときわ」

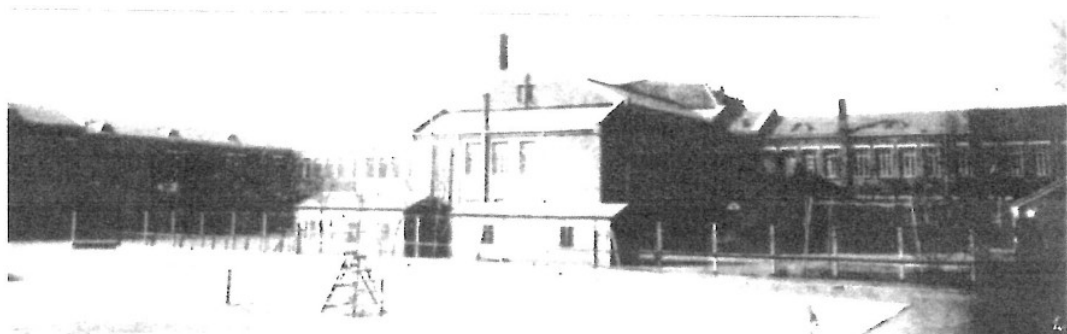
（2）大連第二中学校

当時の大連には男子中等学校は、官立

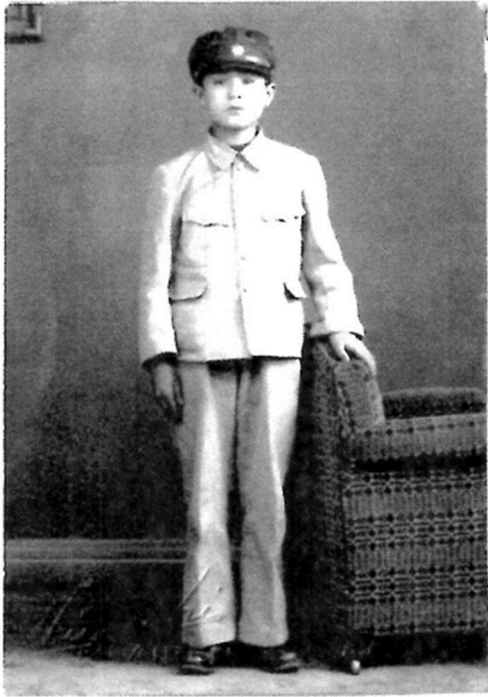
大連一中・大連二中・大連三中・市立大連中学の普通校4校と、私立大連商業・市立大連実業・官立大連工業の3校がありました。普通校4校の入学試験は同時に共通で合格者を、住所近くの学校を主に成績順に配列して学力が概ね均等になるように配慮されていました。たゞし、兄が就学および卒業の者は、兄と同一の学校に入学することを許されていました。女子の高等女学校7校も同様の仕組みでした。各学校とも殆ど同一ですが、各学年は概ね50人の組が5組あって、1学級で約250人、全校生徒は5学級総計で、1,250人程でした。



大連二中校舎正面全景



大連二中校舎背面全景



大連二中入学記念

私は兄が二中在学中でしたので、昭和14年（1939）4月に大連二中に入学しました。

二中の校歌は、大連一中とほぼ同じで、第二節の歌詞の三行目が、一中の「大連市なる中学校」とあるのが、二中では「大連市なる我が二中」という違いだけでした。二中の初代丸山校長は一中の副校長から赴任して、兄弟校なので校歌は同一でよい、とのお考えだったようです。勿論校章・校旗・綱領などは異なり独自のものでした。

入学すると、先ず「五綱領」「実行七則」を徹底的に叩き込まれました。特に実行七則の「一、外国人ニ対シ公正ナル態度ヲ持ツコト」は強く仕込まれました。昭

和16年（1941）には「四、指導者トシテ他民族ヨリ信頼ヲ受クルニ足ル品位ト実力ヲ養フコト」に改められました。これがこの学校の校風でした。

一組に金州から汽車通学する郭と云う中国人生徒がいました。彼はずば抜けて優秀で、勉強は通学の往復車中で予習復習をするだけだったそうです。一年から四年までずっと一度も日本人に譲らずに首席で通し、四年修了で最難関の東京第一高等学校に合格しました。終戦直前にそれを予知したのか故郷に帰り、旅順工科大学予科に転校しました。二中に在学中から彼には一目置き、敬服しておりました。戦後、日中国交回復の後、彼が来日する度に、東京・大阪・名古屋・福岡の各地近隣のクラスメート挙げての大歓迎で、親交を深めておりました。平成17年（2005）4月に彼は惜しくも亡くなりました。

昭和15年（1940）は、皇紀二千六百年に当たり、日本全国に亘って種々の祝典が執り行われました。丁度私達が中学二



家族揃って（父のみ不在）昭和15年

年の時でした。大連に於いても、学校内で各種の祝賀会・運動会などが開催されました。祝賀ムードは、11月10日の紀元二千六百年祝賀式典で最高に盛り上がりましたが、これが終わると急速に日常生活に逼塞感が漂い始めました。物資が不足してきて食料は配給制に衣料も切符制にと、日常生活は随分窮屈になってきましたが、大連は日本内地に較べれば、未だましな方だったようです。

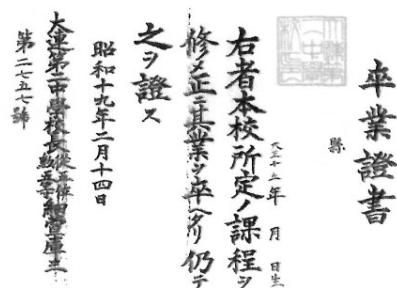
少し遡りますが、二年第一学期に担任の先生から陸軍幼年学校受験を薦められ、一時はその気になっていました。処が夏休み終了間際に、急性盲腸炎を患い、大連日赤病院で入院・手術をし、二学期初めから約1ヶ月間の病欠が続き、復学したら学業遅れが祟り、黒板が見え難く近視となり、幼年学校受験は断念せざるを得ませんでした。これで軍人にならずに済みました。



大連二中五年一組
海兵入校者壮行会

二中では、三学年のときに、約1ヶ月かけて九州から関東の各地を巡る修学旅行が例年行なわれており、そのための積立てもしておりましたが、この年からは中止となりました。そしてその翌年の昭和16年(1941)12月8日、遂に大東亜戦争が勃発しました。それからは授業の合い間に大連船渠や周水子へ出掛けたり、旅順の関東神宮ご造営への奉仕もありました。斯くして余り授業を受けることなく、卒業を迎えることになりました。

常盤小の「われらが母校 名はこれ常盤」と同様に、クラスメートに呼び掛けて、各種資料や写真を収集し、「大連二中とはち会」(十八回生の回顧ととはち会の歩み)を、平成17年(2005)8月に40部作り、実費二千円で頒布して大変喜ばれました。



大連二中卒業證書

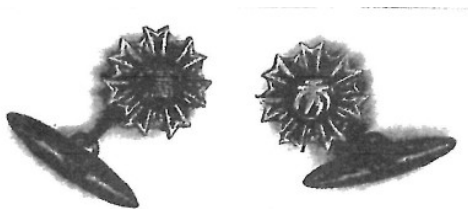


二中第十八回生バッジ



大連二中とはち会 表紙

二中ゆかりの思い出の品があります。一年生修了で授与された学業「優等賞」と、五年生時の模擬試験高得点「優秀賞」と云う、二つのバッジです。受賞から一年間は右胸に着用を許されていました。内地へ引揚げ後、長兄友人の電器屋で、ネジ棒の代わりにカウスボタン用の鎖をハンダ付けしてもらい、ワイシャツ着用時に使用していましたが、優等賞の方のハンダがとれて落としてしまい、いくら探しても見つからず、今は優秀賞の方だけが残っています。未だに残念でなりません。

優等章・優秀章バッジ
(カウスボタンに改造)

(3) 二中愛鳩部

私の次兄が自宅屋上で5羽ほどの鳩を飼育していて、それを手伝っている内に、私が後を継ぐことになりました。私は二中に入って部活動には愛鳩部を選び入部し、卒業までずっと愛鳩部部員を続けました。ですから二中時代の記憶と云えば、愛鳩部のことが最も印象深いものがあります。

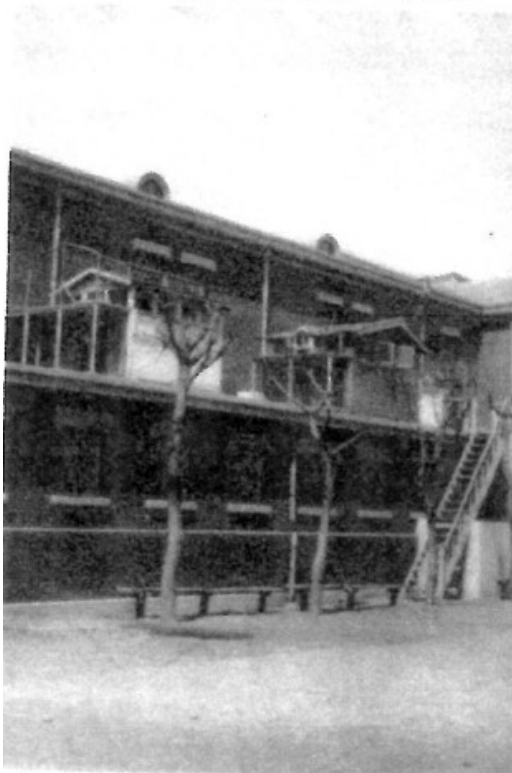
二中愛鳩部は、昭和9年(1934)4月に発足し、当初は「愛鳩会」と呼称していましたが、同11年(1936)4月に「愛鳩部」と改称、同16年(1941)4月には軍隊式に「愛鳩班」になり、更に戦時色深まった同18年(1943)4月には「軍鳩班」と呼び名が変わりました。

愛鳩部では、上級生が下級生を苛めるとか扱ごくことなどは一切なく、日常和やかに上下隔てなく接して指導実習する風潮があり、今にして思えば、部活動を通じて人格形成などに大いに役立っているものと、確信できます。

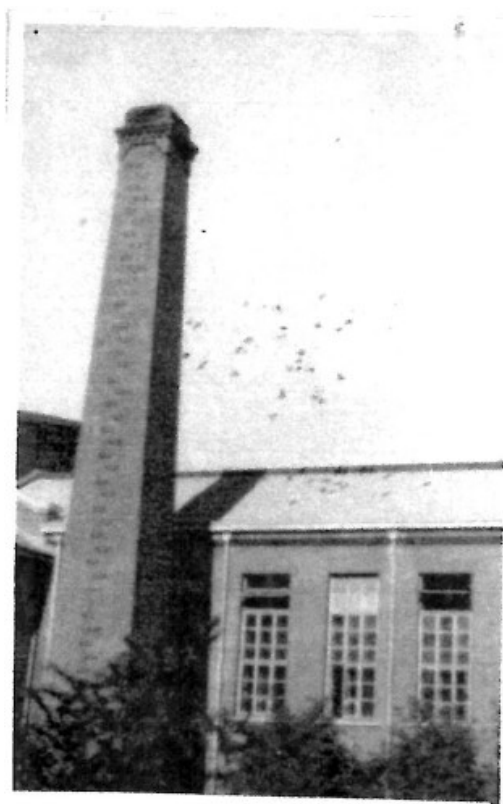
日常部員の活動は、相手が生きものですから、年中一日たりとも休みなしです。五年生を除き、一年～四年生部員を数組に分け、日毎の当番を担当します。早朝登校して、先ずは全鳩を鳩舎から出し、校舎の上空を半時間ほど飛翔運動をさせます。その間に下級生は、鳩の排泄物で汚れた鳩舎内を清掃し、朝の餌さを用意します。上級生は巣箱内の抱卵、育雛の様子などを見て回ります。昼休みは自ずと鳩舎周りや部室に屯し、奔放に過ごし



自宅旧鳩舎



大連二中愛鳩部鳩舎全景



大連二中愛鳩部飛翔訓練



巣箱内抱卵する親鳩

ます。放課後も当番の作業は朝と同様で、一切を終了して下校できるのは概ね夕暮れとなりました。

当時、生後半年くらいの多くの若鳩を、初めは鳩舎の直ぐ近く、関東州庁前の広

場から放鳩訓練をしました。次には二百メートル先の花園広場から、その次は一キロ先の電気遊園(小村公園)から放す、と云うふうに段々距離を伸ばしていきました。週末には汽車で金州、普蘭店など

へ出掛け、更に遠くには夜行列車に乗り籠に容れた鳩を運んで得利寺、大石橋、遼陽、奉天へと順次足を伸ばし、翌朝放鳩します。近距離の場合はほど帰って来ましたが、距離が伸びるにつれて戻って来ない鳩もありました。鳩舎では当番が待機していて、帰巢本能で飛び続け戻って来た鳩を收容します。放鳩して帰校すると、鳩はとつくに鳩舎に帰っていて涼しい顔をしてると云う次第で、無事帰巢した鳩の姿を見るとホッとしたのです。

一般的には、鳩の成長は結構早いものです。餌さの主体は玉蜀黍、白豌豆、麻の実の混合餌で、大豆や高粱は与えませんでした。特に良いのは麻の実で、それを与えると卵をよく産みました。時には消化剤として、塩土（エンド）と云って、煉瓦と牡蠣の殻を砕いて粉にしたものを塩と水で練りタドン状に丸めて乾燥させたものを突つかせていました。

初めの頃、名称も平和的な愛鳩部と云うくらいでしたから、私達の部活動は戦争と全く関係ありませんでした。その後、軍鳩班と名が変わり、関東軍が年二回子鳩を買上げるようになり、班としても子鳩の増産を図らねばならなくなりました。勿論、私達は金儲けのために鳩を飼育するつもりは全くありませんが、軍の要望に応えると云う一種の矜持にはしていました。

買上げには、簡単な検査がありました。胸骨屈曲の有無、咽喉内ジフテリア爛れの有無をチェックします。検査に合格し

た三十羽から五十羽を毎回買上げてもらいました。一羽 5 円で当時としては結構いゝ価格で、その代金は全て班の資金に受入れ、主に鳩の餌代に使用して、いゝ餌さを与えられるようになりました。当初は、学校からの活動費予算で賄っていましたが、関東軍のことがあって以来、予算が削られても資金は潤沢で、班の活動に支障はありませんでした。

学校では軍事教練の授業が週に数時間ありました。その他にも野外演習があって、生徒は個々に三八銃を担い隊列を組み郊外へ行軍します。軍鳩班員は、十羽ほどの鳩を入れた籠を自転車の後部に積み、行軍の後について行きました。途中の要所々々でその場の状況を通信紙に記載し、小さな丸い通信筒に入れて、鳩の片脚に装着して放ちます。行軍は目的地に達すれば、敵味方に分かれて匍匐前進・突撃などの演習を行ないます。その演習状況を詳細に通信紙に記し、従前同様に処理します。

鳩舎で待機の留守番班員は、帰還した鳩を收容し、通信筒の通信紙を在校の軍事教官に手渡します。

全ての鳩を放ち終えますと自転車で先に帰り、鳩の世話をします。

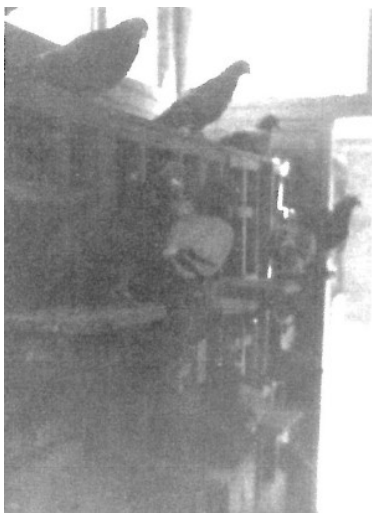
軍鳩班の班員は、実技演習に参加していませんが、演習の一環として通信文報告に伝書鳩を放鳩することで参加していて、何も忌避している訳ではなく、また、教練教科の評価が低かったと云うこともありませんでしたし、学校当局にも公に

認められていることでした。

戦前から続けられていました市内全中等学校体育大会は、毎年大連運動場で行なわれていました。開会式の後に各校鳩部の一斉放鳩があり、しばし上空に鳩の勇壮な飛翔が続き、やがては夫々の鳩舎へ向けて去って行きます。愈々各校の対抗競技が始まり、選手の熱戦と相互の応援合戦が終日場内一面を蔽いつくします。放鳩を終えた部員は、野外演習の時と同様、応援合戦に加わることなく帰校し、帰ってきた鳩を鳩舎に収容します。



馴致網内に出て水浴び



鳩舎内部



通信筒装着の伝書鳩



孵化直後の雛鳩

戦時になって、シンガポール陥落などの記念祝賀行事が、大連神社社前や忠霊塔広場で、全中等学校生徒参加の下に行なわれました。式典終了後に、各校鳩部の一斉放鳩は、大連運動場に於ける体育



愛鳩部卒業生を送る



大連運動場での放鳩



大詔奉戴日 放鳩帰巢待機

大会と同じ要領でした。

全校生徒はその後に市内を行進して帰校しました。

戦況不利の状況になり、祝賀式典に代わり、毎月八日は大詔奉戴日として、全校生徒は木銃を携行して登校前に、大連神社または忠霊塔前に集合、全員整列して戦勝祈願を行なった後、市内を行進して登校しました。初めのうちは放鳩行事も続けていましたが、終盤には打切られました。

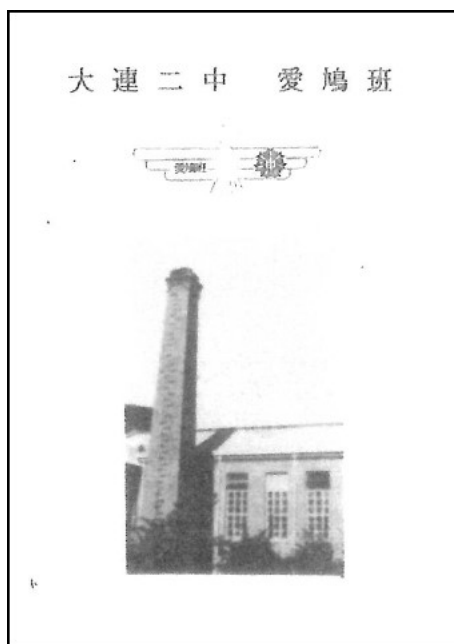
大連の中等学校の大連一中、大連二中、大連中学、大連商業の各校には、夫々鳩部がありました。女子校では唯一、神明高等女学校にありました。協和実業など中国人学校にあったかどうかは知りません。偶に競翔会などで顔を合わすくらいで、普段は各校間の交流はありませんでした。

小生所持の他、旧部員に呼び掛けて、資料を収集取纏めて、小冊子「大連二中愛鳩班」を40部作成し、平成17年(2005)6月15日に、名簿上の存命者に無料配布して、先輩諸賢からも多大の感謝称賛を受けました。

引続き、旧部員に「愛鳩部大集合」を呼び掛け、平成18年(2006)10月11～12日、於：熱海市網代・ムクデン満鉄ホテル、参加6名で、「大連二中 愛鳩部 懇親会」を催し、24名の方に開催報告をしました。

“NPC”(2599) & “Nichu Pigeon Club”(2600)のバッジ二つが、15回生

安田靖一先輩から保管方を託され譲り受けました。(2600)の方は、紀元二千六百年記念に作られたもので、私も持っていたのですが、引揚げ後暫らくして紛失してしまい残念至極の思いでしたので、大変懐かしい思い出の品で、未だ英語が使える時代でした。貴重な二中愛鳩部の記念品として、大切に保管しております。



大連二中愛鳩部 表紙



懇親会記念寄書き色紙



大連二中愛鳩部懇親会



2599

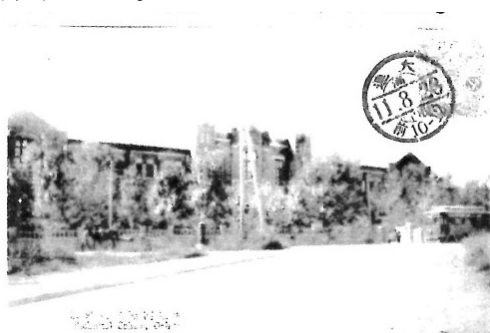


2600

愛鳩部バッジ二個

(4) 南満洲工業専門学校 鉦山工学科

昭和 19 年 (1944) 4 月、私は南満工専
鉦山工学科に入学しました。元来、物理・
化学は嫌いで、地理・歴史が好きな文科
系、しかも商売人の子が、市内には大連
高等商業学校 (後の大連経済専門学校)
があると云うのに、何故に理科系の工業
学校へ進学したのでしょうか、不可解な
気もしますが、それも当時の世相風潮の
所為でした。



南満工専校舎正面全景



南満工専入学記念



鉦山工学科生一同 (新入生歓迎会)

昭和 19 年 4 月 満洲資源館前



鉦山工学科第一学年クラス会

昭和 19 年 5 月 東京菜館



南満工専制服制帽



弓長嶺鉱業所事務所前

弓長嶺第二鉱区
豎坑を下り切作業の実働弓長嶺第三鉱区
インクライン設計測量実施

8月迄の前般二ヶ月は、磁鉄鋼を産出する第二鉱区で、毎朝トロッコで坑道の奥深くまで進み、滑車付き木枠箱で豎坑を降下し、各坑道最先端の切羽での採掘作業を監督するのが任務でした。デパートのエレベーターとは異なり、吹き曝しの木枠箱での豎坑の急降下は、一種恐怖心を味わされます。坑道の奥に進むときは、カンテラと小鳥を鳥籠に入れて持参します。悪性ガスの予防対策の必需品でした。切羽では鑿岩機で数箇所穴を開け、ダイナマイトを装填して爆破し、粉碎した鉱石をトロッコに積込み運び出します。現場での掘削やトロッコ積込み作業などは囚人や俘虜が殆どで、無防備で現場に立入るには、かなりの勇気が必要です。危険はまだあります。鉱石搬出に便利のように、上階から下階へ落とす蟻地獄状の穴があり、見た目には平坦ですが、一步足を踏込むとずるずると沈み込みます。私も一度はまり、必死に逃れました。このように、危険との隣り合わせの毎日でした。そして、宿舎に帰ってからがまた毎日大仕事でした。脱いだ衣服を沸騰した湯に浸けて、筋目に真っ赤に並んだ蝨を一粒づつ潰す作業に大車輪でした。

後半は、五軒ほど山奥に入った未開発の第三鉱区へ徒歩で通う毎日でした。こゝには赤鉄鋼が埋蔵されており、採掘開発用インクライン設置のための測量図作成が任務でした。現場が遠く、炎天下に陽を遮る処もなく難行苦行の作業でし

た。測量技術を実際に試せる仕事で、一同張り切って対応しておりました。苦力と接することなく、我々だけの作業でしたから、蝨対策からは解放されました。我々は学徒動員としては、待遇は良かったと思います。宿舎は開放的で、帰寮すれば、食事は用意されており、入浴も自由でした。酒・煙草が毎月定量無償で配給され、当時私は未成年なので、押入に一杯山積みに溜り、同僚によくねだられましたし、時々町へ出掛け煙草と豚肉の物々交換をして、皆で肉鍋を囲み食しました。

また、一般の初任給ほどの手当をもらい、貯金して裕福に過ごしていました。後日内地での動員状況などを話に聞き、本で読んだりして大違いが分かり満洲は全く大陸的漫々的で悠長だったのだなァと、沁々思い耽る時もありました。昭和20年(1945)8月12日に、私は弓長嶺で突然一通の電報を受取りました。第二国民兵の徴兵令状(赤紙)が来たとの連絡内容でした。私は早速山から降り同僚2・3名とともに、遼陽で汽車に乗り大連に戻りました。15日午後3時頃家に着き、親に直ちに出席する旨申し出ましたら、正午に終戦の詔書が発せられ、戦争の終結を知らされました。私は憲兵隊に出頭しましたが、自宅待機を命ぜられ、そのまゝ音沙汰なく戦場には行かずに済みました。若し、動員先でなく大連にいたとして12日に即時入隊していれば、捕虜としてシベリア抑留の憂き目を見たかも知

れません。第二国民兵乙二種の当時の体力では、とてもシベリア抑留には堪えられなかっただろうと思います。

浦田先輩は、終戦後に弓長嶺鉱業所内機電設備のソ連本国へ移送のための撤収作業に従事した後、12月下旬に鞍山の満洲製鉄(株)本社へ引揚げ、更に翌昭和21年(1946)3月下旬に鞍山を脱出、大連の夫人の実家に家族4人が身を寄せました。同年11月中国経済建設のため技術者として残留すれば、家族の生活も保証されると云うので中国経済建設学会に入会し、留用されました。以後は満洲各地を転々とし、昭和25年(1950)2月には、撫順磁務局総合計画科長に任命され、中国人と差別のない待遇を受けられました。



浦田先輩社宅前にて
(前列右二人は近所の子)



鉦友会 23 期同期会
浦田先輩夫妻を迎えて

その後、体調を崩して昭和 28 年（1953）8 月、2 人殖えた家族 6 名とともに舞鶴港に引揚げられました。

浦田先輩の帰国を知った鉦山工学科弓長嶺動員の面々は、浦田先輩ご夫妻を招き、平成 10 年（1998）10 月に、鉦友会 23 期同期会を開き、弓長嶺を偲び感謝の意を表し、旧交を温めました。

五、戦争終結と引揚げ

（1）ソ連軍満洲に侵入

天皇の“玉音放送”による戦争終結、日本の敗戦は、しばし信じられませんでした。原子爆弾が広島、長崎に投下されて、壊滅的な打撃を受けたことは満洲では報道されず、玉音放送も私は直接聴取していなかったし、ソ連の参戦も日ソ中立条約がまだ有効の筈だと信じていましただけに、眼前に突然戦車が現われて一挙に奈落の底に突き落とされた思いでした。

昭和 20 年（1945）8 月 22 日、ソ連軍の大型戦車が大連市内に入ってきました。中国人が赤旗をかざして群がり、駅前

大騒動でした。それまでは日本人と中国人の間は平静を保っていましたが、この時から状況は一転して、陰悪の度合いが深まりました。連鎖街も一斉にシャッターを閉じ沈黙の街と化しました。そして、大連市は 8 月 23 日をもって旧露名ダルニー市に復帰されました。

直ちに、ソ連軍兵士による家屋侵入・掠奪が始まりました。それに続き中国人の掠奪もひどく筆舌に尽くし難いものでした。治安維持の保安隊までが、点検と称して私達から物を徴発して行きました。丁子屋にはある程度の服地、裏地、ボタン、ミシン糸などの在庫品がありましたが、それらは全部掠奪されてしまいました。彼等は容赦なくあらゆる物を持ち去り、私達は全く阻止することはできず、たゞ呆然と見ているだけでした。

当初ソ連軍の司令官はヤマノフ少将でした。部下のすることを放置していました。最初に進駐したソ連軍兵士達は、数ヶ月前までベルリン攻略の激戦死闘を経てシベリアへ転属されたらしく、全て手甲に囚人番号の刺青をし、軍服はボロボロの将兵達でした。また、ソ連軍兵士の暴行によって大勢の女性が傷つけられました。ソ連軍兵士は「女を出せ（ダワイマダム）」と云いながら、民家に侵入してきました。女達は必死に逃げ廻り身を隠しました。我が家に来た時も、姉は三階のベランダに隠れて無事でした。彼等は東洋人の人種区別がつかず、日本人、朝鮮人、中国人は皆同じに見えるらしく、

中国人女性も数多く犠牲になったようです。

私の万年筆数本・腕時計2ヶと目覚まし時計も、ソ連軍兵士に奪われました。一本の万年筆はインクが切れていて書けず、直ぐに捨ててしまいました。目覚まし時計のベルが突然鳴りだし、止め方が分からなくてマンダリン銃で乱射し壊してしまいました。この話は私個人が体験したことであって、決して笑い話ではありません。放火こそありませんでしたが、あらゆる奪略強盗強姦行為に対する批判はソ連本国にも知れ、ヤマノフ少将は左遷され、後任に9月10日コズロフ中將が着任しました。その後、治安は平静になり、不法奪略する者は兵はもちろん将校でもゲーペーウ（ソ連の憲兵）に連行されました。

また、10月2日からソ連軍票が大量に大連市内に出回わり、従来流通の朝鮮銀行券・満洲銀行券は影を潜め、軍票と鮮銀券・満銀券の間には2倍から3倍の闇打歩を生じていました。



大連に進駐したソ連軍戦車部隊

ボロボロだったソ連軍将兵の服装身なりが整ってきたなと思っていますと、急に姿を消し入れ替わりに、またボロボロ軍装のソ連軍兵士がやってきます。1ヶ月程して見違えるように身なりが整うと交替するの繰返しで、時には裸足の女性の兵士や将校も、いましたが、やがてヒール靴を履き、和服地で仕立てた美しいワンピース姿に変身して街中を闊歩し、買物に余念がありません。恰も、物資調達を兼ねた戦後報償の慰安旅行でも楽しんでいるようでした。

(2) ソ連軍占領下での生活

治安も漸く落ち着きを見せ初めましたが、生活不安が深刻に人々の心を包み込みました。父は一階店舗と三階工場を中国人に賃貸し、家族はそのまゝ二階に住んで、お互いの生活には干渉しないことにしました。その後は、中国人の入居によってなのか不法侵入は止み、安全に暮らすことができました。

戦争末期には、洋服店の営業は統制組合組織に統合され、三階の工場も閉鎖して二十数人いた中国人仕立て職人も、その頃は全員辞めて無人でした。父は、日頃から彼等の面倒を良くみておりましたので、彼等も父を慕い、戦後の我が家の生活を心配して、出来る限りの援助をしてくれました。父に、生活の不便はないか、「掌櫃（ジャングイ、旦那さん）お米まだあるか」と聞き、時々米や肉を持って来てくれました。お蔭様でお米は米櫃

のブリキ缶一杯に溜り、毎日食べることが出来ました。多くの日本人から敗戦後に苛められた話をよく聞きますが、我が家ではそのような目に遭うことはなく、寧ろ氣遣われて大事にしてもらったと云えます。引揚げ帰国して内地の食糧事情が酷く、主食が芋や冬瓜なのには些か驚きました。



中国人へ貸店舗（元丁子屋）での営業

壹佰圓軍票



拾圓軍票



伍圓軍票

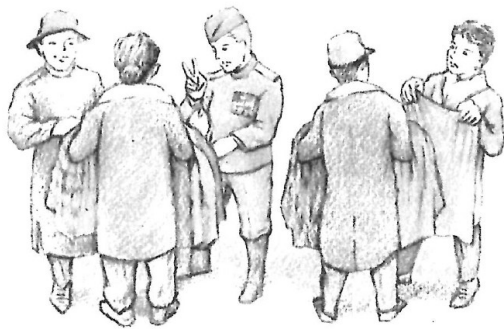


壹圓軍票



ソ連軍票

北満から避難してきた開拓団の人達は、悲惨としか云いようがありません。閉鎖後の学校に身一つで収容され、売り食いするものもなく、衰弱した体に鞭打ち、苦力として働き、死を待つばかりの日々に、運動場は忽ち墓地に早変わりしたとのことでした。このようなことが大連の身近な処にも存在していたとは、当時は露知らず、引揚げ後に本を読み初めて知って、これも驚きのひとつでした。



街頭で衣類の立売り

“昔を今に”より大連一中みどり会

やがて売り食い生活のため、持ち物処分や委託販売に人々は街頭に立ち、“立売り”が始まりました。数着の衣類などを腕や肩にかけ、中国人やソ連軍人に売ると言う自衛手段です。私も母の和服を持ち常盤橋辺りに立ち、物売り経験をしました。しかし、この方法では、物を奪われることがよくありました。二、三人が物を見るふりをしている隙に、一人が遽かに物を盗み走って逃げます。両手に売り物を抱えているので盗むのは容易であつ

て、言い争いが起れば殺される危険性がありますので、奪われても追うことはしませんでした。事実、私の小学校の同級生が、中国人と言い争いで喧嘩となり、殺されたことがありました。街頭での立売りは身の危険もありますが、どこかに店を構えての販売なら危険度も避けられると云うことで、店内でブースを借りて販売する方法が流行りました。

そこで私も、昭和21年(1946)3月に、浪速町幾久屋百貨店二階表通り側の中間に、契約書もなしに、二ヶのショーケースを借り、邦人女性二人を雇って物品販売を手伝ってもらい、ブースの店開きをしました。開店の景気付けに、姉の豪華な総刺繍地振袖の嫁入り衣装を飾ると、ソ連軍将校が即座に金一万円で買って行きました。その他、それまで掠奪されずに隠し持っていた腕時計、置時計などはよく売れました。しかし、漸く品不足になってきたので、幾久屋のブースは8月をもって店仕舞いにしました。



幾久屋百貨店

(天津街百貨大厦～天白大厦)

(3) 大連市政府の成立

昭和 20 年（1945）10 月 27 日、ソ連軍当局はヤマトホテルに各界の代表者を招き、大連市政府の設立を告げ、市長に遲子祥、副市長に陳雲濤を選出したことを明らかにしました。同時に大連市役所および日本行政官全員は退職することを命じ、同 30 日別宮秀夫市長は、ソ連軍司令官より正式に大連市長解任の通告を受けました。

同年 11 月 1 日嘗つての日本行政機関であった関東州庁庁舎で、中国人による大連市政府が成立。市政府は発足直後に、十一条なる「日本残留民に対する施政綱領」を公布しました。

先ず、日本軍および日本政府の財産を没収し、親日中国人、特務機関員を処罰する。次に、住宅調整運動（日本人を一人一畳半の割合で収容し、空いた家に中国人を入居させる）を実施する、（後述）などでありました。



堂々たる偉観を呈する関東州庁
（現・大連市政府）

(4) 大連日本人労働組合の発足

日本人は、難民救済と相互扶助、連絡を目的とする組織を個々に作り、危機を乗り切ろうとしていました。昭和 20 年（1945）12 月時点での日本人の代表的団体は、日本青年奉仕団と大連市民有志協議会が合流して組織された大連奉仕団やダルニー日本人青年連盟を母胎とする大連日本人民主義連盟などがありました。

12 月 5 日、これらの団体の責任者は、ソ連軍司令部に招集され、政治部副官ボズニヤコフ中佐から、「勤労者を中心とした労働組合のみを公認する。他の団体は 3 日以内に解散すべし」と命令されました。各団体の代表者達は一本化の協議を重ねましたが思想問題で意見が対立、遂には物別れとなり、その結果、大連日本人民主義連盟を母胎として生まれたのが、「大連日本人労働組合」でありました。

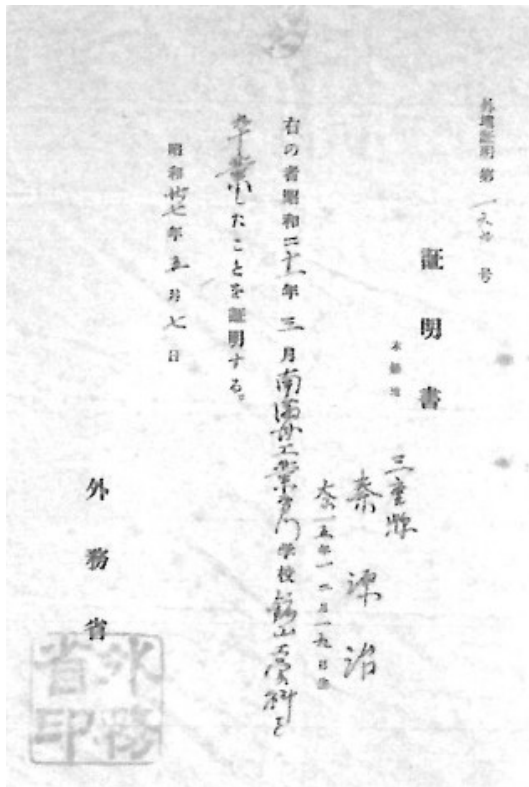
翌昭和 21 年（1946）1 月 2 日、大連日本人労働組合は、その設立をソ連軍司令部から正式に許可され、同月 20 日に結成大会を開いて発足しました。

同 25 日、労組は先ずは手始めに、緊急食糧獲得運動を展開しました。その資金を集めるため、委員会を結成、職務別、支部別に消費組合を結成し、消費者から借入金一千万円、寄付金百万円を予定し、これとは別に市中有力者 150 名を招集し一千六百万円の拠出を要請しました。それからは矢継ぎ早やに資金調達が課せられました。

労組は、ソ連当局からは食糧獲得と難民救済に、その後は引揚げ業務と云う大事業を、市政府からは住宅調整と大連市政建設公債募集の業務を負わされました。何れもそのための活動資金は自給自足であって、ソ連・中国ともに面倒な残留日本人工作は、全て労組に押しつけたのでありました。

労組は、事ある毎に次々と資金調達を有力者、各業界、各町内会に割当て、その取立てが、峻烈を極めて怨嗟を募り、大方の輦蹙を買うに至ったのでありました。

(5) 繰上げ卒業



南満工専 卒業証明書

昭和21年(1946)3月21日、私は南満工専を二年修了をもって繰上げ卒業となりました。その後、学校は3月30日中国側に完全に引渡し、南満洲工業専門学校の歴史的終末を迎えました。在学中は勤労奉仕・学徒動員に明け暮れ、工専での学業といえば、弓長嶺でのインクライン実地測量ぐらいしか思い当たりません。卒業証書は授与されませんでしたので、昭和27年(1952)5月に手続きを経て、外務省から卒業証明書の交付を受けました。

(6) 日僑人民住宅調整運動

住宅調整運動は、日本人住宅が日照通風とも快適な土地を占め、風光明媚な南山地区、嶺前地区など居住環境・立地条件など良い処に集中し、しかも中国人一人当たり0.5畳に対し日本人3.5畳の割合であるのを平均化するものとされました。また、労組はその運動方針を、次のように決定しました。まず、この運動を通して地区市民生活全体の問題を把握し、非常食糧獲得運動と結びつける。同時に戦争犯罪人、隠匿物資の摘発と、清算闘争を展開、大衆の意識を昂揚、積極的分子の発見養成に当たるとしました。第一回は昭和21年(1946)7月から10月末日、第二回は12月から翌年3月末日までに完了する方針で、第一回は8月に、主として日本人官僚、資本家の家屋を接収し、中国人家庭に与えました。第二回はこの期間に多くの日本人が引揚げ、3月末で一般引揚げは完了しましたので、大

量の空き家ができ、実施の必要がなくなりました。我が家には何も影響はありませんでした。

(7) 大連市政建設公債

昭和21年(1946)10月末、日本人の引揚げが決定した直後、大連市政府は十九条からなる「大連市政建設公債条例」を發布し、大連の産業経済文化復興再建のため、三億円を起債しました。一億八千

万円が中国人に、一億二千万円は日本人に割当てられました。利息は年利八厘で年一回配当、五年満期となっていました。

「戦後大連の各機構が破壊されたのは、元はと云えば日本との戦争に原因がある。日本人はその罪を償い、中国への思義に報いるために応募せよ」との趣旨でありました。確かにその趣旨は理解できぬことはありません。しかし、職を失った日本人は、難民救済・引揚げ・越冬資金と



引揚者国庫債券



引揚者特別交付金国庫債券

次々に労組から示される割当金に喘いでおり、その上に一億二千万円など、出せる訳ありませんでした。市政府から一括依頼された労組さえ、正直なところ晴天の霹靂であったと云います。と云って無視する訳にもいかず、引揚げ・越冬資金さえ集まらない苦境に、更に公債まで抱え込んだ労組は、大連市政建設公債日僑引受委員会を組織し、元・大連商工会議所会頭首藤定を委員長に据え、副委員長榊谷仙次郎・石堂清倫で、1月12日に発足しました。役員に労組員が僅か加わっているものゝ、委員長初め委員、地区代表など殆どに旧指導者階級が名を連ねています。それには理由がありました。公債を募集しても、こゝ1・2ヶ月で祖国に引揚げてしまう日本人にとって、利息は素より元本の払戻しを受けられる筈もなく、応じる者などないのは明白でありました。そこで労組は、引揚げ資金と建設公債を一本化して二億円の募金を同委員会に引受けさせ、委員会でそれを按分することにしました。更に同委員会は市政府に直結した独立機関であることを市民に印象づけ、首藤・榊谷を頭にし、労組色を払拭しての募金体制を執ったのでした。最早こうでもしなければ募金は不可能となったことを労組自体が認めたことにもなりました。一方で労組は、割当金納入の証明がなければ引揚げ許可は与えないと宣言し、脅しをかけたのでした。

割当金の対象区分は、第一対象者は一

千余名の戦争協力者、旧支配階級で、金額45万円以上、30万円以上、15万円以上の三段階に分け、第二対象者は資産家、戦後利得者とし、第三対象者はその他の一般日本人とされ、ともに査定は委員会と団体協議会に一任されました。この大連市政建設公債こそ、大連日本人市民が血を絞り、旧植民地で支払った個人賠償金でした。引揚げ後、日本政府が弁償するとのことでありましたが、死を賭けての別宮市長の請願も無視され、結局は年令別一律の引揚者国庫債券の二回に亘る交付で済まされてしまいました。

(8) 引揚げ決定 ソ連軍労働組合に引揚げ業務委任

昭和21年(1946)5月14日から、中国国府軍勢力下の旧満洲地区邦人の葫蘆島引揚げが始まり、主に米軍貸与のLSTやリバティ型輸送船などにより、ほぼ完了したとの噂が流れているが、大連の引揚げはいつも噂だけで、やがては消え去るばかりでした。陸の孤島となった大連で二度目の越冬を覚悟した労組では、越冬対策協議会を発足し、運動方針を決定しました。

終戦から430日余の昭和21年(1946)10月23日、ソ連軍司令部から労組の土岐委員長に、日本人引揚げ決定の朗報が伝えられました。時期は明示されていないが、後日の正式指示を待ちそれまで冷静に職場と生活を守るよう、全市民に通

告されました。その頃の大連の日本人は、生死の分岐点ぎりぎりをさ迷っている時期でもありました。待ちに待った引揚げ決定に日本人市民は湧き立ちました。やっと見通しのついた明るさに、弾んだ声で冗談も飛び交い、笑いが渦となりました。

ソ連軍司令部は、日本人引揚げに関する業務を日本人労働組合に委任しました。労組は発足したばかりの越冬対策協議会を、そのまゝ引揚対策協議会へと転換し、急遽その準備にかりました。当時、大連では「日本人引揚げを労組が妨害している」と労組を中傷する噂が流れていました。ソ連当局、市政府とも、既に投げ出してしまった日本人困窮者の救済は、労組でも対策が立たず、引揚げ以外に解決策はないと考えていたのが事実でありました。しかし、表立って引揚げ促進を運動することは、現社会体制を否定する反動分子と極め付ける一派のため、差し控えていました。ソ連側からの引揚げ発表に、労組としてもホッとした、と云うのが偽りない処でありました。労組では、引揚対策資金は二億一千五百万円が必要と想定し、全市民に階級別に割当て徴収することゝしましたが、市民に労組不信が根強く労組による資金徴収は不可能と判断し、かつては反動呼ばわりした榊谷組榊谷仙次郎社長に協力を依頼して世話人代表に担ぎ出し、有産者階級および戦時協力者からの二億円獲得が課せられ、残り一千五百万円は地区一般人に割当てられ

ました。しかし、榊谷の努力にも拘らず、旧有産者階級は既に幾度も労組の強制徴収に応じ、吐き出すものは出し尽くしているので、12月末時点では18%の三千六百万円に止まり、地域一般人からの募金は78%の一千二百万円が集められました。

労組としては、この大事業を市民の民主革命と絡めて行なわねばなりませんでした。二十万余の日本人のうち、一人でも多く思想改造して、日本に送り込む使命がありました。

年の瀬も迫まり、一部では引揚げが始まろうとしていた頃でした。連鎖街京極通りの喫茶店“紫咽荘”に青年男女が集められて、労組のオルグから、『「大連引揚げの歌」が出来た。これから歌唱指導をするので、よく覚えて皆に伝え、意気盛んにして祖国へ帰るのだ』と云うような話があつて、繰返し演奏があり、幾度も歌って覚えたものでした。イデオロギーは兎も角、愈々日本に帰れるのだ、と云う喜びを噛み締めながら、この歌を歌っていました。私にとっては、懐かしい大連思い出の曲の一つです。歌詞を次に掲げます。

大連引き揚げの歌

作詞・作曲 山下 久

一、耳を澄ませばふるさとの
岸邊を洗ふ波の音
瞼（まぶた）の裏に浮かぶのは
あゝ遠近（おちこち）の山の色

船が来た来たなつかしい
祖國へ歸る船が来た

二、山の有様野の景色

昔のまゝにあるかしら
僕の生まれたあの町は
冬の月照る焼け野原
この眼で見よう戦争の
あとの祖國の苦しみを

三、民主大連船出して

民主日本へ水脈（みお）を曳く
歸る祖國の山川が
よし崩（くず）れても破れても
そこが我らの新天地
自由のための新天地

(9) 我が家の引揚げ記録

昭和22年（1947）1月になって、引揚げ船の回航が順調に運び、目に見えて日毎に日本人の姿が街中から消えていきました。残余の引揚げ待機者と技術残留者のみとなり、我が家の引揚げは何時になるのか、心細い思いが募るばかりでした。

洋服商を営んでいた父は、商業営業者として第一対象者にランクされていたのか、大連市政建設公債七十五万円の割当てがあり、割当金納入の証明がなければ引揚げ許可が下りないと脅されていたので、父は何とか工面して納めたのを見聞きました。3月下旬、漸く我が家にも引揚げの許可が下り、22日に永らく住み慣れた我が家を捨て、荷馬車に荷物を

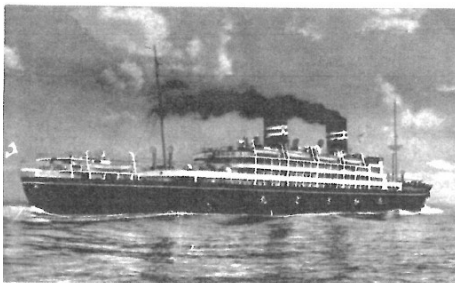
積んで収容所に入り、そこで一週間滞在しました。その間に手厳しい荷物検査を受けました。布団袋から出して積み上げた衣類を前に、家族人数を尋ねられたので、父、母、私、弟、姉、姉の赤ん坊の六名と答えると、検査官のソ連兵は「それでは一人6枚もあれば充分だろう」と云って、36枚が返って来ました。しかも、夏浴衣、寝巻、ワンピースも一枚のうちに、大島紬の袷着物・羽織の揃いも羽織だけが戻り、数合わせの無情な取扱いでした。

内地に居る二人の兄達も不自由だろうと、私の寸法で新調した三つ揃いスーツ類は全て没収されました。印刷物、記録物、写真、貴金属、一人千円以上の貨幣は全て持出し禁止とされ、若し所持者が発見されると、その所属団は全て乗船取消しと云う厳しい指示が出ていましたので、極力整理してこれだけはと絞って自粛していたのですが、要領のよい団では責任者が相応のプレゼントを用意し、素早く係官のポケットに滑り込ませて検査を素通りした、と云う話を後日耳にしました。

3月29日に引揚げ船高砂丸に乗船し、涙の“さらば大連！”を告げ、汽笛を合図に大連港を出港しました。

因みに、戦時中生き残った1万噸クラス豪華客船と云えば、北米航路 神戸～シアトル線の日本郵船“冰川丸”（11,622噸）と、台湾航路 神戸～基隆線の大阪商船“高砂丸”（9,347噸）の、僅か二隻が命長らえたのみと云う悲惨な状態でした。

その生き残り船に乗船出来るとは、願ってもない幸運でした。しかも、高砂丸来航 4 回のうち、3 回は 3 千人程の乗船輸送でしたが、最後の 4 回目は我々一般人最後の引揚者 886 人のみで、ゆったりとした豪華な船旅でした。翌 30 日出港の大連第一次引揚最終船恵山丸には、引揚業務を終えた労組関係者 2,673 人が乗船していたそうです。



大阪商船内台連絡船高砂丸

六、日本内地に初上陸

(1) 佐世保針尾収容所

高砂丸が佐世保港に入港後、船内で検疫を受け、4 月 3 日に上陸して DDT の洗礼を浴び、漸く徒歩で旧海軍兵舎の針尾収容所に着き、そこに収容されました。私にとっては、日本初上陸の第一歩でした。

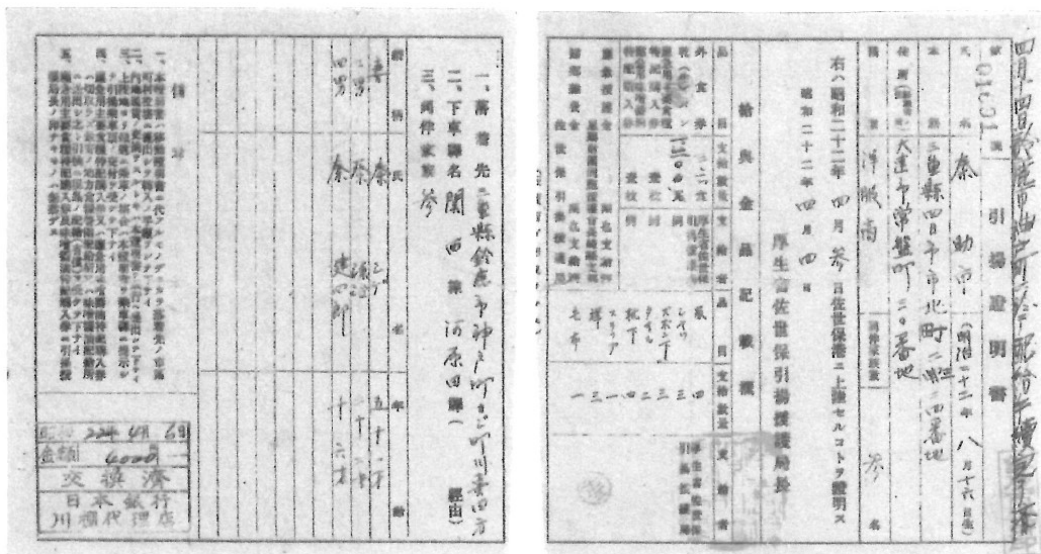
直ちに部屋割りがあって、やっと腰を下ろすことができました。佐世保引揚援護局で、一人当たり千円の現金と若干の衣類が支給され、引揚証明書が交付されました。長崎税関には所持していた朝鮮銀行券、ソ連軍票、満鉄株券などが保管証と引換に収監されました。これらは数年後に返還されましたが、ソ連軍票だけ

は風化のため処分されて戻りませんでした。針尾収容所には四日間滞在し、7 日の早朝に南風崎駅から引揚列車に乗って名古屋に向かいました。汽車の窓はガラスがなく、全部板張りでした。途中翌日未明に姫路に着いたので窓を開けたら、姫路城がくっきりと見えました。これには感動の一瞬でした。生まれて初めて日本に来たのだ、と云う感触に興奮を覚えました。汽車は山陽本線から東海道本線に入り、8 日未明に名古屋駅に着きました。こゝには兄達二人が出迎えにきておりました。兄達は復員後、これから私達が向かう引揚げ先の叔母方に既に寄寓しておりました。国鉄荷物取扱場で荷物を引取り、近鉄電車乗車口へ移動して始発電車に乗換え、終着駅の伊勢神戸駅に下車、落着先・三重県鈴鹿市神戸鍛冶町 424 番地仏具商・川喜田光治郎（母しげの実妹さんの夫）方に、漸くにして辿り着きました。大連の住処を出て 17 日目のことでした。かくて、昭和 22 年（1947）4 月 11 日、手続きを経て、鈴鹿市住民となりました。



佐世保港上陸

針尾収容所へ向かう引揚者



裏面

表面

引揚証明書

(2) 帰国後の暮らし

無事家族一同が勢揃いし、私にとっては新天地の日本内地での生活のスタートが始まりました。衣服類を殆ど失い、大連での普段着ジャンパーが一張羅、着の身着のまゝの見窄らしい姿に、工専時代の校章そのまゝの学生帽を被っていました。

佐世保で支給された千円以外は無一文状態の上、郵便貯金の払出しは月五百円に制限され、なけなし持参品の売り食い生活を余儀なくされました。それに米穀配給の不足補いの食料確保が最難関で、自転車でリヤカーを牽き、田舎の農家に南瓜や芋類買出しの日課に明け暮れました。このような状況下では、進学の遣り直し希望も断念せざるを得ませんでした。

当時、父は京都へ出稼ぎに行っており不在で、時折仕送りがありました。長兄一郎は食料配給公団神戸支所に勤務、次兄茂治は明治大学を休学中で、四日市市諏訪新道の丁子屋商店（京城丁子屋百貨店二代目社長小林源六夫妻が引揚げ後開店将来は洋服店復活を期していました）に住込み、雑貨店の店員をしていました。

6月某日、GHQより東京丸ノ内ビルに召喚を受け出頭しますと、大連に於けるソ連軍の動向につき、質問を受けました。交通費は全額支給されました。

何時までも叔父宅に世話になっている訳けにも行かず、借家を探して鈴鹿市神戸北萱町一九八番地（借家 武蔵方）に、7月8日に引越しました。

同年8月、次兄茂治が明治大学に復学

のため丁子屋商店を辞めましたので、私が代わりに住込み働くことになりました。こゝでも、自転車にリヤカーを曳いて四日市郊外まで味噌・醤油樽の仕入に行きました。津まで行った時には、復路白子辺りで自転車が漕げなくなって押して歩き、神戸の我が家を横目に見ながら寄り道もせず、やっとの思いで店に帰りました。

(3) 百五銀行に入行

その年10月、借家隣人の百五銀行行員（富田支店副長）が銀行就職を口利き下され、面接試験を受けました。その際に提示した二中の通信簿に印刷の「実行七則一、外国人ニ対シ公正ナル態度ヲ持ツコト」を読んだ一重役から、『流石外



百五銀行神戸支店勤務



昭和23年正月 家族全員が揃う新年記念

地の学校だけあってこう云う心遣いの教育が施されていたんだね』と感嘆の言があり、誇らしい気分を満たされました。幸いに採用通知を受け、昭和23年(1948)1月1日付け中途入行し、4日より百五銀行神戸支店(昭和28.10.1 鈴鹿支店に改称)に初出勤しました。こゝで、世にも不思議なことが起こりました。神戸支店に出勤すると、大連二中の同級生丘友二郎とばったり顔を合わせました。彼は先に帰国していて、祖父二代頭取岡嘉平治(のちに丘襄二)の縁故で曩に百五銀行に入行して神戸支店白子出張所詰めでした。のちに河芸支店でも一緒に勤務しました。

昭和23年(1948)は、戦後家族全員(姉婿片柳隆次郎はシベリアに抑留中)が揃って初めての新年を迎えました。それを記念して写真撮影をしました。

(4) 家族の東京移住

義兄片柳隆次郎は、昭和24年(1949)4月に、永徳丸でソ連シベリア抑留から還り、舞鶴へ上陸し復員しました。東洋時計(株)に復職し、東京に姉ツナ子と幼女春子と呼び寄せ、親子水入らずの世帯を持ちました。一方、昭和25年(1950)6月頃、父助市・母しげ・長兄一郎・弟建四郎の4名は、東京都新宿区花園町27番地へ転出し、次兄茂治と合流しました。父と一郎は、初代小林源六の甥小林源次郎とともに神田小川町にて「丁子屋テーラー」を創業しました。茂治は松岡塗料(株)

を辞し、住居の一部を改造して「丁子屋塗料店」を開業しました。私は既に百五銀行に就職していましたので、そのまゝ独り残留し、单身自炊生活に入りました。

七、大連関連資料の収集

(1) 大連追憶

私は大連にいたとき、日本内地のことは全く興味がなく、特別な印象は一切持っていませんでした。幼年時代から過ごしていた大連では、人力車夫は全て中国人がするものと思い込んでおり、日本に初めて来てみて、日本人が人力車を曳いているのを見て異様な感じがしました。このことから見ても、当時の私は無意識のうちに植民地支配者として君臨しておりました。思い上がりも甚だしいと云われて当然ですが、その当時は植民地に暮らしていたと云う感覚は全くありませんでした。今にして反省すること頻りです。

近代化の都市大連から戻って、帰国後に見た日本は田舎は田舎の感覚で、名古屋や東京の都会へ行っても、全く驚きも喜びも感じませんでした。多分戦争中空襲に徹底的に破壊され尽くした残骸に過ぎない哀れな姿を見せられたからでしょう。今でも大連の方が余程良かったと思っています。

戦後の名古屋は、一面の焼野原でした。それでも広小路通りの辺りには、ビルの残骸が焼け残っており、都会らしさの面影は想像できましたが、特別な驚きはあ

りませんでした。復興の兆しも見え始め、百メートル道路建設を自慢にしており、その意気や嘉しとしても、大連にはこのような道路は昔からありましたし、驚くに及ばず、東京に行きましても、大して感慨も湧かず、こゝの人達を大連へ連れて行き、在りのまゝの大連の姿を見せてあげたいくらいでした。大都市の基準で測れば、大連の方が余程進んでいたものと云えるようです。特に大連での生活面からみれば、日本人の一般住宅には、私が幼少のときから水洗トイレ設備がありました。大連の都市計画当初から下水道建設が優先して行なわれたと云われております。

帰国して日本の住宅建築を見て、吃驚しました。殆どが木造家屋で、冬は冷たい風が障子の隙間からヒューヒュー音をたてながら吹き込んできて寒く、汲取り式便所が普通でした。大連の屋外は寒いけど、窓は二重構造で寒気を遮断し、その上屋内にはセントラルヒーティングのシステムが暖気を運び、冬でも全然寒くありませんでした。当時父は冬でも夏の浴衣を着てビールを飲んでいました。今にして思えばパラダイスで暮らしている感じでした。

(2) 大連の資料と情報の収集

中学時代には、ずっと切手蒐集に興味をもっていました。切手の購入に大連中央郵便局へはよく行きました。日本切手のみならず満洲国切手も買えました。蒐

集した切手は外国切手を含め一万五、六千枚くらいはありましたが、引揚げ時の荷物検査で没収される懸念がありましたので、一階の店の中国人に全部差し上げました。物を集めることには何か執着心が強いらしく、何でも集めたくります。

帰国当初は生活の目処が立たず、働く一方でしたが、結婚、子供の養育も大学卒業を迎えた昭和 50 年（1975）頃から、漸く生活にゆとりが生まれ、切手・はがき・FDC・ルイスカバー・コイン・紙幣・テレカ・赤福伊勢だより・干支もの等々徹底して収集が始まり、定年退職後も続けられました。

私は大連にいたときの素晴らしい思いを、記憶の限り保存するために、関連する資料を結構幅広く大量に集めました。

当初は前述しましたように、常盤小と大連二中のクラスメートや、先輩を含む旧愛鳩部員の各人に呼び掛けて手持ち資料を提供してもらい、それらを小冊子に取纏めて、カムバック配本し、夫々の皆さんには、とても喜んでもらいました。

大連関連の古絵葉書やパンフレット等は、古本屋やメールオークションで見かけると手当たり次第に買い集めました。多くの人々が大連の色々なものを持ち帰っていて、始めの頃はかなりスムーズに貴重なものまで入手することが出来ました。

斯様に可成の量のものが集まりましたので、テーマ毎にファイルに分類し、自分なりに独り楽しんでおりました。

「20世紀大連会議」より刊行の資料

絵葉書に刻んだ塑像
「心のふるさと大連」



平成18年12月

大連 連鎖商店街
ものがたり



平成20年8月

夢満載の大連航路
あ・ら・か・る・と



平成20年10月

満鐵特急「あじあ」



平成21年4月

日露の遺産
大連 露西亜町と大広場



平成21年5月

日本民間航空史
(初飛行から終戦まで)



平成21年5月

が岡 球界をリードした
大連野球会



平成21年12月

大連の電車・バス
ア・ラ・カルト



平成23年9月

大連の公園
水師営物語



平成25年9月



平成 14 年（2002）11 月、東京で「切手の友」社主谷信勝先生羊寿を祝う会の席上で、「日満連絡船大連航路」の資料を見せましたら、独り個人で退蔵せず世に出すようにと勧められ、翌 15 年（2003）4 月に「日本の客船とその船内郵便」第三巻特集号として刊行されました。これが出版物の第一号となりました。その年の 10 月末、谷氏が JAPEX（全日本切手展）‘03 に出展し、銀賞を受賞しました。

平成 11 年（1999）8 月、大分市で甲斐正人主宰「20 世紀大連会議」の活動を知って、即入会しました。平成 14 年（2002）9 月、北九州市小倉にて、甲斐夫妻と初面談し、大連絵はがき集のファイルを示し、懇談に一刻を過ぎしました。

平成 18 年（2006）11 月、大分市ホテルにて甲斐氏と出版につき最終打ち合せ、12 月、20 世紀大連会議より『絵葉書で刻んだ塑像「心のふるさと大連」』が初刊行されました。私は、ワープロで打ち出し

た原稿を甲斐さんに送り、彼はこれらの資料を整理して小野高速印刷㈱で本に仕上げ、「20 世紀大連会議」より一般に発売されました。私は原稿を提供するだけで、発行などの事務的なことは一切関与しませんでした。以後も『大連連鎖商店街物語』『夢満載の大連航路あ・ら・か・る・と』（これは、切手の友社刊「日本の客船とその船内郵便 特集号 日満連絡船大連航路」が絶版となり、新版再版分）など、次々と刊行され 13 部に及びました。

「20 世紀大連会議」の初期段階には会員が大勢いて、会報と関連資料集もよく売れました。しかし、皆様は高齢なので会員も急速に減少し、大連を懐かしむ人々も徐々に減り、出版物の販売も先細りとなり、「20 世紀大連会議」を維持するのが困難になってきました。大分県府で理事会を開き、甲斐さんなどと相談した上で、状況を考え、止むなく平成 23 年（2011）3 月末をもって解散することに

なりました。しかし、甲斐さんは、なおやり遂げたい使命感を持って、「20 世紀大連資料室」と名称を変え、独力で今も闘志を絶やさず頑張っておられます。

なお小野高速印刷(株)では、原稿組版を電子版にして保存されると聞きました。

おわりに

私が生まれ、育ち、遊び、学んだ懐かしの大連、何処からともなく聞こえてくる「……満洲育ちのわたしたち」のメロディーと歌声は、耳の奥底に今も刻み込まれて残っています。

満洲事変・満洲国建国の翌年に常盤小学校に上がり、在校中に支那事変が始まり、大連二中へ進学して間もなく大東亜

戦争が勃発し、休み返上の勤労奉仕が続き、そして南満工專に進んでも学業そこ除けに弓長嶺へ学徒動員に出動し、そして迎えた終戦。振り返ってみれば、何と戦争の落し子そのものですが、私自身はぎりぎりで軍隊に入らずに済みました。幾多艱難の末に何もかも残して漸くの引揚げ、「寒い北風吹いたとておじけるような子供じゃないよ……」の心意気をもって、今に至っております。その辺りの生い立ちの記憶と、「20 世紀大連会議」との関わりについて、記録として残すべく、斯く申し述べました次第です。

以上

ある少年のみた満洲

——竹内一郎の「満洲紀行」より——

解題

菅野 智博

はじめに

「満洲紀行」は、故竹内一郎氏（以下、一郎氏）が小学校 5 年の時に執筆した満洲訪問記録である。一郎氏は、母親と一緒に夏休みを利用して、新京に単身赴任中の父親故竹内亮氏（以下、竹内亮氏）に会うため満洲を訪問した。本紀行文は、一郎氏らが日本を出発する日（1940 年 7 月 24 日）から新京を離れる日（1940 年 8 月 28 日）までの見聞や感想などを記録している。本稿では、資料の掲載に至った経緯について紹介した上で、紀行文の内容及びその意義について言及する。

1 掲載経緯及び関連資料について

（1）掲載経緯

本紀行文は、執筆者一郎氏のご息女である樋口優子氏によって提供された。樋口氏によれば、一郎氏は 2014 年の妻の死後から身の回りの物品を整理するようになり、満洲関連資料の保管先を何度も丁寧



新京般若寺で撮影された家族写真
（1940 年 8 月 27 日）

の内容について語らなかったものの、その貴重さを繰り返して強調していた。2016 年に一郎氏が他界し、樋口氏は遺品を整理する際に、はじめてこれらの資料

を確認したという。樋口氏はこれらの資料を今後の研究に活用して欲しいという思いから、「満洲の記憶」研究会（以下、本研究会）のブログを通して連絡をくださった。そして、樋口氏のご厚意により、竹内亮氏及び一郎氏の満洲関連資料を本研究会に寄贈していただけることになった。

（2）関係者略歴

それでは、竹内亮氏と一郎氏の略歴を簡単に紹介する。

竹内亮氏は、1894年に名古屋市で生まれ、1915年に北海道帝国大学農学部林学科実科に入学した。卒業後、王子製紙株式会社の苫小牧分社山林係での職務経験を経てから、1922年に九州帝国大学農学部植物学教室の助手となった。1925年に故瓜生眞子氏（以下、眞子氏）と結婚し、1934年1月に東京帝国大学にて農学博士を取得した。竹内一家にとって大きな転機となったのは1937年であった。竹内亮氏は、「満洲国」大陸科学院の嘱託として九州帝国大学で研究することになり、1939年8月から新京にある「満洲国」林野局林野実験室で勤務するため、単身で満洲に赴任した。また、1945年4月には一家をあげて渡満した。敗戦後、竹内亮氏は国立長春大学の創立に伴い、1946年から農学院森林系の教授として留用され、眞子氏と一郎氏も同伴した。1949年から東北師範大学教授兼生物系主任に就任し、約8年間教鞭をとっていた。そして、一



竹内亮氏と一郎氏
(1956年10月、北京北海公園にて)



竹内一郎氏
(1957年、東北師範大学にて)



竹内一郎卒業写真

(1954年7月13日、前から3列目、左から5人目は一郎氏)

家がようやく帰国できたのは1957年5月24日のことであった。その後、東北パルプ株式会社（後に十条製紙株式会社）の嘱託として1972年まで勤務した。また、帰国後も度々東北師範大学時代の教え子と連絡を取っていた。1982年に88歳で他界した⁽¹⁾。

一郎氏は1929年に竹内亮氏と眞子氏の長男として生まれた。1945年に母親の眞子氏と一緒に満洲に渡った。敗戦後、長らく家族と共に長春で生活し、1954年に東北師範大学物理学科を卒業した。また、留用期間中に父親の助手を担当することもあった。帰国後、株式会社本州製

紙に就職し、定年まで務めていた。父親と同じような職種に就職した背景には、竹内亮氏の紹介があったという。そして、仕事をしながらもラジオ講座などで中国語を熱心に勉強していた。2016年に87歳で他界した⁽²⁾。

(3) 関連資料

この度、ご寄贈いただいた資料は、大きく戦前のものと戦後のものに分けられる。

戦前のものには、一郎氏が執筆した「満洲紀行」の他に、絵葉書や各種観光案内、地図、写真、駅スタンプ、乗車切符などが

ある⁽³⁾。約 300 枚の絵葉書のなかには、貴重なものも多数含まれており、さらにセットで保存されている点も価値がある。これらの資料は、実際に戦前期に使用されていたため家族によって保存されてきた。

戦後のものには、1950 年代に東北師範大学で撮影された写真、留用者を対象に発行されていた日本語新聞、中国語新聞の切抜、日本の家族に送っていた書簡、東北師範大学関係者との書簡などが含まれている。これらの資料は戦後の人間関係に基づくものであり、日本人の留用史を考える手がかりにもなるだろう。

2 紀行文の内容

本紀行文は、一郎氏が 1940 年の夏休みに単身赴任中の父親竹内亮氏に会いに行った際に執筆したものである。紀行文は、「門司より大連へ」、「大連から奉天へ」、「奉天から新京へ」の 3 部に分かれており、1940 年 7 月 24 日に福岡県吉塚駅を出発してから、8 月 28 日に新京で父親と別れる場面までの約 1 ヶ月間にわたる満洲旅行について記述されている。さらに、訪満中に撮影された写真も数枚保存されており、そこからも旅行の様子をうかがえる。

本紀行文には以下の 2 点の特徴がある。

第 1 に、一郎少年の見聞や感想がそのまま子どもの目線や言葉で書かれている点である。船内で航空兵との会話、アジア号に乗った時の気持ち、同善堂を参観

した際の感想、「満人街」に行った時の感想、父親に会った際の嬉しさ、新京市内観光の感想などが記されている。例えば、アジア号の車内からみた光景のなかで、農家の家の形が「北支那式」から「北満式」に変わったということを、図画入りで紹介している。

また、紀行文のなかで「ヤンチョ」のニヤンが光子さんに何かいっていたが、光子さんがいきなり『ヤーメンソウワ』とおっしゃったら『ヤーメンソウワプシン。』といって変な顔をした」という会話場面を書き残している⁽⁴⁾。戦前期、日本人は現地の「満洲人」とトラブルがあった際に、しばしば「ヤーメン」（役所）という表現を使っていた。すなわち、当時の日本人は役所に行けば守られると考えていたのである⁽⁵⁾。旅行者の一郎少年が、目の当たりにしたこの光景をそのままの話し言葉で記録していることが興味深い。

第 2 に、観光内容について詳細に記述されている点である。当該紀行文では、一郎氏と母親の眞子氏が参加した新京の観光ツアーについて大きく紙幅を割いて記述している。このツアーでは、まず忠霊塔、寛城子の記念碑、南嶺の記念碑などを参拝してから、「満洲国」の都市建設の状況を車内から観覧したり、動物園や「満人街」など新京市内各所を参観した。一郎氏らが参拝した南嶺の記念碑は、満洲事変を記念して建てられたものであり、満洲のなかでも広く知られているものであった。これらの記念碑や忠霊塔は、戦

死した日本人兵士を慰霊するためのものであり、植民地支配者が満洲における歴史記憶を構築するための装置でもあった。また、一郎氏らが参加した日本人観光ツアーは、戦跡観光と「国都開発」を結び付けていたことも注目に値する⁽⁶⁾。そこからわかるように、植民地支配者はツアーを通して満洲支配の正統性を喧伝し、さらには「満洲開発」に動員させていたとしていた。そして、一郎少年も満洲国建設の宣伝文句をそのまま転写したという趣で、プロパガンダの影響を感じる。戦前期の満洲旅行記は数多く残されているが⁽⁷⁾、本紀行文のような小学生によって執筆された個人の日記形式の旅行記は非常に少ない。一郎氏の紀行文を他の旅行記や見聞録と比較対照することで、多様な年齢層の満洲像を理解することにつながると思う。

おわりに

本稿では、樋口氏によって寄贈された「竹内家コレクション」のなかの「満洲紀行」に焦点をあて、その内容及び史料価値について紹介した。寄贈された他の資料も大変貴重なものであり、それらについても今後目録化した上で、改めて紹介したい。

「満洲紀行」は、どのような経緯で執筆されたかは不明であるが、子どもの目線や言葉で書かれている同時代史料として大変貴重なものである。当該紀行文を他の旅行記や関連資料と対照しながら検

討することで、より多様な満洲像を解明することにつながるといえよう。

最後になるが、貴重な史料を本研究会に寄贈及び掲載承諾をいただいた樋口優子氏に衷心の謝意を示したい。また、竹内亮氏の経歴を調べるにあたり、「福岡山の会」の岡崎猷之氏及び「西東京自然を見つめる会」の中村賢司氏、竹内正彦氏（竹内亮氏の甥）から多くの関連資料を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

⁽¹⁾ 竹内亮氏の略歴については、福岡山の会『せふり』（第176号、1983年）及び創立25周年記念特集（1957年）に掲載された竹内亮「25年を終えて」を参照した。福岡山の会は、竹内亮氏が中心メンバーの一員として1932年に創立した山岳会である。竹内亮氏は、初代会長（1932年8月13日－1945年4月）を務めていた。第176号は「竹内亮先生追悼号」として、略歴や追悼記、関連資料などが掲載されている。

⁽²⁾ 竹内一郎氏の略歴については、ご息女の樋口優子氏の情報をもとにまとめたものである。

⁽³⁾ また、資料のなかには竹内亮氏の趣味であったハイキング関連のものや、調査で満洲各地を訪問した際に収集したものも一部含まれている。竹内亮氏は満洲に渡った後も福岡山の会に所属しており、しばしば『せふり』に寄稿していた。そこでは、様々な満洲の名山や珍しい植物について紹介している。また、『せふり』に「新京通信」という欄を設け、新京郊外でのハイキングやその道中の景観などについても寄稿して

いた。

(4) 「ヤーメンソウワ」は「ヤーメンに行こう」、
「ヤーメンソウワプシン。」は「ヤーメンに行く
のはダメ。」という意味であると思われる。

(5) 「土屋洸子氏インタビュー記録」2018年5
月9日、未定稿。

(6) この点については、荒山正彦「戦跡とノス
タルジアのあいだに——『旅順』観光をめぐっ
て」(『人文論究』第50巻第4号、2001年)が大
変示唆に富む。荒山は、「満洲国」期の日本人旅
順観光について、戦跡観光と自然の風景美との
関係に着目して分析している。

(7) 戦前期の満洲旅行記は、例えば、棟尾松治
『満洲見物・支那紀行』(大阪屋號書店、1922年)
や篠原義政『満洲縦横記』(国政研究会、1932年)、
臼井亀雄『開けゆく満洲』(日東書院、1933年)、
高橋源太郎『新満洲国見物』(大阪屋號書店、1933
年)、春山行夫『満洲風物誌』(生活社、1940年)、
三浦新一郎『国境記北』(増進堂、1943年)、小
此木壮介『だいいれん物語』(吐風書房、1944年)
などがある。

満洲紀行

執筆：竹内 一郎

編集：菅野 智博

凡例

- ・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。
- ・本史料の史料としての性質を考え、各表現を原文のまま掲載した。
- ・各段落の最初は1文字を空けて編集した。

本文

門司より大連へ

夏休みに父のいるあこがれの新京に行けることになって僕はうれしくてたまらなかった。博多駅前大阪商船会社出張所で七月二十四日門司出帆の鴨緑丸二等船室の予約が出来新京までの切符も買って出発の準備もすっかり出来て七月二十四日吉塚駅を九時十六分発の汽車で出発した。門司駅に着くと鴨緑丸の巨体な船体が岸壁に横付けになっているのが間近く見えてうれしさに胸が高鳴るのをおぼえた。

税関の手続きも簡単にすみタラップを

上って三名定員のこじんまりした室によそのおばさんと一緒にはいることになった。ブリッチに立って港のざわついた光景を眺めているうちに出帆を知らせるドラが鳴り軍艦マーチが奏せられはじめて汽笛とともに船体は静かに岸壁をはなれはじめた。見送人の中にはハンカチで目をおさえている人もあった。僕は遠ざかり行く港をじっと眺めて嬉しいようなさびしいような気分で一つぱいになっていると食事のドラが鳴ったので我にかえった。食事をすませて又甲板に出て見た。船旅は始めてであるうえに巨船なので室

にじっとしてられない。まず三等室から見物をした。次に一等室に行って見た。ここは三等とくらべ物にならぬ程りっぱだった。二時頃船がゆれ出した「チェッゆれだしていやだなあ」といっている人もあるし小さい子供たちは「ゆれだした、ゆれだした。」とはしゃいでいる。夕食は母がたべたくないといったので一人で食堂にいった。食後又甲板に出るとそばにいた兵隊さんが、「君どこに行くんだい。」ときかれたので「新京に行きます兵隊さんは?」「僕か僕はハルピンに行くんだよ。航空兵さ。」といわれた。しばらく話していたがねむくなったのでお別れして室にかえった。僕のねる寝台によそのおばさんが寝てしまっていたので上段に寝た。

何時頃か僕はどしんと床の上のころがり落ちた。はっと思うのと同時に寝台にかかえ上げられたが何だかぼんやりした気持ちだった。母がボーイさんと呼んで下さいといっているのをかすかに聞いた。やがてボーイにおぶさって医務室に連れて行かれた。お医者がいろいろ診察して、「大丈夫です。おいしいお菓を上げましょう。」とおっしゃった。翌朝すこし頭がいたかったが午頃には元気になった。今朝から大へん濃霧がひどくしきりに汽笛を鳴らしていたが大分船はおくれたらしくボーイが「アジアには間に合わないかもしれません。」といってきたので僕はきがきではなかった。

朝霧のあい間に小さな島の間を船がとおって居た。朝鮮の西南にある多島海だ

ろうと思っていたが、午後になると島も見えなくなって海上にはトビウオが飛んで居た。夕方甲板に出ると夕日が空も海も真赤に染めれ今水平線の彼方に沈まんとして居るところであつた。その美しさ、何にたとえ様もなくただ感歎の声をのんで見とれるばかりだった。大海原で見る水平線ははてしもない雄大な丸い物だなあと思つてるうちに夕日は全く沈みカモメが二三羽飛んで居た。ふっと横を見ると昨日の兵隊さんも見ておられた。僕に挙手の礼をなさったので僕もうやうやしく礼をかえした。

三日目の朝は皆早く起きて甲板に出ていた。今日大連に着くので胸がわくわくしてねむれないのだろう。僕もそうである。

間もなく大連港らしい島がかすかに見えだした。大連港に近づくときジャンクが幾くつも流れるように走っている。急行に乗る人と大連に下りる人との下船場がちがうので同室のおばさんとお別れしてそれぞれの場所に着いた。その内に検疫船がやって来た。一時間位かかるだろうときいて居たが、三十分位ですみ、いよいよ船は大連港の岸壁に横づけになった。もう一日も乗って居たいと思っていたが、早く大連の地がふみたくなくて、胸をわくわくさせながらタラップを下りた。いよいよあと一歩だ。僕はよしと力いっぱい元気に満洲の玄関口である大連に第一歩をふみしめた。

大連から奉天へ

大連駅に行く人達のために連絡バスがまわって居た。大連埠頭には苦力達が大勢働いて居る。バスの窓から眺める大連の街はなかなかりっぱそうであるが見物するひまもなく大連駅に着いた。駅には満人の赤帽がたくさん働いて居る。満人ばかりなので母が一寸まごついて居たが一人の赤帽に荷物をあずけここでも税関の検査をうけ、さっさとハトに乗りこめば赤帽がもう席を取っていてくれた。

一番に車内の広いのに驚いた。「はと」は静に動き出した。速力のまして来た頃には人家もなくなり早くも平野ばかりになった。

太陽がギラギラと広い平野いっぱいにてりつけていてとてもあつい。沿線の楊の木にかささぎの巣のあるのも見えた。熊岳城に近づくと望小山も見え出した。日露戦争の時山の頂にある小さな塔をロシア兵の斥候と思って一生懸命射撃したということである。あれを人間にしたらどんな大きな人だろうと思ったらおかしかった。外の景色にもあきた頃食堂の案内があったので、食堂に入った。しばらくすると遼陽の白塔が緑の木立につつまれて美しく立っているのが右窓に見える。大石橋辺までは近くに岩山が見えるが奉天に近づくと大平原になって畑にはトウキビのような物が作ってある。後どきいたら高粱だということだった。土をかためた様なものポツンポツンあって小さな入り口から人が出入りしている。不思議に

思って眺めているとそばのおじさんが「クリーたちの家ですよ」と教えて下さった。

すこしうとうと眠った間に奉天に着いた。

奉天に着いて駅の大きくてりっぱなのに驚いた。ここでも満人の赤帽が忙しそうに働いて居る。駅に出ると満洲国の飛行機が三機飛んで居た。すぐタクシーに乗ったが母が番地をわすれたので運転手が困った顔をして居たが、名前をいったら「ああ、あのお宅ならいつも御ひいきになっています」。とすぐわかった。街にはヤンチョ・マーチョがたくさん走って居る。どこかでしきりに花火があがって居る。突然行っただけでおじさんもおばさんもびっくりなさったが大変喜んで迎えてくださった。はじめてヤンチョというものに乗って大和ホテルに連れて行ってもらった。ホテルの前の広場には明治三十七八年戦役の記念碑立って居てその前に日本皇紀二千六百年奉祝大会という旗がたててある。一週間のお祝がつづいて今日が最後の日なのだそうである。昼の花火も奉祝の花火であったことがわかった。高い所から見る奉天はまことに平な大都市である。遠くに北陵の松林が小高く見えて居た。屋上に開かれて居る食堂のテーブルには日本人や外国人が食事をしている。白系露人の楽手たちのかなでくれる音楽の美しいメロディに耳をかたむけながら映画を見て居る様な気持ちで食事をすませた。町をすこし見物して

帰ったのが九時半過ぎ、昼間にぎやかだった前の通りもさすがにしんみりしてどこからかさみしいコキユウの音が流れてくる。

翌日光子さんに千代田公園に連れていってもらった。ヤンチョのニイヤンが光子さんに何かいっていたが、光子さんがいきなり「ヤーメンソウワ」とおっしゃったら「ヤーメンソウワプシン。」といって変な顔をした。とてもあつかった。翌日はおじさんが北稜に連れていって下さることになった。ハイヤーで奉天の街を見物しながら先ず同善堂に降りた。ここは不幸な人達の世話をするとこで赤ちゃんを捨てる時には台の上にのせるとベルがなる仕掛けになっていて、捨てられ赤ちゃんたちが一室に四五人ずつ育てられていた。骨と皮ばかりにやせた赤ん坊も居た。片わ者、老人たちといろいろの部屋があった。案内してくれたクーニャンに御苦さまといって又車に乗った。城内の満人街はとてもきたなくて、くさくて、むせる様な気になったが北陵はまことに静かな気持のよい所であった。奉天にもお別れしてよいよ新京に行く事になり此度こそ「アジア」にのりたいたいと思って二三日前から申込んで居るが「アジア」の急行券がなかなか手には入らない。幾度も幾度も電話をかけてやっと一等ならありますといったので一等の急行券を母が買った。僕はアジアの一等に乗れるかと思ったら嬉しくてたまらない。奉天駅でまって居ると大きなアジアがすべる

様にホームに入って来た。おばさんたちにあいさつをしてアジアに乗った。車窓は二重窓にびったりしまって開く事が出来ないのでガラス窓に字を書いたら他の人の見送りにきて居た人たちまで読んで笑って居られるのに気がついて一寸きまりがわるかった。

奉天から新京へ

八月一日十三時五十分、アジアは流れる様に動き出した。奉天の近くまではぼつんぼつんとある百姓家の形が■〔挿絵〕であったが、それからは■〔挿絵〕形になっている。北支那式と北満式ということである。冷房装置がきかなくてアジアの中はむし風呂の様なあつさである。車掌さんたちがしきりに調設して居たがだんだん涼しくなるととても気持がよくなった。はてしもない大平原をアジアはすばらしい速力で走っている。空には面白い形をした雲が浮んでいる。車掌さんが時々お茶やおしぼりを持ってきてくれる。四平街で一度とまったきり、アジアはばく進にばく進をつづけて居る。車掌さんが「間もなく新京でございます。」と案内にきた。窓を見ているとりっぱな建物の屋根が見え出して来た。又僕は胸がおどりと出て来た。十七時二十分アジアは新京駅にピタリと止った。

父が出張中なので古海さんが迎いに来て下さった。すぐ古海さんの所に行った。泊って行く様にすすめられたがおことわりして尹さんという方に父の家に送って

もらった。其の夜はゆっくり旅のつかれを休すめた。

翌朝は雨であった。コンクリート造りの同じ様な建物ばかりならび庭にはみなトマトが作ってある。外に出る度に自分の家を間ちがえておかしかった。母は満人相手の買物に大困りである。新京に着いてからは雨ばかり降って居る。満洲の夏はあつく冬は寒いものと思っていたのに毎日涼しくて寒い位である。

シャツを二枚重ねてもさむくてふるえる事があった。奉天では昼も夜も物さわがしかったが新京は実に静かである。毎日たいくつでさみしくて勉強する気になれないで、父の帰えりばかりまたれた。雨の晴間に交通会社の佐藤さんとはじめて街に出た。先ず道路の広いのに驚いた。新京には電車がなくバスが通って居る。児玉公園に行ってみた。長春時代からそのままでの姿でのこって居るのだそうだがもううす暗くてよく分らなかったが、大変広くて柳の木の大きいのが目についた。

七日父が突然帰ってきた時が実に嬉しかった。「お迎へに行つて上げられなくてすまなかったね。すこし見物しましたか。」とおっしゃった。「一昨日佐藤さんと一寸出たきり案内人なしではまだこわくてどっこも。」といったら、「それではこれからお父さんが案内して上げよう。其の前に観光バスに乗ると新京の概念がわかっていいね。」という事になり翌日さっそく電話で申込んだが満員だった。その翌日は父にさしつかえがあったので母と二人

で行った。幾台かのバスに分乗して新京駅を出発した。ガイドの説明によると新京は以前長春といったが満洲国が出来てから、其の名の様に国都建設計画によって出来た新しい街で、特別市の面積だけでも四百六十平方方呎もある大きなもののだそうである。新京の道路は幹線（路幅二十六米——六十米）と支線（十米——十八米）と補助線（十米以下）に分れて重な交叉点はロータリー式になって居て、一番大きい大同広場は周囲一軒もあるそうである。

まず忠霊塔におまいりするためにバスを下りた。白く美しい玉砂りを敷きつめた中に高さ百十六尺の立派な忠霊塔は見上げるばかりに高い。護国の英霊に心からの感謝の祈りをささげた。忠霊塔を背景に一同揃って記念さつえいをした。次は寛城子で下りた。ここは淋しい所で記念碑がぼつんと一つあるきりであった。ここでも黙とうをささげた。次に南嶺は満洲事変中の最激戦地だったのでそうである。兵營のそばにはいくつもトーチカがあり木立がうっそうとして居て、当時の我が軍の苦戦が思いやられた。二十四柱の勇士の方の墓に一つ一つていねいにおまいりをした。ここでしばらく休んだ。僕もスタンプをおしたりした。お墓のある後の方は眺望のひらけた気持のよい草原で秋の草花が咲いて居た。空はからりと晴れ渡り水源地である淨月たんが間近かにはっきり見える。間もなく又バスに乗り満人街に出た。ゴタゴタ並んだ店の

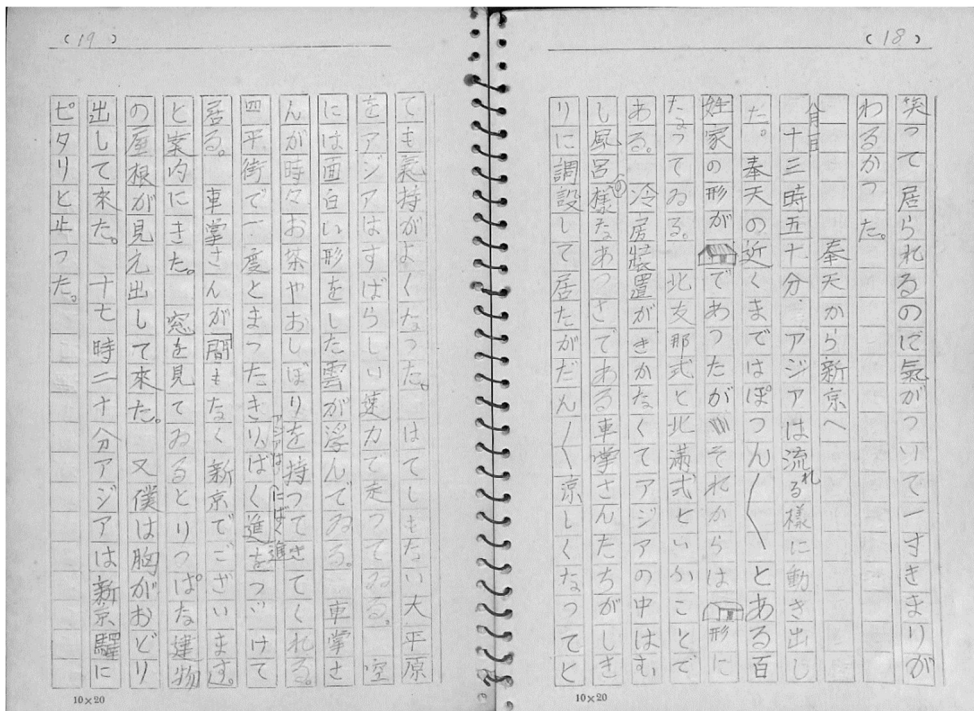
前に赤や青や黄色の布で作った旗やまろい房などがさがって居て、色なり形なりで肉を食べさせる店、お菓子屋、お風呂屋などがわかるのだそうだ。今日の観光バスに乗って僕は満洲国のいかに広いかという事をしみじみ感じた。それは動物園を見てからである。動物園の前をバスが走るのだが、走っても走っても動物園はつきない。ドイツのハーゲンベック動物園の十倍・上野の動物園の三十倍、等々に僕はぼかんとしてしまった。猛獣どもは密林を作って全部はなしがいなのだそうである。しかしセットが多く裏にまわるとガランドだと父からきいた。まだ全部出来上って居ないのだそうだがお猿の岩山がバスの中から見えた。「動物はオリに入れて人間が見るのが普通でございますが、ここでは人間がオリの中にはいって動物を見物するのでございます。」とガイドが言って皆を笑わせた。前も後も右も左もはてしもない広い広いもので動物園なんかは新京特別市のごく一小部分に過ぎないのにこの広さ。僕は大陸の広さにただ感心するばかりだった。建国広場から新京駅まで大同大街の大きな道路が一直線につづいている。向十軒とかいったがよくわからなかった。バスは安民大路から順天大街のドロや柳の多い路を走って行く。

産業部・交通部・司法部・治安部・國務院・などさまざまな形をした建物が樹木の間々に建っている。ことに堂々たる国

務院の建物が目立ってりっぱなのはのびゆく満洲の国都を物語っている様である。宝山デパートでさっきの記念写真が出来上がって居た。ここで一日の観光を共にした人々と別れてデパートの屋上に上って見た。南嶺では間近に見えた浄月潭の山々が遠くかなたの地平線上に紫色に浮かび上った様に見える。左には宮廷の黄色お屋根が一きわ目立っている。これで北より東南西の順序に新京を大体観光した。時間は約三時間であった。

ハルピンにも行くつもりだったがコレラが流行しているので今年はやめることにした。そのかわり吉林に連れていってもらはずだったのに、その日は雨で駄目になり、ざんねんだった。新京は父にあっちこっち連れて行ってもらったので大分くわしくなってきたが学校の始まるのも間近くなったので、来年の夏を父と約束して一ヶ月のたのしい思い出を新京に残して帰りは朝鮮を通して帰えることにした。

「二学期も元気にしっかり勉強しなさい。」と言って見送ってくれた父に「さようなら。」を言つてのぞみの車中の人となった。時に八月二十八日十八時五十分であった。終



「満洲紀行」原文（18-19 頁目）



新京忠霊塔前でのツアー集合写真

(前列左から3人目が一郎氏)

写真資料が語るもの

——公主嶺小学校同窓会写真アルバムより——

解題

大石 茜

本稿で紹介する写真アルバムの目録は、アルバムに綴じられた公主嶺の教育関係の写真（以下、写真アルバムと略称）の目録で、公主嶺小学校同窓会事務局の土屋洸（ひろ）子さんからご寄贈いただいた。公主嶺小学校同窓会の歴史や、写真を収集した経緯については、土屋さんご自身が本稿に解説を書いてくださっている。ここでは、寄贈に至る経緯及び、これらの写真の資料的価値について解説していく。



写真1 公主嶺小学校37回生同期会にて、左から土屋洸子さん・大石・甲賀・菅野、2018年5月19日撮影

1 資料と出会った経緯

資料をご寄贈くださった土屋洸子さんには、土屋さんの女学校の同級生である竹内テル子さんからの紹介でお会いすることとなった。2016年11月に筆者は、回想録『茜雲-敗戦から引き揚げまでの一年二ヶ月の記録-』（2016年）を執筆した竹内テル子さん（1932年12月生）を訪ねインタビューをおこなった。竹内さんは遼陽小学校卒業後、新京敷島高女に進学し、女学校1年の夏に敗戦を迎え、引揚げ前に父親を亡くしたことにより、戦後多くの苦勞をなさった方である。竹内さんから紹介していただいたのが、新京敷島高女の同級生であり、現在公主嶺小学校同窓会事務局を務める土屋洸子さん（1933年1月生）だった。土屋さんは、満洲での経験についての語り部の活動や、同窓会事務局の仕事をなさっており、研究・調査の助けになるだろうという竹内さんのご配慮により、幸運にも土屋さんと知り合うこととなったのである。

2017年1月に筆者は土屋さんのご自宅を訪ね、満洲での経験についてお話をうかがった。はじめは筆者の個人的な研究活動であったが、土屋さんは公主嶺小学校や公主嶺農事試験場などの公主嶺の歴史について非常に詳しく、研究会として土屋さんに引き続きインタビューをさせていただくこととなった。これまで9回にわたりご自宅でインタビューを行った。さらに、年に一度開催されている公主嶺小学校同窓会の懇親会や37回生同期会にも参加させていただいた。何度もインタビューを重ねる中、本研究会の活動にご賛同くださり、本稿で紹介する写真アルバムを含め様々な資料をご提供いただいた。これらの資料は研究会で整理し、いずれは公開できるようにと検討している。また、土屋さんの保管する資料の一つであるお母様の日記は、今後研究会で出版する予定である。

2 写真の資料的価値

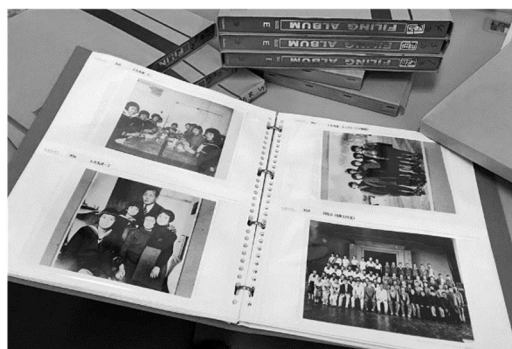


写真2 ご寄贈いただいた写真アルバムの一部

この度ご寄贈いただいた写真アルバムは、土屋さんの解説にあるように、公主嶺小学校同窓会が会員から収集した写真のうち、幼稚園や小学校といった教育施設に関連するものを整理・焼き直しし、アルバムに綴じたものである。同窓会の発行した写真集『満洲公主嶺—その過去と現在—』(以下、写真集と略称)に収録しきれなかった多くの写真がまとめられている。出版された写真集には、家屋や街の写真も掲載されているが、この写真アルバムには、人物の写真のみが収録されている。写真の焼き増しを希望する会員に販売することが目的だったからである。さらに同窓会事務局では写真アルバムの目録を作成し、撮影年や撮影場所、提供者等を記録した。この目録は写真アルバムの全体像がつかめる資料であるため、本稿に掲載し紹介することとした。

公主嶺にあった柳写真館の館主・高柳祐之助さんの子息である今井律雄さん(28回生)は家業を継ぎ、引揚げ後は都内で写真館を営んでいた⁽¹⁾。土屋さんと共に、収集した写真のサイズを揃えアルバムに収録し、会員からの焼き増しの注文に対応したのがこの今井さんだった。同窓会に写真館の経営者がいたことは、写真を同窓会で管理する上で非常に恵まれたことだった。

写真アルバムの内容は、クラスごとの集合写真や、学校でのスナップ写真であり、その数は442枚にのぼる。これだけの数の写真を収集し、アルバムに整理し

ている同窓会は稀であろう。公主嶺小学校の歴史を追うことのできる貴重な写真資料である。子どもや教員の服装・髪型の変化や、写真の撮影場所の変遷といった写真資料を活かした研究の可能性が開かれている。

またこれらの写真は、公主嶺という町の特徴をよく表している。公主嶺は小さな町で、幼稚園と小学校は一校のみであり、中学校や女学校は一校もなかった。学校関連の同窓会は、学校ごとにそれぞれ組織する場合が多い。しかし小学校が一つしかなかったため、同窓会も一つである。そのため学校に関わる資料が全てこの公主嶺小学校同窓会に集まった。小さな町であるがゆえに、戦禍を免れた写真が散在せず、写真集及び写真アルバムに収録され得たと言えよう。

公主嶺の町に写真館が多かった点も指摘しておく必要があるだろう。『満洲公主嶺-過ぎし40年の記録-』には「軍隊の出入りする写真屋も古くからの柳写真館、さくら写真館に、坂田、森脇、西、串崎写真館と、あの狭い町に六軒もできた」とある⁽²⁾。公主嶺には旅団司令部があったほか、歩兵、野砲兵、工兵、騎兵（のちに戦車）の大隊・中隊が配備され、また陸軍の学校があったことでも知られている。公主嶺の商店は、これらの陸軍関係の需要に応えるかたちで発展していった側面をもっており、写真館もその一つであった。学校関連の写真をどの写真館が担当していたのかは、定かではない。しかし



写真3 柳写真館（公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988年、94頁）



写真4 旅団司令部（公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988年、108頁）

ながら、多くの写真館があり、多くの写真が撮られていたからこそ、今なおこれだけの数の写真が残っている。公主嶺小学校同窓会でお会いした細谷和子さん（31回生、1926年12月生）は、母親が新しい着物を仕立てるたびに、それを着てさくら写真館で記念撮影をしていたという⁽³⁾。公主嶺の人々の中には、写真館を身近に感じる生活をしていた人もいたようである。

またスナップ写真からは、日常的にカメラを愛用していた家庭が一定数あったことがうかがえる。土屋さんの家庭でもお母様がカメラ好きで、大連にカメラを買いに行ったことを覚えているという。写真アルバムのスナップ写真及び、写真集の家屋や街の写真には、個人によって撮影されたものが数多く含まれている。人々が日ごろからカメラを使用していたのであろう。

満洲から引揚げの際、写真は持ち帰れなかったと言われている。写真を同窓会に提供できた方々の多くは、敗戦前に内地へ戻った方、もしくは敗戦前に内地の親戚等に写真を送っていた方だと思われる。目録の写真提供者の一覧を参考に、複数の写真を提供していた方の所在を土屋さんにうかがったが、すでに他界された方も多く、写真を提供できた経緯はよくわからなかった。また目録からは、前述の柳写真館を継いだ今井律雄さんが、多数の写真を提供していたことも確認できる。今井さんの弟である高柳衛さんによれば、1946年8月に引揚げた際に、写真を荷物に隠して持ち帰ったという⁽⁴⁾。柳写真館に残された貴重な写真は、ご家族の手によって守られ、今日まで受け継がれることとなった。

写真館やカメラという文化の根づいた公主嶺で撮影された写真が、戦禍を逃れ、公主嶺小学校同窓会に集まった。数百枚にのぼる写真を整理し、焼き直すノウハウが同窓会にあったことで、こうしてまとまった写真アルバムが完成した。公主嶺小学校同窓会だからこそ残すことのできた貴重な資料と言えるだろう。

⁽¹⁾ 今井さんの弟である高柳衛さん（1931年3月生、35回生）によれば、父・高柳祐之助さんは衛さんが小学生のときに他界しており、兄である今井律雄さんが家業を継いでいた。敗戦から引揚げまでの約1年間、今井さんは他の写真館の方々と共同で写真館の経営を続けていた。2018年10月5日筆者による電話でのインタビュー。

⁽²⁾ 公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺-過ぎし40年の記録-』1987年、299頁。

⁽³⁾ 2017年11月22日筆者によるご自宅でのインタビュー。写真館で撮影した写真は今も細谷さんの手元に残っている。細谷さんのお父様は軍人だった。

⁽⁴⁾ 2018年10月5日筆者による電話でのインタビュー。

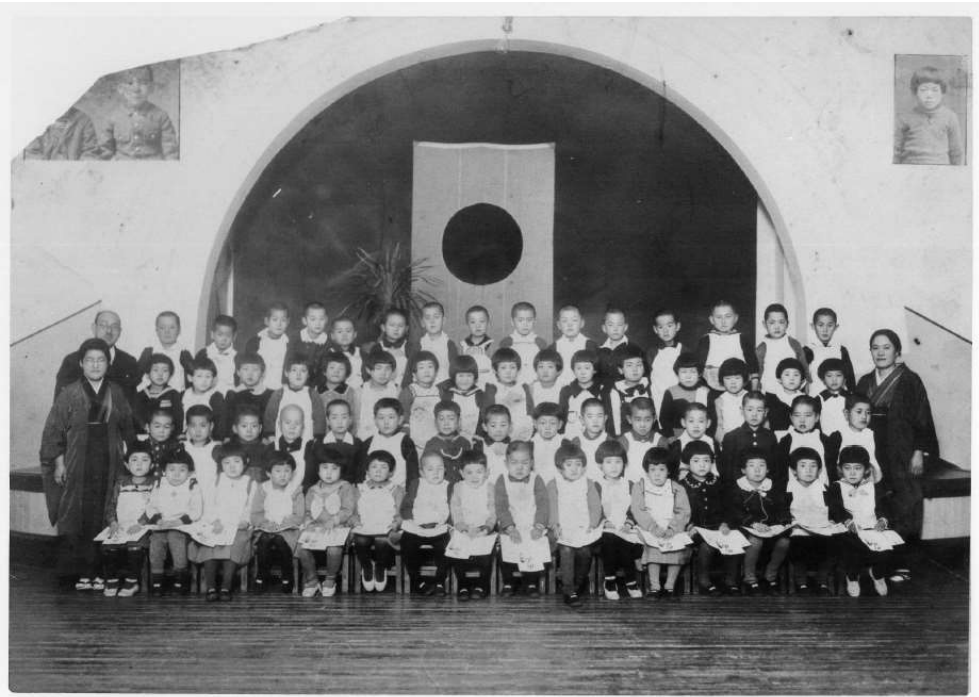


写真5 37回生幼稚園年少組卒園式（1938年3月、写真アルバムより）



写真6 入学式後の1年岩森学級（1939年4月、写真アルバムより）

学年別クラス写真について追記

土屋 洸子

(公主嶺小学校同窓会)

本稿では公主嶺小学校及び、公主嶺小学校同窓会の変遷を整理し、寄贈させていただいた学年別クラス写真について紹介する。

(1) 公主嶺小学校の変遷

会報『公主嶺』第 32 号 1990 年 4 月 20 日発行 p4「公主嶺小学校の変遷」と題して、土屋洸子が学校名の変遷を報告した。

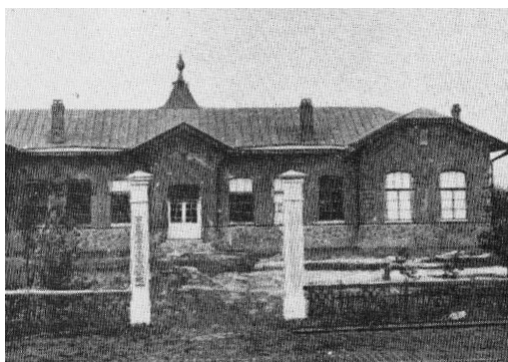


写真 1 1935 年までの公主嶺小学校校舎（公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988 年、22 頁）

学校名	期間	経営	生徒
公主嶺尋常高等小学校	1907 年 11 月 18 日	南満洲鉄道株式会社	1～29 回生
公主嶺日本小学校	1937 年 12 月 1 日	満洲国吉林省日本学校組合	30～33 回生
公主嶺在満国民学校	1941 年 4 月 1 日	吉林省日本学校組合	34～37 回生
公主嶺日本人学校	1945 年 11 月 12 日 ～1946 年 7 月 1 日	公主嶺日本人会	38 回生卒業 44 回生入学
日籍技術員工子弟公主嶺国民学校	1946 年 9 月 ～1947 年 8 月 20 日		39 回生数名卒業 45 回生 3 名入学 小学生 33 名、 中学生 3 名在学

尋常高等小学校は満鉄によって設立されたが、1937年に教育行政が満洲国に移管された際に、日本人子女の学校は日本学校組合の経営となった。1941年の国民学校令により内地及び外地の尋常高等小学校は国民学校に変わり、満洲では在満国民学校となった。戦後、引揚げまでの間、日本人会によって学校が運営され、1946年9月には日籍技術員工子弟公主嶺国民学校と名称が変わった。

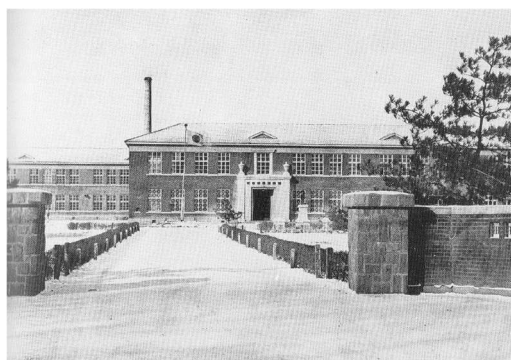


写真2 公主嶺小学校の正門（1937年頃、公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988年、36頁）

（2）公主嶺小学校の同窓会（戦後日本に引き揚げた後の同窓会）と諸事業（＊印）

名称	年月日	場所	参加人数
第1回同窓会	1976年5月8日	東京・貿易センタービル	221名
第2回同窓会	1978年5月28日	京都・国際会館	148名
第3回同窓会	1981年7月25日	東京・貿易センタービル	171名
第4回同窓会	1984年9月16日	岡山・郵便貯金会館	142名
第5回同窓会	1986年10月11日	東京・九段会館	183名
◎創立80周年記念誌の作成を決定する ＊記念誌『満洲公主嶺—過ぎし40年の記録—』（1987年11月18日付で発行）			
第6回同窓会	1988年10月9日	東京・日比谷	204名
＊写真集『満洲公主嶺—その過去と現在—』（1988年11月18日付で発行） ＊33回生会報『公主嶺』を同窓会会報とする（会報『公主嶺』31号1989年8月20日付）			
第7回同窓会	1990年9月16日	東京・浅草	200名

	* 学年別クラス写真の作成 (1990 年 3 月 3、4 日)		
第 8 回同窓会	1992 年 9 月 27 日	大阪・太閤閣	199 名
第 9 回同窓会	1994 年 10 月 2 日	東京・浅草	155 名
第 10 回同窓会	1997 年 9 月 28 日	東京・浅草	153 名
	◎創立 90 周年記念のビデオの作成を決定する * ビデオ『満洲公主嶺—100 年の変貌—』(1998 年 11 月 18 日付で制作)		
第 11 回同窓会	2000 年 10 月 15 日	東京・浅草	181 名
第 12 回同窓会	2005 年 10 月 10 日	東京・浅草	103 名
創立 100 周年 記念大会	2007 年 10 月 28 日	東京・上野	94 名
	* ビデオ『満洲公主嶺—100 年の変貌—』を DVD 化する * 会報「公主嶺」1～53 号を合本する (2009 年 8 月 1 日付)		

(3) 学年別クラス写真について



写真 3 公主嶺小学校校舎の全景 (1944 年頃、公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988 年、37 頁)

上表に記載したが、公主嶺小学校同窓会は、1986 年 10 月 11 日の第 5 回同窓会で、学校創立 80 周年を記念して『満洲公主嶺—過ぎし 40 年の記録—』を編集・発行することを決定した。

教職員、同窓生から原稿を集めて 546 ページの記念誌を、1987 年 11 月 18 日付

で発行したが、原稿だけでなく、貴重な写真が多数集まったので、記念誌を編集中に『写真集』の発行することを編集委員会で決めた。

A4 版、190 ページ、戦前をモノクロ写真 286 枚、現在をカラー写真 229 枚で構成し、写真集『満洲公主嶺—その過去と現在—』が 1988 年 11 月 18 日付で発行された。

その後、1998 年 11 月 18 日付でビデオ『満洲公主嶺—100 年の変貌—』を発行し、記念誌と写真集を合わせて、3 部作とした。

記念誌、写真集を編集しているとき、どちらにも収録できなかった多数の写真が集まったので、写真を学年別に整理して後世に残そうと、編集委員会で決めた。そして、会報『公主嶺』32 号 (1990 年 4 月 20 日発行) p2 に、伊藤聖さん (33 回生) が「学年クラス写真をフィルム化」と

題して、次のように書いている。

写真集『満洲公主嶺』の作成に当たって、多くのクラス写真を皆さんから提供されました。当初は、「学び舎の日々」として収録する予定でしたが、製作コストその他の諸事情で、小学校の写真は代表的なものだけにとどめざるを得ませんでした。

しかし、いずれも皆さんには思い出深い写真であり、植民地教育史として貴重な資料ですので、すべてフィルム化して長く記録に残し、また、焼き増しの便を図ることにしました。フィルム作成は3月3、4日両日、今井律雄(28回生)、土屋洸子(37回生)両氏の全面的協力で、のべ13時間かけて行われました。1枚1枚大きさが違うので、ピントを合わせ直し、汚れをふきとっての422枚の撮影でした。

これまでよく分からなかった公主嶺青年学校の第1回卒業生の写真(昭和12年3月)が見つかるなどの副産物もあり、今後、青年学校の名簿作成も進めたいと思っています。なお、写真は焼き付けたうえ、リストと照合して、各学年ごとのアルバムにし、回覧、複写できるようにします。写真返却はその後になりますので、ご了承ください。

以上のようないきさつを経て、フィル

ム化した422枚の写真は、2Lサイズに統一して焼き付け、タイトルを付けて、アルバム9冊に整理した。

9冊のアルバムは、1990年9月16日の第7回同窓会で展示し、各学年に該当写真リストを配布して、焼き増しを希望する人が注文できるようにした。

その後、1991年に、希望者135名に写真721枚を渡すことができた。戦後引き揚げた同窓生は、引き揚げ時の厳しい荷物制限で、写真、ノート、本などを一切携行できなかった為、焼き増しした写真を手にしたことを、大変感謝してくれた。会報『公主嶺』34号(1991年8月25日発行)には、次のような感想が掲載されている。

「大変な作業だったと思います。特に4011は待望の写真だったので、感激しています。アルバムのブランクが埋まりました」(浅野兼迪・40回生)

「待望のお写真、昨日届きました。原形は変色しぼろぼろになっていたものと思いますが、見事に復元され、引き伸ばされた立派な写真で、ありがとうございました」(久保田治子・33回生)

「本日は公主嶺の写真を送っていただきまして、ありがとうございました。兄、弟、妹が写っていました。

た。すぐに兄や妹が分かりました。きっと皆喜ぶことと思います」(木村晃子・40 回生)

「写真、確かにいただきました。修学旅行などの写真を見ていると、いろいろなことが思い出されます」(幸島知代子・36 回生)

「写真、拝受しました。いずれもただ懐かしく、懐旧の思いにふけています。幼稚園講堂、楠公像前、正面入口、射撃場など、いろいろ思い出があります。担任していただいた先生方も皆お若くて、まさに往時茫々ですね(岩垂司・37 回生)

「お願いしていた公主嶺小学校関係の写真をお送りいただき、ありがとうございました。思い出の先生方のことやクラスの人たちのことを、改めて懐かしく思い出しました」(古谷卓直・旧職員)

学年別クラス写真は、各回生の幼稚園入園から卒園までと、小学校入学から卒業まで、クラス別に毎年 1、2 枚ずつ撮影された。一学年は 2 クラスで、1・2 年生では男女混合の、3 年生以上は男女別組の編成だった。「男女七歳にして席を同じくせず」のクラス編成である。写真の撮影場所は、公主嶺神社、幼稚園の講堂、教室、

玄関、新・旧小学校の玄関、講堂、運動場、楠木正成銅像前、教室ロシア墓地および修学旅行先などであった。

なお、1945 年 11 月から 1946 年 7 月まで開校した日本人学校では、終戦後の大変な混乱期であったから、学年別の写真は無いが、写真集『満洲公主嶺—その過去と現在—』の p39 に、No76「昭和 21 年度の職員」として、昭和 21 年 6 月 17 日撮影の教職員 15 名が写っている。当時の公主嶺には写真館が 5 軒はあった(高柳、さくら、森脇、坂田、伊東)から、戦後でも撮影できたのか、不思議な思いが脳裏をよぎる。



写真 4 昭和 21 年度の職員(公主嶺小学校同窓会編『満洲公主嶺—その過去と現在—』1988 年、39 頁)

以上、公主嶺小学校同窓会が収集した公主嶺小学校の学年別クラス写真のアルバム 9 冊は、2018 年 8 月に「満洲の記憶」研究会に寄贈した。

これらの写真が、旧満洲の研究に寄与されることを、切に願っている。

公主嶺教育関連写真目録

編集・整理：甲賀 真広

凡例

・写真番号は、公主嶺小学校同窓会写真アルバムに収録されている全ての写真につけられた通し番号である。4桁の写真番号のなかで上2桁の数字によって、職員、各回生、青年学校などに分類している。00が職員関係の写真、09から44までは、9回生から44回生までの各学年に関係する写真、01はその他の写真、02は青年学校の写真を示している。

・収録番号は、公主嶺小学校同窓会編集の写真集『満洲公主嶺-その過去と現在-』における通し番号である。また、「記」は同会による記念誌『満洲公主嶺-過ぎし40年の記録-』に収録された写真である。

・所蔵者及び回生は、該当写真の所蔵者の氏名及び職員、回生を併記している。

・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。

目録

職員				
写真番号	収録番号	写真内容	備考	所蔵者及び回生
0001	41	昭和3年度職員	堀井校長	植松稔・25
0002	42	昭和5年度職員	堀井校長	植松稔・25
0003	43	昭和6年度職員	堀井校長	植松稔・25
0004	44	昭和9年11月職員	佐藤校長	水尾翠・職員
0005	45	昭和10年12月職員	佐藤校長	水尾翠・職員
0006		昭和12年1月1日	白雲寮前	山口寅蔵・職員

0007		昭和 12 年 3 月職員	高橋校長	山崎明・29
0008		昭和 12 年夏職員	高橋校長	岩森亘・職員
0009	71	昭和 13 年 3 月職員	高橋校長	岩森亘・職員
0010		昭和 14 年 3 月職員	高橋校長	岩森亘・職員
0011	72	昭和 14 年 10 月職員	井家校長	倉垣利男・職員 岩森亘・職員 三井正子・職員
0012		昭和 15 年 10 月職員	井家校長	三井正子・職員
0013	73	昭和 16 年 3 月職員	井家校長	倉垣利男・職員
0014		昭和 16 年 9 月職員	井家校長	三井正子・職員 斎藤武男・職員
0015	74	昭和 17 年 10 月職員	井家校長	三井正子・職員
0016		昭和 18 年 8 月職員	山木校長	石川利一郎・職員
0017		昭和 18 年 11 月 18 日	学芸会	木村晃子・40
0018	75	昭和 19 年 8 月職員	山木校長	間宮ヒナ・職員
0019	76	昭和 21 年 6 月 17 日職員	山木校長	叶多嘉子・職員 佐藤衛・職員
9 回生				
0901	46	卒業式	大正 6 年 3 月	清川キヨ・12
14 回生				
1401		旅順中入学祝い	大正 11 年 3 月	神田誠之・14
1402		卒業式	大正 11 年 3 月	寺田敏子・14
18 回生				
1801		幼稚園卒園式	大正 9 年 3 月	湯本常雄・18
1802		6 年旅順大連修学旅行・二〇三高地	大正 14 年	湯本常雄・18
19 回生				
1901	53	陸上 2 連覇	大正 15 年 10 月	高取知恵子・19
1902		6 年旅順大連修学旅行・忠霊塔	大正 15 年	富田英俊・19
1903	47	卒業式	昭和 2 年 3 月	富田英俊・19

20 回生				
2001		陸上 3 連覇	昭和 2 年 9 月	コピー
2002		卒業式	昭和 3 年 3 月	三浦小太郎・20
22 回生				
2201		5 年水師営修学旅行	昭和 3 年	足立三男・32
2202		6 年平壤修学旅行	昭和 4 年 5 月 7 日	足立三男・32
2203	54	陸上 4 連覇	昭和 4 年 9 月	山下昌平・職員
2204		高等科	昭和 7 年 2 月 14 日、 奉安殿前で	足立三男・32
2205		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と 同じ	
2206		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
23 回生				
2301		1 年終了式	大正 15 年 3 月	中本都子・23
2302		4 年熊岳城望小山旅行	昭和 3 年	中本都子・23
2303		6 年水師営修学旅行	昭和 5 年	中本都子・23
2304		卒業式	昭和 6 年 3 月	佐藤衛・職員
2305		少年健児団結団式	昭和 7 年 11 月 3 日 2920 と同じ	
2306		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と 同じ	
2307		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
2308		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
24 回生				
2401		4 年熊岳城温泉聚落	昭和 4 年	川北和子・24
2402		5 年熊岳城温泉聚落	昭和 5 年	川北和子・24
2403		5 年小小学級	昭和 5 年	川北和子・24
2404		卒業式	昭和 7 年 3 月	手塚明石・24

2405		少年健児団結団式	昭和 7 年 11 月 3 日 2920 と同じ	
2406		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と 同じ	
2407		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
2408		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
25 回生				
2501		5 年山下学級	昭和 6 年 奉安殿前 で	山下次雄・25
2502		6 年旅順修学旅行	昭和 7 年	山下次雄・25 前田綾子・25
2503		卒業式	昭和 8 年 3 月	山下次雄・25
2504		少年健児団結団式	昭和 7 年 11 月 3 日 2920 と同じ	
2505		同窓会	昭和 14 年夏 2919 と 同じ	
2506		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と 同じ	
2507		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
2508		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
26 回生				
2601		幼稚園卒園式	昭和 3 年 3 月	三浦二郎・26
2602		4 年大塚養護学級	昭和 6 年	長尾英雄・26
2603	48	4 年中島養護学級	昭和 7 年 3 月 奉安 殿前で	小久保有彩・26
2604		6 年星ヶ浦海浜聚落	昭和 8 年 7 月	小久保有彩・26
2605		6 年田中学級	昭和 8 年 11 月	小久保有彩・26 水野紫露・26

2606		少年健児団結団式	昭和7年11月3日 2920と同じ	
2607		同窓会	昭和14年夏 2919と 同じ	
2608		同窓会	昭和13年夏 3018と 同じ	
2609		高2月ヶ浦海浜聚落・ ゆかた姿	昭和10年 2809と同 じ	
2610		高2月ヶ浦海浜聚落・ テント前	昭和10年 2810と同 じ	
2611		高2月ヶ浦海浜聚落・ 船	昭和10年 2811と同 じ	
2612		高2卒業式	昭和11年3月 2812 と同じ	
2613		同窓会	昭和15年夏 3231と 同じ	
27 回生				
2701		幼稚園年少組卒園式	昭和3年3月 2601 と同じ	
2702	51	4年学芸会・村の鍛冶 屋	昭和7年	今井律雄・28
2703	48	3年中島養護学級	昭和7年3月 2603 と同じ	小久保有彩・26
2704		5年小小学級	昭和8年 玄関前で	山浦薫・27
2705		5年星ヶ浦海浜聚落	昭和8年7月 2604 と同じ	小久保有彩・26
2706	285	6年公主陵遠足	昭和9年9月	天笠文弥・29 今井律雄・28
2707		卒園式	昭和10年3月	山浦薫・27 今井律雄・28
2708		宗浚祐学級（高等科1 年）	昭和11年3月	今井律雄・28

2709		高等科 2 年卒業	昭和 12 年 3 月	山崎明・29
2710		少年健児団結団式	昭和 7 年 11 月 3 日 2920 と同じ	
2711		同窓会	昭和 14 年夏 2919 と 同じ	
2712		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と 同じ	
2713		高 1 月ヶ浦海浜聚落・ ゆかた姿	昭和 10 年 2809 と同 じ	
2714		高 1 月ヶ浦海浜聚落・ テント前	昭和 10 年 2810 と同 じ	
2715		高 1 月ヶ浦海浜聚落・ 船	昭和 10 年 2811 と同 じ	
2716		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
28 回生				
2801		幼稚園	昭和 4 年 9 月	今井律雄・28
2802		幼稚園卒園式	昭和 5 年 3 月	今井律雄・28
2803		2 年山本又学級	昭和 6 年 玄関前で	今井律雄・28
2804	51	3 年学芸会・村の鍛冶 屋	昭和 7 年 2702 と同 じ	今井律雄・28
2805		4 年大塚養護学級	昭和 8 年	今井律雄・28
2806		4 年熊岳城温泉主聚落	昭和 8 年	今井律雄・28
2807	285	5 年公主陵遠足	昭和 9 年 9 月 2706 と同じ	天笠文弥・29 今井律雄・28
2808		6 年大谷学級	昭和 10 年 教室で	今井律雄・28
2809		6 年月ヶ浦海浜聚落・ ゆかた姿	昭和 10 年	今井律雄・28 山領由紀・29
2810		6 年月ヶ浦海浜聚落・ テント前	昭和 10 年	今井律雄・28
2811		6 年月ヶ浦海浜聚落・ 船	昭和 10 年	今井律雄・28 山領由紀・29

2812		卒業式	昭和 11 年 3 月	今井律雄・28
2813		峯先生とともに	昭和 11 年 3 月	今井律雄・28
2814		高等科 2 年	昭和 3 年春	岩森亘・職員
2815		プールで	昭和 12 年夏 高柳律雄・中野利喜 2921 と同じ	
2816		同窓会	昭和 14 年夏 2919 と同じ	
2817		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と同じ	
2818		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と同じ	
2819		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と同じ	
29 回生				
2901		2 年松原学級	昭和 8 年 3 月 奉安殿前で	山領由紀・29
2902		3 年大塚養護学級	昭和 8 年 2805 と同じ	今井律雄・28
2903	49	4 年遠藤学級	昭和 9 年 旧校舎昇降口で	天笠文弥・29
2904	285	4 年公主陵遠足	昭和 9 年 9 月 2706 と同じ	今井律雄・28 天笠文弥・29 山領由紀・29
2905		5 男香西学級	昭和 10 年 講堂で	天笠文弥・29
2906		5 女遠藤学級	昭和 10 年 講堂で	山領由紀・29
2907		5 年月ヶ浦海浜聚落・ゆかた姿	昭和 10 年 2809 と同じ	今井律雄・28 山領由紀・29
2908		5 年月ヶ浦海浜聚落・テント前	昭和 10 年 2810 と同じ	今井律雄・28
2909		5 年月ヶ浦海浜聚落・船	昭和 10 年 2011 と同じ	今井律雄・28 山領由紀・29

2910	52	5 女学芸会	昭和 11 年 3 月 旧校舎講堂で	山領由紀・29
2911		6 年旅順大連修学旅行・水師營	昭和 11 年	天笠文弥・29
2912		6 年旅順大連修学旅行・旅順忠霊塔	昭和 11 年	天笠文弥・29
2913		6 年旅順大連修学旅行・二〇三高地	昭和 11 年	天笠文弥・29
2914		6 年旅順大連修学旅行・東鶏冠山	昭和 11 年	天笠文弥・29
2915		6 年旅順大連修学旅行・後藤新平像	昭和 11 年	天笠文弥・29
2916		卒業記念写真帖	昭和 12 年 3 月	山崎明・29
2917		6 男香西学級	昭和 12 年 3 月 卒業記念	山崎明・29
2918		6 女井元・坂本学級	昭和 12 年 3 月 卒業記念	山崎明・29
2919		同窓会	昭和 14 年	今井律雄・28
2920		少年健児団結団式	昭和 7 年 11 月 3 日	今井律雄・28
2921		プールで	28 回生高柳律雄、中野利喜	今井律雄・28
2922		高等科 1 年	昭和 13 年春	岩森亘・職員
2923		高等科 2 年卒業	昭和 14 年 3 月	岩森亘・職員
2924		卒業記念写真帖から—1		山崎明・29
2925		卒業記念写真帖から—2		山崎明・29
2926		卒業記念写真帖から—3		山崎明・29
2927		同窓会	昭和 13 年夏 3018 と同じ	
2928		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と同じ	
30 回生				

3001		1 年山元又次郎学級	昭和 7 年 旧校舎講堂で	門間弘江・30
3002		3 女坂本学級	昭和 9 年 旧校舎昇降口で	横川やす子・30
3003		4 女大西学級	昭和 10 年 新校舎昇降口で	横川やす子・30
3004		4 年熊岳城温泉聚落	昭和 10 年 7 月	横川やす子・30
3005		4 年熊岳城温泉聚落・熊岳河	昭和 10 年 7 月	横川やす子・30
3006		4 年熊岳城望小山	昭和 10 年 7 月	横川やす子・30
3007		5 年奉天撫順修学旅行	昭和 11 年春	横川やす子・30
3008		5 年月ヶ浦海浜聚落	昭和 11 年 7 月	横川やす子・30
3009		6 年旅順大連修学旅行・水師營	昭和 12 年 5 月	横川やす子・30
3010		6 年旅順大連修学旅行・東鶏冠山	昭和 12 年 5 月	横川やす子・30
3011		6 年旅順大連修学旅行・アンズの大連	昭和 12 年 5 月	時繁博・30 横川やす子・30
3012	91	バレー大会優勝	昭和 12 年 10 月	武田起充子・30
3013		6 男田中真学級	昭和 13 年 3 月 新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3014		6 女大西学級	昭和 13 年 3 月 新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3015		6 女友達—1		横川やす子・30
3016		6 女友達—2		横川やす子・30
3017		6 女友達—3（スケートの強者）		横川やす子・30
3018		同窓会	昭和 13 年夏	松本満正・32
3019		高等科 2 年卒業	昭和 15 年 3 月	水谷清遵・32
3020		同窓会	昭和 14 年夏 2919 と同じ	

3021		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
3022		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
31 回生				
3101		5 男松本学級	昭和 13 年 3 月 新校 舎玄関前で	岩森亘・職員
3102		5 女岩森学級	昭和 13 年 3 月 新校 舎玄関前で	岩森亘・職員
3103		6 年月ヶ浦海浜聚落・東 郷寮	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3104		6 年月ヶ浦海浜聚落・船	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3105		6 年月ヶ浦海浜聚落・砂 浜	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3106		6 年月ヶ浦海浜聚落・水 中―1	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3107		6 年月ヶ浦海浜聚落・水 中―2	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3108		6 年月ヶ浦海浜聚落・お やつ	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3109		6 年月ヶ浦海浜聚落・水 師営	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3110		6 年月ヶ浦海浜聚落・二 〇三高地	昭和 13 年 7 月	岩森亘・職員
3111	94	相撲場土俵開き―1	昭和 13 年秋	岩森亘・職員
3112		相撲場土俵開き―2	昭和 13 年秋	岩森亘・職員
3113	90	バレーボール練習	昭和 13 年秋	岩森亘・職員
3114		6 年学芸会・合唱	昭和 13 年 11 月	岩森亘・職員
3115		6 年学芸会・劇菅公梅の 別れ	昭和 13 年 11 月	岩森亘・職員
3116		6 男松木学級	昭和 14 年 3 月	岩森亘・職員
3117		6 女岩森学級	昭和 14 年 3 月	岩森亘・職員

3118		6 女岩森学級	昭和 14 年 3 月 卒業 の日、楠公像前で	岩森亘・職員
3119		卒業記念写真帖	昭和 14 年 3 月	岩森亘・職員
3120		卒業記念写真帖から—1	朝会など	岩森亘・職員
3121		卒業記念写真帖から—2	6 男女授業など	岩森亘・職員
3122		卒業記念写真帖から—3	学芸会など	岩森亘・職員
3123		卒業記念写真帖から—4	スケート	岩森亘・職員
3124		卒業記念写真帖から—5	学芸会	岩森亘・職員
3125		卒業記念写真帖から—6	運動会	岩森亘・職員
3126		卒業記念写真帖から—7	旅行、収穫	岩森亘・職員
3127		高等科 2 年卒業	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3128		同窓会	昭和 14 年夏 2919 同 じ	
3129		同窓会	昭和 15 年夏 3231 と 同じ	
3130		高 2 卒業式	昭和 16 年 3 月 3324 と 同じ	
3131		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
32 回生				
3201		幼稚園	昭和 8 年冬	水谷清遵・32
3202		幼稚園卒園式	昭和 9 年 3 月	松本満正・32
3203		1 年入学式あと	昭和 9 年 4 日、公主嶺 神社で	吉田俊彦・32
3204		1 年小小学級	昭和 9 年、旧校舎昇降 口で	足立三男・32
3205	50	2 年山木垣本学級	昭和 10 年、旧校舎講 堂で	愛川和子・32
3206		3 年熊岳城温泉聚落	昭和 12 年夏	愛川和子・32 土山琢司・32
3207		4 男山口学級	昭和 13 年 3 月、新校 舎玄関前で	岩森亘・職員 山田昭・32

3208		4 女古谷学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3209		5 男山口学級	昭和 13 年 3 月、銅像台座前で	山田昭・32
3210		5 女古谷学級	昭和 13 年、新校舎校庭花壇で	愛川和子・32
3211		5 年月ヶ浦海浜聚落・東郷寮	昭和 13 年 7 月 3103 と同じ	足立三男・32
3212		5 年月ヶ浦海浜聚落・船	昭和 13 年 7 月 3104 と同じ	山田昭・32
3213		5 年月ヶ浦海浜聚落・砂浜	昭和 13 年 7 月 3105 と同じ	山田昭・32
3214		5 年月ヶ浦海浜聚落・水師営	昭和 13 年 7 月 3109 と同じ	足立三男・32
3215		5 年月ヶ浦海浜聚落・二〇三高地	昭和 13 年 7 月 3110 と同じ	足立三男・32
3216	89	プール完成・飛び込み	昭和 13 年夏	山田昭・32
3217		6 年旅順大連修学旅行・水師営	昭和 14 年	山田昭・32
3218		6 年旅順大連修学旅行・二〇三高地	昭和 14 年	山田昭・32
3219		書道大会	昭和 15 年 1 月	吉田俊彦・32
3220		6 女古谷学級	昭和 15 年 3 月、楠公像前で	愛川和子・32
3221		6 男山口学級	昭和 15 年 3 月	水谷清遵・32
3222		6 女古谷学級	昭和 15 年 3 月	水谷清遵・32
3223		卒業式	昭和 15 年 3 月、新校舎講堂で	水谷清遵・32
3224		卒業式記念帖	昭和 15 年 3 月	山田昭・32 水谷清遵・32
3225		高等科横山学級	昭和 15 年	倉垣敏夫・職員

3226		高等科 2 年 (30 回生) 卒業		水谷清遵・32
3227		卒業記念写真帖から—1		水谷清遵・32
3228		卒業記念写真帖から—2		水谷清遵・32
3229		卒業記念写真帖から—3		水谷清遵・32
3230		卒業記念写真帖から—4		水谷清遵・32
3231		同窓会	昭和 15 年夏	水谷清遵・32
3232		昭和 11 年度学年別健康 優良児表彰 (27～34 回 生、32 回生から 3 年生)		吉田俊彦・32
3233		高 2 卒業式	昭和 17 年 3 月 3432 と 同じ	
3234		2 年小山学級	昭和 10 年、旧校舎講 堂で	土山琢司・32
3235		4 男山口学級—1	昭和 12 年 8 月、正門 前で	土山琢司・32
3236		4 男山口学級—2	昭和 12 年 8 月、新校 舎増築中	土山琢司・32
3237		4 男山口学級—3	昭和 12 年 8 月、教室 で	土山琢司・32
3238		4 男山口学級—4	昭和 12 年 8 月、段階 で	土山琢司・32
3239		4 男山口学級—5	昭和 12 年 8 月、農試 正門前で	土山琢司・32
3240		山口先生と土山琢司	昭和 12 年 8 月	土山琢司・32
3241		運動会・パン喰い戦争	昭和 10 年?	土山琢司・32
3242		運動会・とび箱	昭和 10 年?	土山琢司・32
3243		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
33 回生				
3300		幼稚園年少組卒業式	昭和 9 年 3 月 3202 と 同じ	

3301		幼稚園	諸和 9 年秋、遊戯室で	伊藤聖・33
3302	97	幼稚園卒業式	昭和 10 年 3 月	伊藤聖・33 高柳守道・34
3303		1 年入学式	昭和 10 年 4 月、公主嶺神社で	伊藤聖・33
3304		1 年中村学級	昭和 10 年、旧校舎講堂で	伊藤聖・33
3305		1 年宮野入学級	昭和 10 年、旧校舎講堂で	伊藤聖・33
3306		2 年村上学級	昭和 11 年 3 月 22 日、旧校舎講堂で	田中寿・33 伊藤聖・33
3307		2 年松本学級	昭和 11 年 3 月 22 日、旧校舎講堂で	伊藤聖・33
3308		2 年松本学級	昭和 11 年、白雲寮前のグラウンドで	伊藤聖・33
3309		2 年松本学級	昭和 12 年 2 月、旧校舎講堂で	伊藤聖・33
3310		3 男徳永学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	伊藤聖・33 田中秀典・33 田中寿・33
3311		4 女川名学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3312		4 男徳永学級	昭和 13 年夏、新校舎校庭で	伊藤一昭・33 田中秀典・33 田中寿・33
3313		4 女川名学級	昭和 13 年、新校舎で	青木綾子・33
3314		4 年熊岳城温泉聚落・熊岳河 1	昭和 13 年 7 月	伊藤聖・33
3315		4 年熊岳城温泉聚落・温泉プール	昭和 13 年 7 月	久保治子・33
3316		4 年熊岳城温泉聚落・砂浜	昭和 13 年 7 月	伊藤聖・33

3317		4 年熊岳城温泉聚落・熊岳河 2	昭和 13 年 7 月	久保田治子・33
3318		5 年奉天撫順修学旅行・忠霊塔	昭和 14 年 9 月 30 日	田中秀典・33 三井正子・職員
3319		5 男大西学級	昭和 14 年 11 月、楠公像前で	田中寿・33
3320		5 女川名学級	昭和 14 年 11 月、楠公像前で	青木綾子・33 木村千穂子・33
3321		6 年旅順大連修学旅行・二〇三高地	昭和 15 年	田中秀典・33
3322		6 男大西学級		田中秀典・34
3323		6 女川名学級		田中秀典・35
3324		卒業式	昭和 16 年 3 月	小松延江・33
3325		卒業記念写真帖	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3326		卒業記念写真帖から－1	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3327		卒業記念写真帖から－2	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3328		卒業記念写真帖から－3	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3329		卒業記念写真帖から－4	昭和 16 年 3 月	田中秀典・33
3330		高等科 2 年卒業 (31 回生)	3127 と同じ	田中秀典・33
3331		高 2 卒業式	昭和 18 年 3 月 3543 と同じ	
3332		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と同じ	
34 回生				
3401	97	幼稚園年少組卒園式	昭和 10 年 3 月 3301 と同じ	高柳守道・34
3402		幼稚園卒園式	昭和 11 年 3 月	小畑博昭・34
3403		1 年入学式	昭和 11 年 4 月	小畑博昭・34
3404		2 年戸田学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員

3405		2 年荒井学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3406		3 年宇都学級	昭和 13 年夏、新校舎校庭で	岩森亘・職員
3407		3 男宇都学級	昭和 13 年 7 月、新校舎校庭で	高柳守道・34
3408	77	3 女田中学級	昭和 13 年夏、新校舎校庭で	大野敦子・34
3409		4 男松本学級	昭和 14 年 9 月、楠公像前で	高柳守道・34
3410		4 女加来学級	昭和 14 年 9 月、新校舎玄関右側で	池田多喜子・34
3411		5 女加来学級	昭和 15 年 5 月、ロシア墓地で	池田多喜子・34
3412		5 年奉天撫順修学旅行・忠霊塔	昭和 15 年 5 月	池田多喜子・34 高柳守道・34
3413		5 女運動会	昭和 15 年 9 月	池田多喜子・34
3414		5 男松本学級	昭和 15 年 9 月、楠公像前で	高柳守道・34
3415		5 女加来学級	昭和 15 年 9 月、新校舎玄関右側で	池田多喜子・34
3416		5 女加来学級	昭和 15 年 12 月、スケート	池田多喜子・34
3417		6 年旅順大連修学旅行・二〇三高地	昭和 16 年 5 月	池田多喜子・34 高柳守道・34
3418		6 年旅順大連修学旅行・東鶏冠山	昭和 16 年 5 月	池田多喜子・34
3419		6 女三森学級	昭和 16 年 8 月、新校舎玄関前で	池田多喜子・34
3420		6 男松本学級	昭和 16 年、楠公像前で	高柳守道・34

3421		6 女運動会・薙刀	昭和 16 年 9 月	三井正子・職員 池田多喜子・34
3422		6 男学芸会・劇	昭和 16 年 11 月	高柳守道・34
3423		6 女学芸会・国防の歌	昭和 16 年 11 月	大野敦子・34
3424	158	卒業を前に―1	昭和 17 年 3 月、ロシア 墓地付近で	高柳守道・34
3425		卒業を前に―2	昭和 17 年 3 月、畜産 科事務所前で	大野敦子・34
3426		6 男女学級高等科	昭和 17 年 3 月、卒業 前に	高柳守道・34
3427		6 男松本学級	昭和 17 年 3 月、卒業 前に	高柳守道・34
3428		6 男松本学級	昭和 17 年 3 月、卒業 前に	高柳守道・34
3429		6 女三森学級	昭和 17 年 3 月、卒業 前に	大野敦子・34
3430		6 女三森学級	昭和 17 年 3 月、卒業 前に	大野敦子・34
3431	95	卒業式・卒業証書授与	昭和 17 年 3 月	高柳守道・34
3432		卒業式	昭和 17 年 3 月	高柳守道・34
3433		高 2 卒業式	昭和 19 年 3 月 3626 と同じ	
3434		同窓会	昭和 18 年夏 3544 と 同じ	
35 回生				
3500		幼稚園年少組卒園式	昭和 11 年 3 月 3402 と同じ	小畑博昭・34
3501		幼稚園卒園式	昭和 12 年 3 月	川又惇子・35 吉永操・38
3502		1 年入学式	昭和 12 年 4 月、公主 嶺神社で	山本清寛・35

3503		1 年牧学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	長谷川優・35 岩森亘・職員 吉田俊彦・32
3504		1 年村上学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3505		1 年宮野入学級	昭和 13 年 3 月、新校舎玄関前で	岩森亘・職員
3506		2 年衣川学級	昭和 13 年、新校舎玄関前で	吉田俊彦・32
3507	83	2 年学芸会・いなばの白兔	昭和 13 年 11 月	長谷川優・35
3508		2 年衣川学級	新校舎スケート	長谷川優・35
3509		3 男倉垣学級	昭和 14 年、楠公像前で	長谷川優・35
3510		3 女大和田学級	昭和 14 年、校庭築山で	川又惇子・35 吉田俊彦・32
3511		4 女古谷学級	昭和 15 年学校農園で	川又惇子・35
3512		4 女古谷学級	昭和 15 年スケート	川又惇子・35 吉田俊彦・34
3513		5 男倉垣学級	昭和 16 年、学校農園で	名倉睦生・35 長谷川優・35
3514		5 男奉天撫順修学旅行・忠霊塔	昭和 16 年	長谷川優・35 川又惇子・35
3515		5 年夏休みキャンプ	昭和 16 年校庭で	長谷川優・35
3516		5 年学校農園収穫		長谷川優・35 川又惇子・35
3517		5 男運動会・組立て体操—1	昭和 16 年 9 月	長谷川優・35
3518		5 男運動会・組立て体操—2	昭和 16 年 9 月	長谷川優・35
3519		5 男運動会・相撲体操	昭和 16 年 9 月	長谷川優・35

3520		5 女運動会・薙刀	昭和 16 年 9 月 3421 と同じ	三井正子・職員
3521		5 女古谷学級のお別れ	昭和 16 年 10 月	三井正子・職員
3522		5 年学芸会・羅生門	昭和 16 年 11 月	長谷川優・35
3523		6 男倉垣学級	昭和 17 年、玄関前で	長谷川優・35
3524		6 女篠原学級	昭和 17 年、築山で	川又惇子・35
3525		6 年旅順大連修学旅行	昭和 17 年	山本清寛・35
3526		6 男学芸会・フィリピン 奮戦記	昭和 17 年 11 月	長谷川優・35
3527		6 男倉垣学級・授業		長谷川優・35
3528		6 男女会食・謝恩会		長谷川優・35 川又惇子・35
3529		6 男倉垣学級スケート	昭和 17 年	長谷川優・35 石川利一郎・職員
3530	81	6 女篠原学級スケート	昭和 17 年	川又惇子・35 石川利一郎・職員
3531	93	6 女薙刀寒稽古	昭和 18 年 1 月	三井正子・職員
3532		6 男女寒稽古納会	昭和 18 年 1 月	川又惇子・35 三井正子・職員
3533	92	6 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型上段打	昭和 18 年 1 月	井村好孝・38
3534		6 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型残心	昭和 18 年 1 月	井村好孝・38
3535		6 男剣道寒稽古・最終日 福原三森の剣道型上段	昭和 18 年 1 月	井村好孝・38
3536		6 男剣道寒稽古・最終日 稽古	昭和 18 年 1 月	井村好孝・38
3537		6 男剣道寒稽古・最終日 整列	昭和 18 年 1 月	井村好孝・38
3538		卒業を前に	ロシア墓地付近で	長谷川優・35 川又惇子・35
3539		卒業を前に	畜産科事務所前で	川又惇子・35

3540		卒業を前に	畜産科厩舎前で	長谷川優・35 川又惇子・35
3541		6 女篠原学級・卒業を前に	昭和 18 年 3 月、教室で	川又惇子・35
3542		卒業の日・売店	昭和 18 年 3 月	川又惇子・35
3543		卒業式	昭和 18 年 3 月	山本清寛・35 三井正子・職員
3544		同窓会	昭和 18 年夏	川又惇子・35
3545		高 2 卒業式	昭和 20 年 3 月 3734 と同じ	
36 回生				
3600		幼稚園年少組卒園式	昭和 12 年 3 月 3501 と同じ	
3601		幼稚園卒園式	昭和 13 年 3 月	滝山郁子・36
3602		1 年入学式	昭和 13 年 4 月、公主嶺神社	黒川ますみ・36
3603		1 年秀島学級	昭和 13 年、玄関前校庭で	長濱邦明・36
3604	78	1 年天野学級	昭和 13 年夏、肋木の前で	坂田隆・36
3605		2 年戸田学級	昭和 14 年、楠公像前で	長濱邦明・36
3606		3 男砂川学級	昭和 15 年、玄関前で	長濱邦明・36
3607		3 男砂川学級	昭和 15 年、スケート	小久保博司・36
3608		4 男斎藤学級	昭和 16 年、玄関目前で	長濱邦明・36 斎藤武男・職員
3609		4 女川名学級	昭和 16 年、農園前で	黒川ますみ・36
3610		4 男斎藤学級	昭和 16 年 12 月、スケート大会	長濱邦明・36
3611	84	5 男学芸会・楠正成	昭和 17 年 11 月	長濱邦明・36 井村好孝・38

3612		5 男三森学級	昭和 17 年 11 月 17 日、 楠公像前で	長濱邦明・36 南部夫爾・36
3613		5 女小南学級	昭和 17 年、玄関前で	幸島知代子・36
3614	93	5 女薙刀寒稽古	昭和 18 年 1 月 3531 と同じ	三井正子・職員
3615		5 男女寒稽古納会	昭和 18 年 1 月 3532 と同じ	三井正子・職員 川又惇子・35
3616	92	5 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型上段打	昭和 18 年 3533 と同 じ	井村好孝・38
3617		5 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型残心	昭和 18 年 3534 と同 じ	井村好孝・38
3618		5 男剣道寒稽古・最終日 福原三森の剣道型上段	昭和 18 年 3535 と同 じ	井村好孝・38
3619		5 男剣道寒稽古・最終日 稽古	昭和 18 年 3536 と同 じ	井村好孝・38
3620		5 男剣道寒稽古・最終日	昭和 18 年 3537 と同 じ	井村好孝・38
3621		6 年旅順大連修学旅行	昭和 18 年 5 月	長濱邦明・36 南部夫爾・36
3622		6 年運動会	昭和 18 年	南部夫爾・36
3623		6 男三森学級	昭和 18 年 11 月 13 日、 楠公像前で	長濱邦明・36 南部夫爾・36
3624		6 年学芸会・合唱と楽器 演奏	昭和 18 年 11 月	長濱邦明・36
3625		6 女片岡学級・学芸会・ 楠正成	昭和 18 年 11 月	宮田逸夫・38
3626		卒業式	昭和 19 年 3 月	長濱邦明・36
37 回生				
3700		幼稚園年少組卒園式	昭和 13 年 3 月 3601 と同じ	
3701		幼稚園	昭和 13 年 9 月 7 日、 新校舎玄関前で	北畠崇光・37 土屋洸子・37

3702		幼稚園卒園式	昭和 14 年 3 月	長濱自明・37 小畑利子・37
3703		1 年入学式	昭和 14 年 4 月、公主 嶺神社で	岩森亘・職員
3704		1 年岩森学級	昭和 14 年 4 月、入学 式の後で	長濱自明・37
3705	79	1 年三森学級	昭和 14 年、楠公像前 で	岩森亘・職員
3706		1 年学芸会・舌切り雀	昭和 14 年 11 月	岩森亘・職員
3707		2 年岩森学級	昭和 15 年 4 月、楠公 像前で	岩森亘・職員 北畠崇光・37
3708		2 年宮永学級	昭和 15 年 9 月、楠公 像前で	緒方靖・37 長濱自明・37 佐藤智子・37
3709		2 年岩森学級	昭和 15 年、玄関前で	土屋洸子・37
3710		2 年学芸会・お寺の小僧 さん	昭和 15 年 11 月	三井正子・職員
3711		3 男大西学級	昭和 16 年、楠公像前 で	長濱自明・37
3712		3 女石川学級	昭和 16 年夏	山口准子・37
3713		3 年ドッジボール大会	昭和 16 年 9 月	三井正子・職員
3714		3 女石川学級・学芸会・ 南の風	昭和 16 年 11 月	石川利一郎・職員
3715		4 男福原学級	昭和 17 年、玄関前校 庭で	長濱自明・37
3716		4 女石川学級	昭和 17 年、玄関前築 山で	山口准子・37 石川利一郎・職員
3717	87	4 女運動会・薙刀	昭和 17 年 9 月	三井正子・職員
3718		4 男学芸会・桜井の別れ	昭和 17 年 11 月	長濱自明・37
3719	93	4 女薙刀寒稽古	昭和 18 年 1 月 3531 と同じ	三井正子・職員

3720		4 男女寒稽古納会	昭和 18 年 1 月 3532 と同じ	三井正子・職員 川又惇子・37
3721	92	4 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型上段打	昭和 18 年 1 月 3533 と同じ	井村好孝・38
3722		4 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型残心	昭和 18 年 1 月 3534 と同じ	井村好孝・38
3723		4 男剣道寒稽古・最終日 福原三森の剣道型上段	昭和 18 年 1 月 3535 と同じ	井村好孝・38
3724		4 男剣道寒稽古・最終日 稽古	昭和 18 年 1 月 3536 と同じ	井村好孝・38
3725		4 男剣道寒稽古・最終日 整列	昭和 18 年 1 月 3537 と同じ	井村好孝・38
3726		5 奉天撫順修学旅行	昭和 18 年	山口准子・37
3727		5 女石川学級	昭和 18 年 8 月、講堂 でキャンプ	山口准子・37 石川利一郎・職員
3728		5 男倉垣学級	昭和 18 年 8 月、玄関 前で	長濱自明・37
3729		5 女石川学級	昭和 18 年 8 月、楠公 像前で	山口准子・37
3730		5 年学芸会・合唱と楽器 演奏	昭和 18 年 11 月、3624 と同じ	南部夫爾・36
3731		卒業を前に	昭和 20 年 3 月、ロシ ア墓地で	土屋洸子・37
3732		卒業を前に	昭和 20 年 3 月、ロシ ア墓地付近で	宮島雅一・37
3733		卒業を前に・6 男女倉垣 学級	昭和 20 年 3 月、教室 で	宮島雅一 平井道子・37
3734	96	卒業式	昭和 20 年 3 月	宮島雅一・37
38 回生				
3800		幼稚園年少組卒園式	昭和 4 年 3 月、3702 と 同じ	

3801		幼稚園卒園式	昭和 5 年 3 月	園田智代・38 吉永操・38
3802		1 年入学式	昭和 5 年 4 月、公主嶺 神社で	園田智代・38 山田典子・38
3803		1 年戸田学級	昭和 5 年、玄関前で	井村好孝・38 山田典子・38
3804	記	1 年書き初め	昭和 6 年 1 月、講堂で	有川彬・38
3805		3 男松本家営学級	昭和 17 年、花壇前で	井村好孝・38
3806		3 年学芸会・かちかち山	昭和 7 年 11 月	三井正子・職員
3807	93	3 女薙刀寒稽古	昭和 8 年 4 月 3531 と 同じ	三井正子・職員
3808		3 男女薙刀寒稽古	昭和 18 年 4 月 3532 と 同じ	川又惇子・35 三井正子・職員
3809	92	3 男剣道寒稽古・松本三 森の剣道型上段打	昭和 18 年 1 月 3533 と同じ	井村好孝・38
3810		3 男剣道寒稽古・松本三 木の剣道型残心	昭和 18 年 1 月 3534 と同じ	井村好孝・38
3811		3 男剣道寒稽古・最終日 福原三森の剣道型上段	昭和 18 年 1 月 3535 と同じ	井村好孝・38
3812		3 男剣道寒稽古・最終日 稽古	昭和 18 年 1 月 3536 と 同じ	井村好孝・38
3813		3 男剣道寒稽古・最終日 整列	昭和 18 年 1 月 3537 と 同じ	井村好孝・38
3814		4 男山本規一学級	昭和 18 年 11 月、玄関 前で	井村好孝・38
3815		5 男片岡学級	昭和 19 年、砂場相撲 をとったあと	井村好孝・38
3816		5 男兄弟	昭和 19 年	宮田逸夫・38
3817	82	5 女志村学級	昭和 19 年、楠公像前 で	遠藤教子・38
3818		5 男運動会・騎馬戦	昭和 19 年秋	井村好孝・38
3819		5 男運動会・倒立	昭和 19 年秋	井村好孝・38

3820	88	5 男運動会・相撲体操	昭和 19 年秋	井村好孝・38
39 回生				
3900		幼稚園年少組卒園式	昭和 15 年 3 月、3801 と同じ	
3901 —1		幼稚園	昭和 15 年、背景なし	西瀬薫子・39
3901 —2		幼稚園	昭和 15 年、背景あり	西村佳子・39
3902		幼稚園卒園式	昭和 16 年 3 月	西村佳子・39
3903		1 年入学式	昭和 16 年 4 月、公主 嶺神社で	三井正子・職員
3904		1 年前田・宮永学級	昭和 16 年 9 月、玄関 前で	興津佳子・39 三井正子・職員
3905	86	1 年阿部学級	昭和 16 年 9 月、玄関 前で	西瀬薫子・39
3906		1 年運動会・遊戯	昭和 16 年 9 月	三井正子・職員
3907	80	2 年宮永学級	昭和 17 年 10 月、場所 不明	興津佳子・39 杉山洋子・39 三井正子・職員
3908		2 年村山学級	昭和 17 年 10 月、玄関 前で	三井正子・職員
3909		2 年学芸会・かちかち山	昭和 17 年 11 月 3806 と同じ	三井正子・職員
3910		3 女山田学級	昭和 18 年、玄関で	興津佳子・39 杉山洋子・39
3911		3 女吉田学級	昭和 19 年 3 月、楠公 像前で	興津佳子・39 吉田遠・職員
3912		4 男？学級	昭和 19 年、楠公像前 で	井木稔・39
3913		4 女小林（川？）学級	昭和 19 年 7 月、楠公 像前で	栗山礼子・39
3914		山路郷開拓団へ遠足	昭和 16 年 5 月、6 月	三井正子・職員

3915		3 女吉田学級	昭和 18 年、玄関で	三井正子・職員
3916		4 女小川学級	昭和 19 年秋	中出美也子・39
3917		4 女運動会・めんこい子馬		中出美也子・39
40 回生				
4000	40	幼稚園年少組卒園式	昭和 19 年秋	
4001	98	幼稚園	昭和 16 年 3 月 3902 と同じ	木村晃子・40 笹川富美子・40
4002		幼稚園卒園式	昭和 16 年、旧小学校グラウンドで	笹川富美子・40 平瀬貞子・40
4003		1 年入学式	昭和 17 年 3 月	山崎俊郎・40
4004		1 年田辺学級	昭和 17 年 4 月、公主嶺神社で	木村晃子・40
4005		1 年山田学級	昭和 17 年、玄関前で	笹川富美子・40
4006		年星場学級	昭和 17 年、玄関前で	木村晃子・40 宮島雅一・37
4007	85	2 年市田学級	昭和 18 年、玄関前で	笹川富美子・40
4008		2 年学芸会・浦島太郎	昭和 18 年、楠公像前で	浅野兼迪・40
4009		3 年講堂で	昭和 18 年 11 月	笹川富美子・40
4010		3 女市田学級		木村晃子・40 間宮ヒナ・職員
4011	40	3 男三森学級	昭和 19 年、楠公像前で	宮田信男・40
41 回生				
4101	98	幼稚園	昭和 19 年、楠公像前で	木村晃子・40
4102		幼稚園年少組卒園式	昭和 16 年夏、旧小学校グラウンドで 4001 と同じ	荒川明夫・40
4103		幼稚園教室で	昭和 17 年 3 月 4002 と同じ	井上萬里・41 高取邦明・41

4104		1 年入学式	昭和 17 年 4 月、公主嶺神社で	三井正子・職員 島津一満・41
4105		1 年加賀谷学級	昭和 18 年、宮永学級の後	佐藤武・41
43 回生				
4301		幼稚園卒園式	昭和 20 年 3 月	岡本ウタ子・43 吉永妙・43
44 回生				
4401		幼稚園年少組卒園式	昭和 20 年 3 月 4301 と同じ	
その他				
0101		雪の公主嶺神社		松本満正・32
0102		伊藤節子先生	昭和 14 年ごろ	三井正子・職員
0103		斎藤武男先生	昭和 18 年秋	石川利一郎・職員
0104		倉垣利男先生	昭和 18 年秋	南部夫爾・36
0105		36、37 回生遠足	昭和 4 年 9 月	三井正子・職員
0106		楠公祭	昭和 15 年	三井正子・職員
0107		学校農園	昭和 15 年	岩森亘・職員
0108		山路郷開拓団の校舎と先発の生徒	昭和 15、6 年	三井正子・職員
0109		山路郷開拓団で峯、叶多、宮永先生	昭和 17 年 8 月下旬	三井正子・職員
0110		山路郷開拓団の方と	昭和 17 年秋	石川利一郎・職員
0111		山路郷開拓団で	昭和 17 年 8 月	三井正子・職員
0112		山路郷開拓団の帰り道	昭和 17 年 8 月	三井正子・職員
0113		珠算競技大会	昭和 17 年秋	石川利一郎・職員
0114		運動会		
0115	記	昭和 12 年 9 月		清水澄・23
0116	70	新校舎		川又惇子・35 黒木広嗣・職員
0117		青年学校卒業式	昭和 14 年？	長谷川優・35

0118		四平中学校入学式	昭和 18 年 4 月	長谷川優・35
0119		青年学校第 1 回卒業生	昭和 12 年 3 月	今井律雄・28
0120		風車—1 秋		今井律雄・28
0121		風車—2 冬		今井律雄・28
0122		牛舎		今井律雄・28
0123		風車		今井律雄・28
0124		牧場の馬		今井律雄・28
0125		青年学校・旗の授与		今井律雄・28
0126		青年学校・屋外訓練		今井律雄・28
0127		泰平橋と木		今井律雄・28
青年学校				
0201		青年学校第 1 回卒業生	昭和 12 年 3 月 0119 と 同じ	
0202		青年学校卒業式	昭和 14 年 3 月 0177 と 同じ	
0203		青年学校・屋外訓練 0126 と同じ		
0204		青年学校・旗の授与 0125 と同じ		
0205		昭和 16 年度第 6 回卒業 記念		田口実・青年学校
0206		友人—1 埋橋邦行・田口 実の 2 人		田口実・青年学校
0207		友人—2 田口実		田口実・青年学校
0208		友人—3 田口実・埋橋邦 行・原光祥の 3 人		田口実・青年学校
0209		友人—4 田口実・西宗 次・二階堂・伊藤の 4 人		田口実・青年学校
0210		壮行会	昭和 17 年 10 月 11 日、 花園で	田口実・青年学校
0211		研究科卒業式	昭和 17 年 3 月	田口実・青年学校
0212		埋橋邦行葬儀	昭和 20 年 8 月 12 日	田口実・青年学校

20 世紀大連会議会報『The Great Connection』

記事目録

佐藤 仁史、大野 絢也

解題

本稿は 20 世紀大連会議の会報である『The Great Connection』の記事目録である。当該団体は、1999 年 12 月 15 日に別府市において発起人代表である甲斐正人氏が主催した第 1 回協議会において成立した。具体的な活動内容は、「(一) 古い資料を発掘して、ひろく紹介したり、個人の宝物を共有できるよう努める。(二) 歴史的な事実について評議する機会を提供するために、機関誌を発行する。(三) 必要に応じてフォーラムを開き、親睦を兼ねた研究討議を試みる。(四) 現地に赴いて、大連の変貌を知り、歴史の動向に即して懐古の情を深めること」を通して、「大連認識を深めて、豊かな懐旧の楽しみを身につけ」ることとされている（甲斐正人「20 世紀大連会議について」『大

連会会報』第 49 号、2001 年）。こうした会の性質を甲斐氏は「ミニ大連会」と概括している。

立ち上げ当初の執行部として 6 名の人物が列挙されており、出身中学の別で見ると、大連中学 2 名、大連一中、二中、三中、実業学校からそれぞれ 1 名であった。出身学校から見ると各学校のバランスがとれているかのようなのであるが、実際は大連中学同窓生が中核となっていたという証言もある（「秦源治氏口述記録」2017 年 12 月 29 日採訪、未定稿）。現住地域別にみると、4 名が九州地方（大分市 3 名、福岡市 1 名）、中国地方 1 名（下関市）、近畿地方 1 名（奈良市）という内訳になっており、運営の中核を担う人物は大分周辺に集中していた。これを会

員の側からみてみよう。会員は最大時には三百人を越えていたようであるが（『The Great Connection』18号「あとかき」）、そのうち『The Great Connection』第11号に掲載された寄付者と振り込み者の一覧からは具体的な会員の状況がわかる。ここに掲載された227名のうち4割あまりが九州在住の会員であった。ここからも20世紀大連会議が九州を中心とする「ミニ大連会」であったことが見て取れる。

20 世紀大連会議の主要な活動内容は、大連をはじめとする満洲の歴史についての文章を掲載した機関誌や関連刊行物を発行することであった。20 世紀大連会議は会員数の減少などに伴って 2010 年に解散し、20 世紀大連資料室という名義によって関連資料の刊行を継続した。しか

し、強い自己主張によって会の性質を決定し、編集活動を牽引してきた甲斐正人氏が 2017 年 8 月に逝去したことによって、完全に幕を閉じることとなった。

『The Great Connection』には大連を中心とした関東州からの引揚者 2 世が自らの体験を語った回想や、自らの体験を土台とした視点から収集した「歴史的事実」が掲載されている。引揚者 2 世の目線からによる徹底した史料収集の傾向は特に関連刊行物に顕著に示されている（付録参照）。なお、これらの史料は『続 大連市史』（大連市史編集委員会編、2009 年）にも参照されており、引揚者 2 世の記憶が集会的記憶ともいえる当該書にどのような影響を与えたのかも興味深い。

謝辞

『The Great Connection』全号及び 20 世紀大連会議・20 世紀大連資料室による刊行物のほとんどについては故甲斐正人氏及び秦源治氏より恵与された。両氏には 2013 年 12 月 5 日に大連神社内にある大連神社記念資料館の調査に赴いた

際、水野直房赤間神宮名誉宮司より紹介いただき、2013 年の 12 月 8 日に故甲斐正人氏宅を、2014 年の 1 月 12 日には秦源治氏宅を訪問して様々なご教示を賜った。関係各位にはこの場を借りて改めて謝意を申し上げたい。

『The Great Connection』 記事目録

凡例

- ・目次と本文とで文章のタイトルが一致しない場合、本文を採録した。
- ・目次から落ちている文章についても収録してある。
- ・筆者名には居住地と満洲での出身校に関する情報が示されている場合がある。フォーマットは一定していないが、順番は原文に拠った。
- ・号によっては順番を示す数字が当てられているものもあるが、中身と一致しない場合もあるため、一律削除した。また、号によっては目次にページ数が掲載されているが、こちらも一律削除した。

目録

1号（2000年4月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
巻頭言	
回想大連年表（明治三十七年～昭和二十年）	北九州市 青柳龍平（一中）
大連市に於ける小学校成立の過程	大分市 甲斐正人（南山麓・下藤・甘井子一大中）
大連は人工都市——だから美しい（一）	大分市 甲斐正人、大分市奥田敏（内地一実業）
大連最古の地図？	大分市 甲斐正人
「大連」は現地人にとっていい所だったのではないか	大分市 竹内弘（伏見台一二中）

満鉄本社と平成の石油王	
二十世紀大連会議について	福岡市 一万田連（南山麓一三中）
【会員からの便り】特急「あじあ」号の機関車	東京 塚田斉（沙河口工場勤務）
【会員からの便り】甘井子を想う	甲斐正人
【会員からの便り】下藤行進曲	池田市 南玲子（下藤一芙蓉）
【会員からの便り】大連朝日小学校区と思い出	名古屋市 須田譲司（朝日小一大中）
【会員からの便り】光明台小学校校区の面影	尼崎市 池下進（光明台小一大中）
【会員からの便り】交流いつまでも	大分県日出町 井上玉芳（孝子）（光明台小一羽衣）
【会員からの便り】祖父と大陸	武蔵野市 成宮功子（大正小一天津松島）
終わりのことば	甲斐正人

2号（2000年8月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
巻頭言	
大連は計画都市、だから美しい②	
大連の教育史（2）	
関東州教育の特殊点（展）（10）	
大連の町名考	辻武治・福岡市（南山麓小一2中 福岡市）
平和の礎 ふる里満州から祖国日本へ	杉目昇（朝日小一1中 大分県）
つれづれなるままに	
寄付者及び資料提供者ご芳名	
あとがき	

3号（2001年3月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
まえがき	
大連埠頭	
大連のスポーツ	
大連の電車	
還ってきた大連神社	
歌集「満洲野は遠し」より	
大連一中・二中の輝かしい歴史	
随想 旅順二題	高橋寿満（満教専付小一旅中）
首藤定、激動の足跡	
大広場小学校要覧から（大正12年）	
侵略者の顔を見せた日本（21ヶ条条約）	
旅大道路	
あとがき	

4号（2002年10月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
まえがき	
なつかしの大連 昭和九年「満洲の展望」より抜粋	野崎均一郎
おみごと会報紹介	
アカシヤ Walk in 大連開催 西部日刊スポーツの快挙	
若き日の西内校長	
あの道路は？	
元気印 大連っ子、旅順っ子	池下耕市さん
元気印 大連っ子、旅順っ子	漆原孝子さん
懸賞	
大連商業・大連女子商業の設立者は？	
豹は死して	

あとがき	
------	--

5号（2003年5月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
まえがき	
西田貴志の大連の近代建築	西田貴志
井上ひさしの「夢の町大連」を見て	
日・中・鮮共生の奥町界限	甲斐孝（大広場小）
日満航路の末路	秦源治（常磐小一2 中一工専）
大連と父 星直利のこと	星博文（常磐一大中 大連会理事）
父（星野文雄）の名が響くところで	
Topic「偽満（うえまん）」について	
金寿奉氏からの大連近況報告	伊勢崎実郎
南山麓でおぼえた「手まり唄」考	
日本の大連進出は侵略か、開発か（社会「ダーウィニズム」の潮流に関して）	
豹は死して コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭 首藤定ノンフィクション立志伝	
【委員会室から】委員あいさつ ミニ大連会も同窓会も皆一つ	伊勢崎実郎
【委員会室から】委員あいさつ 新参者です、よろしく	甲斐孝
【委員会室から】委員あいさつ	奥田敏
資料提供者ご芳名・寄付者ご芳名・振込者ご芳名	
あとがき	

6号（2003年10月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）

まえがき	
西田貴志の大連の近代建築	西田貴志
初代大連市長石本鑽太郎氏の横顔	
侵略か開発か (2) 第2代福島都督の業績に関して	
愛川村の農業移民	
愛川に死す父、井上勇三のこと	井上佐一
「B29による大連空襲記録」の要約について	島田浩 (大連一中27回生)
広島四土会賛歌	
おみごと会報—あかしあ— (大連中学8回生会誌)	
甘井戸考 (その移り変わり)	
豹は死して コレクションを守り、窮民を救った元 大連商工会議所会頭 首藤定立志伝	
委員会室から	
会員からのたより	
寄付者・資料提供者ご芳名・振込者ご芳名	
あとがき	

7号 (2004年1月発行)	
記事名	筆者 (所属・在住地など)
まえがき	
西田貴志の大連の近代建築	西田貴志
2003年の大連市街改造計画	
侵略か開発か 相生由太郎氏の業績に関して	
苦力といわれた人々	
おみごと文集 南山麓小同窓会閉幕記念文集	西田栄 (2中)
満洲の遺産 (倉本和子著) 読後雑感	大島高男 (朝日小・南山麓小 —大中)
豹は死して (3) コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭 首藤定立志伝	
支那語教科書について (南満洲教育会教科書編集部)	

会員だより	
委員会室から（資料提供者御芳名・寄付者御芳名・ 振込者ご芳名）	
あとがき	

8号（2004年7月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
まえがき	
私たちは「大連の語り部」	安部淳子（朝日小―弥生高女）
社会科夏休みの課題レポート「祖母の戦争体験を聞いて」	林薫里
満鉄の遺産「大連病院」より	（島田浩 朝日小―一中）
「父の思い出」「恩師の横顔」 国東正路先生のこと（静浦小）	
ありし日の父の思い出	国東易径（大分市）
国東先生の思い出	渋谷正充
関東州静浦小学校在職中の思い出	國東正路
（明・38・39年分）大連を偲ぶ牧原年表から＜原文のまま＞	故牧原次郎
侵略か開発か 対華21ヶ条要求について	
豹は死して（4）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭 首藤定立志伝	
嗚呼「老虎灘」井上佐一（金州―一中）	
グレートコネクション第7号を読んで	野崎豊（唐津市 朝日―商業）
一意専心輝く功績 広島市山本光生に旭日章	山本光生（大広場―商業）
この1本のVIDEOで大連を語り継ごう	
南満ガラス工場の思い出	藤崎充路（伏見台―工業）
会員だより	
委員会室から（資料提供者御芳名・寄付者御芳名・	

振込者御芳名)	
あとがき	
付録 秦写真集より ～東から西へ	秦源治

9号(2004年12月発行)	
記事名	筆者(所属・在住地など)
まえがき	
秦源治氏アルバムより	秦源治
私達の大連は生きている	
故辻武治氏を悼む	甲斐正人
侵略か開発か <21ヶ条要求について> (2)	
大連を偲ぶ「牧原年表」から(明治40・41年分 原文のまま転写)	故牧原次郎
草創期の浪速町を語る(大連市史より)	
ビデオ「大連と日本人」を作って	
海を渡ったビデオ	Kazuko Kuramoto 氏の感想
豹は死して(5) コレクションを守り、窮民を救った 元大連商工会議所会頭(首藤定氏立志伝取材メモ より)	
国際観光都市 大連の観光「S13年ホテル事情につ いて」(国際観光出版)	青柳龍平氏提供
おちこちTopics	
語り継ぐ(呉市、吉田さんの場合)	
会員だより	
委員会室から(役員会報告・資料提供者御芳名・寄 付者御芳名・振込者御芳名)	
あとがき	

10号(2005年5月発行)	
記事名	筆者(所属・在住地など)
まえがき	

グラビア	青柳龍平
ごあいさつ	杉目昇（顧問、ハルビン学院 同窓会長、朝日小―1 中）
ごあいさつ	高木宏（顧問、大連会顧問、 嶺前小―1 中）
環境大連のいしずえを築いた新開貢の功績（1）	
関東州治政 100 年記念について	
大連を偲ぶ「牧原年表」から（明治 40・41 年分 原文のまま転写）	故牧原次郎
侵略か開発かく後藤新平の文装的武備論＞	
ある記者が見た満鉄裏面史	本田健（熊本市 南山麗一大 中）
実満戦のあけぼの 実満野球戦史 S5 大陸出版社 「大連」から	
大連の近況～嶺前地区の改造～（金寿奉氏からの便 り）	
世紀の遺産 大連近郊の航路標識	西岡幸彦（広島市 光明台小 ―2 中）
老・中国留学の記 日中友好を広めた山根良男さん	
戦後に見せた大連っ子の根性	首藤久（横浜市 春日小―2 中）
豹は死して（6）コレクションを守り、窮民を救っ た元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモ より）	
大連初再訪の記 自著「... 原風景」から	石川浩次（光明台小―2 中）
おちこち Topics	
会員だより	
委員会室から（20 世紀大連会議役員一覧・資料提供 者御芳名・寄付者御芳名・振込者御芳名）	
あとがき	

11号（2005年11月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
“豹は死して”参考地図	
まえがき	
関東州始政100周年を考える	
環境大連のいしずえを築いた新開貢の功績とその横顔（その2）	
関東州始政100周年に係わった関東州庁総務部長：星子敏雄のこと	本田健（熊本市 南山麓一大中）
大連市歌の作詞者高野運太郎先生の横顔	本田健（熊本市 南山麓一大中）
関東州教育の独自性確立に貢献した石森延男	
大連を偲ぶ「牧原年表」から（明治43・44・45年分 原文のまま転写）	故牧原次郎
大商同窓会で歌われていた「望郷大連行進曲」（道頓堀行進曲の替歌）	岩崎卓治（北九州市・大商）
豹は死して（7）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
今昔物語「私の大連原風景」の一ページ	石川浩次（光明台小一2中）
おちこちTopics	
会員だより	
委員会室から（Quo Vadis!、平成17年度役員会、寄付者御芳名、振込者御芳名一覧）	
あとがき	

12号（2006年5月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
大連市内バス案内図（昭和10年）	
まえがき	

始政 100 周年記念事業	
進取・不屈——ルツボ技術一本で大陸を駆けまわった山本永規	成宮功子氏提供（武蔵野市）
歴史認識について	
関東軍の一生について——大正 8 年に独立——	本田健（熊本市 南山麓一中）
金寿奉氏からの大連近況（大連港区企画）	副代表 伊勢崎實郎提供（日出一中）
大連市の人口、今昔	島田浩（東京都 朝日一中、終戦時 3 年）
鏡ヶ池の思い出	佐藤豊彦（大分市在住、大連中央電報局）
俣野先生を思い出して	渡部嘉隆（広島市在住、満鉄）
校歌 2 題	
豹は死して（8）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
大連年表《復刻版》——大正 2、3 年——	故牧原次郎
大連神社を創建した松山理三師	
海外神社について	水野昭長（霞一中）
委員会室から（寄付者御芳名、振込者御芳名一覧）	
あとがき	

13 号（2006 年 11 月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
大連市郊外バス路線	
まえがき	
語り継ぐ	
大連港の思い出	藤島宜典（豊後大野市 向陽——1 中）

「アカシヤの大連」と「大連音頭」	本田健（熊本市 南山麓一大中）
齋藤茂吉と大連	首藤学郎（川西市 工専）
牧原年表	故牧原次郎（広島 2 中）
豹は死して（9）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
「あじあ」と「ダブサ」	
衛生研究所	井上佐一（大分日出町 金州一大中）
夏目漱石・紀行文・満韓ところどころの股野義郎先生と我輩は猫の多多羅三平と俣野先生	渡辺嘉隆（広島 満鉄）
お勧めしたい本『国家の品格』	大島高男（神戸市 南山麓一大中）
母校が残っていた！	
アカシア便り	
ハリエンジュとエンジュ	中村陽一（神奈川県大磯町 光明台一1 中）
「廣野忘じ難く」発刊	顧問杉目昇（別府市 朝日一1 中）著作集
共通校歌といわれた「波穏やか」	
金寿奉氏からの便り	金寿奉（大連市 聖徳一2 中）
大連神社の創立者松山理三師を讃える	水野昭長（霞一大中）
委員会室から（寄付者御芳名、平成 18 年度会員名簿）	
あとがき	

14 号（2007 年 6 月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
満洲ガラス（大連窯業）のガラス美術品	
まえがき	

「記念事業を終えたあとに…」	
図書寄贈にあたって	遠藤峰史（沙河口一大中、岐阜）
大連神社式年大祭について	
大連の中学校における共通校歌	
満洲唱歌「土にぬかずけ」の作詞、作曲者をご存知ありませんか？	島田浩（朝日一中、3年時終戦）
斉藤茂吉と大連	首藤学郎（川西市 工専）
豹は死して（10）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
牧原年表	故牧原次郎（広島一中）
大連近況	金寿奉（大連在住）
「スポーツ満洲」に輝く——大連一中の堅陣ベルリンへ……栄冠目指す同行出身者の群	
「満韓ところどころ」について	
＜カルテットの門出＞	
「遙かなる常盤」に寄せて	
委員会室から（寄付者御芳名、平成18年度会員名簿（平成19年4月30日現在））	
あとがき	

15号（2007年11月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
はじめに	
大連発展の光と影（反省をこめて）	
平成19年度総会報告	
牧原年表	故牧原次郎（広島一二中）
満洲引揚げの実態について——「引揚げ60周年記念の集い」加藤聖文氏基調講演から	佐藤治（常盤・嶺前・大石橋）
豹は死して（11）コレクションを守り、窮民を救つ	甲斐正人（甘井子一大中）

た元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
大連旅順の旅	宮脇一雄（沙河口一大中）
大連で開かれた同窓会に参加して	中村陽一（神奈川県大磯町光明台一中）
大連だより	金寿奉（大連在住）
大連神社創建 100 周年記念大祭盛大に開催	
望郷カレンダー（平成 20 年）を作製	菊川有臣（嶺前一三中）
最新 大連番地入り案内	
委員会室から（寄付者御芳名、平成 19 年度会員名簿（平成 19 年 10 月 31 日現在））	
あいさつに代えて	顧問 伊勢崎實郎（日出一大中）
あとがき	

16 号（2008 年 7 月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
日満航路 最後の豪華船―報告丸―	
まえがき	
平成 20 年度 20 世紀大連会議役員会資料	
あれから 60 年	佐藤治（常盤―嶺前―大石橋）
38 度線を越えて	杉佳子（常盤―在新京）
大連追想	相原純子（嶺前―神明―日僑女子第一中）
10 年後に引揚げるまでの日々	井上照代（嶺前―日僑学校―北京大―西安大）
大連近況（2007 年 8 月）	金寿奉（大連市）
ステッセル将軍から贈られた名馬『寿号』	谷口正子（朝日・常盤・聖徳―弥生、鳥取市）
牧原年表	故牧原次郎（二中、広島）

中村欣博著「大連に夢を託した男」“瓜谷長造伝”より	
豹は死して（11）コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
斉藤茂吉を案内した八木沼氏の「随伴漫筆」	提供 武井伸子（周南市）
思い出の大連 我等の集い「広島四土会」	西岡幸彦（光明台一中）
大連一中同窓会閉幕に当たって	中村陽一（光明台一中）
委員会室から（寄付者御芳名、平成 20 年度会員名簿（平成 20 年 6 月 30 日現在））	
あとがき	

17 号（2008 年 11 月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
赤い夕陽の中をひたすら歩く	
まえがき	
63 年という年月	
牧原年表	故牧原次郎（二中—広島）
見事な建築物——元関東州庁舎	島田進（朝日——中）
大連近況（1）（2008 年 7 月）	金寿奉（大連市）
下藤の馨	故樗下勝實（元下藤小学校）
基幹資料ご購入依頼について	
豹は死して（12）元大連商工会議所会頭（首藤定氏立志伝取材メモより）	
中央試験場正面のレリーフ	後藤恵子（上越市、下藤—K）
「大連」旅路の果て	沼田耕作（蘇家屯・図們・大石橋・瓦房店—大連）
大連・新京引揚げ回想	太田寛（嶺前・新京八島・朝日——中）
終戦前夜	川上一郎（旅順師範付属—旅

	順中・大連一中金州分室)
五十年前、大連は	故辻武治 (南山麓—二中)
平和祈念展示資料館について	佐藤治 (常盤・嶺前・大石橋)
四季おりおり——小学生時代の追憶——	榎本武 (聖徳小→大中)
委員会室から (寄付者御芳名、平成 20 年度会員名簿 (平成 20 年 6 月 30 日現在))	
20 世紀大連会議が発行した資料	

18 号 (2009 年 6 月発行)	
記事名	筆者 (所属・在住地など)
大連星ヶ浦 (たそがれ濱と霞半島)	
まえがき	
感謝状受賞報告と感謝状	
大連戦後秘話：密航船	島田浩 (朝日—一中)
牧原年表 (11)	故牧原次郎 (二中—広島)
関東州行政機関の変遷 (年表)	秦源治 (常盤—二中)
日清戦争時の大連 日本人初の大連入り	青柳龍平 (嶺前—一中)
大連近況 (2) (2008 年 12 月)	金寿奉 (大連市)
中ソ合弁満洲電業中央電気試験所勤務の頃	大野満 (鎌倉市、旅工大)
大連が紡いだ一本の糸	高橋倭文子 (常盤—羽衣)
満洲流転——人生万事塞翁が馬	古賀正憲 (嶺前—奉天平安—長崎—ハルビン桃山—撫順)
少年の頃に見た映画の思い出	藤島宜典 (向陽—一中) (K)
大連弥生高等女学校の教育と同窓会弥生会の歩み	弥生会会長 大石美恵子 (嶺前—弥生)
この土地この人「満洲の伝説」の発刊とカルテットプラス・物語りシリーズ発行	日野山隆一 (嶺前—山中) (K)
豹は死して (13) 元大連商工会議所会頭 (首藤定氏立志伝取材メモより) (K)	
藤の木会「交流通信」(2)	後藤恵子 (上越市、下

	藤) (K)
下藤の馨 (2)	元下藤小学校教師 故樗木勝實 (K)
異国の入	山崎裕子 (東京一大広場)
ソ連抑留犠牲者の慰霊碑	中村陽一 (光明台一中)
無題	納谷アイ (旅第二一弥生)
あかしあに花がついた	甲斐正人 (甘井子一大中)
委員会室から (寄付者ご芳名・会員名簿)	
あとがき	
20 世紀大連会議が発行した資料	

19 号 (2009 年 10 月発行)	
記事名	筆者 (所属・在住地など)
まえがき	
断章——大連会議に日・中・韓の国旗を立てよう	川野大太郎 (聖徳小 7—大中 3)
昭和 20 年 9 月 12 日の大連港	島田浩 (朝日小——一中 (終戦時 3 年))
満洲・大連と私の人生	尾島穰 (嶺前一奉天春日一常盤一三中)
羽田澄子監督演出「嗚呼 満蒙開拓団」を観て	佐藤治 (奉天春日一常盤一嶺前一大石橋)
大連近況 (3) (2009 年 7 月)	金寿奉 (大連市)
豹は死して (14) コレクションを守り、窮民を救った元大連商工会議所会頭 (首藤定氏立志伝取材メモより)	甲斐正人 (甘井子一大中)
<ニコニコ児童劇団>の活動～雑記 藤の木会「交流通信」から (3)	後藤久子 (下藤一神明一旅順女師)・後藤恵子 (下藤)
祖父の大連—柳樹屯—	中村陽一
(続) 少年時代にみた映画の思い出	藤島宜典 (向陽——一中)
紅椿	田中節子 (常盤一弥生)

戦時下と終戦後の大広場小学校	故甲斐清作（大広場小 終戦時校長）
ボクの六年間―大震災から御大典まで―（大広場小同窓会誌1号より）	故河村幸一（大広場―二中）
大連秘聞集1（大谷光瑞師の逸話）（牧原次郎著『朋友大連』より）	故牧原次郎（元弥生高女教諭）
委員会室から（寄付者ご芳名・21年度会費納入者名）	
あとがき	
20世紀大連会議が発行した資料	

20号（2010年4月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
産業文化財の宝庫 大連埠頭 早過ぎたドーム式玄関の撤去が寂しい	
まえがき	
巻頭言	20世紀大連会議最高顧問 高木広
「続大連市史」の発刊を祝う	編集部
南山麓のある豪邸の物語	島田浩（朝日小―一中3年在学時終戦）
豹は死して（15）	甲斐正人（甘井子―大中）
大連近況（4）（2009年12月）	金寿奉（大連市）
大連秘聞集2（牧原次郎著『朋友大連』より）	故牧原次郎（元弥生高女教諭）
祖父の従軍記	中村陽一（光明台小―一中）
歴史的文化財指定の意味について	甲斐正人（甘井子―大中）
巡洋艦青葉について（復員の時の思い出のひとつ）	渡部嘉隆（広島市）
「ビジネス・文化・教育交流を通じて日中の友好に寄与したい」	金之橋ヒューマンブリッジ株式会社代表 井上智樹
子供が体験した終戦時大連での出来事	溝口清司（嶺前小）

人の情け	阿部フミ子（大広場—弥生）
パリのアカシア、大連のアカシア 1	村田博司（ハルピン桃山—牡丹江円明—大広場—一中）
世界一の栄誉を獲得した大連市	甲斐正人（甘井子—大中）
我が国球界をリードした 大連野球界	秦源治
委員会室から（寄付者ご芳名・会員名簿）	
あとがき	

21 号（2010 年 10 月発行）	
記事名	筆者（所属・在住地など）
まえがき	
終刊の辞	甲斐正人（甘井子—大中）
『20 世紀大連会議』の幕引きに当って	秦源治（常盤—二中—工専）
22 年度役員会の報告	甲斐正人（甘井子—大中）
20 世紀大連資料室について	甲斐正人（甘井子—大中）
電子書籍の作成	甲斐正人（甘井子—大中）
望郷カレンダー最終版のお知らせ	
大連のまさに倒れんとするは・・・	島田浩（朝日小—一中 3 年在学時終戦）
終刊にあたって思うこと断片	佐藤治（奉天春日—常盤—嶺前—大石橋）
パリのアカシア、大連のアカシアⅡ	村田博司（ハルピン桃山—牡丹江円明—大広場—一中）
大連に於ける満鉄独身寮・社宅形成と日出町・山手町社宅の造成	大連会 山本健夫（日出小—二中）
大連近況（5）（2010 年 5 月）	金寿奉（大連市）
大連の日本人史	矢口進也（常盤—聖徳—大中）
川畑文憲さんと日中児童の友好交流講演会	佐藤治（奉天春日—常盤—嶺前—大石橋）
榊谷仙次郎物語	甲斐正人（甘井子—大中）

爾靈山の碑	中村陽一
戦前最後の輸入車	星博文（常盤一大中）
大連空襲のあとがき	島田浩（朝日小——中3年在学時終戦）
委員会室から（寄付者ご芳名・会員名簿）	
あとがき	

付録

20 世紀大連会議・20 世紀大連資料室刊行物一覧

No	書名	著者・編者	発行年月日	シリーズ名
1	絵はがきで刻んだ「心のふるさと 大連」	秦源治	2006 年 12 月 15 日	語り継ぎ資料 カルテット 1
2	懐旧大連 永遠に	青柳龍平・撮影	2007 年 3 月？	語り継ぎ資料 カルテット 2
3	大連を予見した漱石 「満鮮よりどころ」より	甲斐正人	2007 年 6 月 25 日	語り継ぎ資料 カルテット 3
4	“地図で見る 大連発展の足あと”	甲斐正人編	2007 年 7 月 10 日	語り継ぎ資料 カルテット 4
5	大連 連鎖街ものがたり	秦源治編	2008 年 8 月 10 日	物語シリーズ 1
6	夢満載の大連航路 あ・ら・か・る・と	秦源治	2008 年 10 月 1 日	カルテットプ ラス 1
7	満鐵特急『あじあ』	秦源治	2009 年 4 月 29 日	カルテットプ ラス 2
8	日露の遺産 大連 露西亜町と大広場	秦源治	2009 年 5 月 10 日	物語シリーズ 2
9	日本民間航空史（初飛行から終戦まで）	秦源治	2009 年 5 月 20 日	カルテットプ ラス 3

10	大連市政府指定 歴史的 文化財 50 選—建築物—但し 全 101 件のうち大連、旅 順、金州に限定	甲斐正人編	2009 年 11 月 30 日	カルテット補
11	わが国野球界をリードした 大連野球界	秦源治	2009 年 5 月 10 日	物語シリーズ 3
12	大連の電車・バス ア・ ラ・カ・ル・ト	秦源治	2011 年 9 月 1 日	大連ロマン①
13	永遠なる懐旧	青柳龍平・撮影	2011 年 12 月 20 日	大連ロマン②
14	大連 小学校沿革史 総覧	秦源治著・甲斐 正人補校	2012 年 7 月	大連ロマン③
15	関東州の中等学校沿革史 総覧	秦源治著・甲斐 正人補校	2012 年 12 月	大連ロマン④
16	租借 40 年の栄光 附（大 学・高専の部）	青柳龍平原作・ 甲斐正人補校	2013 年 2 月	大連ロマン⑤
17	大連の公園 水師営物語	秦源治・谷口正 子著、甲斐正人 補校	2013 年 9 月	大連ロマン⑥
18	租借 40 年の栄光アルバム ①—明治 40 年頃の大連—	（南満洲写真大 観より）		大連ロマン⑩ —1
19	租借 40 年の栄光アルバム ②—大正 15 年頃の大連—	（日華堂大連写 真帳より）		大連ロマン⑩ —2
20	租借 40 年の栄光アルバム ③—昭和 20 年頃の大連—	（講光社大連慕 情より）		大連ロマン⑩ —3
21	大連教育史の不可解を解明 する	甲斐正人	2014 年 6 月	大連ロマン⑪
22	B29 による大連空襲の記録	島田浩・花井良 太	2014 年 6 月	大連ロマン⑫
23	満鉄の遺産 大連病院・ヤ マトホテル	島田浩・秦源治 著、甲斐正人構 成	2014 年 6 月	大連ロマン⑬

24	野戦鉄道提理部と大連の市電・バス	秦源治著・甲斐正人構成	2014年6月	大連ロマン⑭
25	盛期大連の市勢・タウンマップの意義	甲斐正人	2015年6月	大連ロマン⑮

注：大連ロマン⑦～⑨は未刊。

公主嶺調査記

甲賀 真広

はじめに

本稿は、2018年8月22日に「満洲の記憶」研究会（以下、記憶研）の有志によって実施された、中国吉林省公主嶺調査の記録である。本調査では、金窪敏知氏を中心にして作られた公主嶺小学校同窓会の公主嶺市街図を手掛かりにして、「満洲国」（以下、括弧省略）期に建てられた要地の建築物見学を実施した。具体的には日本人が住んでいた住居、公主嶺駅、公主嶺小学校、農事試験場、嶺光学校などである。調査者は記憶研の大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤量の4名である。本稿では、公主嶺の調査に至った経緯、そして公主嶺の変遷を振り返り、現在の状況を述べていく。

1. 本調査の経緯

本調査のきっかけとなったのは、公主嶺小学校の卒業生である土屋（旧姓池田）洸子さんと細谷（旧姓吉富）和子さんの聞き取り調査である。聞き取り調査では、満洲国へ渡るまでの過程やそこでどのような生活を送り、どのように引揚げに至ったかなどをうかがっている。その語り

の中で、他の地域出身者の聞き取りからは、なじみのない言葉がたびたび出てきた。それは「ロス建て」という言葉である。これは彼らが当時住んでいた住居で、ロシアによって作られた建物のことである。公主嶺出身者が頻用するこの「ロス建て」は、現在どのようなになっているのか興味が湧いた。

そこで本調査は、「ロス建て」を中心に、聞き取り調査で言及があった場所をめぐることにした。本調査で訪れたのは以下の通りである。記憶をたどる目的から、彼らが用いる呼び名ですべてを記す（本『満洲の記憶』5号「公主嶺小学校関連写真目録」74-101頁参照）。

2. 戦前期の公主嶺

清朝末期、ロシアは東清鉄道の敷設に伴い、この地を軍事上の要地としてとらえており、道路、兵営、教会、劇場、駅など次々に建設した。これらは現在の公主嶺の原型となった。しかし、ロシアによって進められていた都市計画が、1905年の日露講和条約によって日本を中心とした町作りがなされるようになり、ロシア

時代の建物に日本人が住むようになった。1907年から日本人の居住が始まると、10年後の1917年にはおよそ2000人（全人口の約35%）、1937年にはさらに増え、約4700人（約34%）となっている⁽¹⁾。

公主嶺全体の人口も1942年には3万人を超え、「街」という単位から公主嶺「市」となった。

戦前には、満鉄の社宅や満鉄倶楽部の図書館、農事試験場、郵便局、幼稚園、警察官舎、日本人街の住宅など数多くの建物が、「ロス建て」であった⁽²⁾。インタビュー時、土屋さんはこの「ロス建て」について語り、また、公主嶺小学校同窓会が発行する記念誌でも「ロス建て」に関する記述が散見される。



「ロス建て」の住宅（旧池田宅）

撮影日：2018年8月22日

撮影者：大野絢也

29回生の矢野智子さんは「父の待つ公主嶺に着いたのは昭和九年十二月も末のことだった。厳冬の公主嶺。古いロス建ての陸軍官舎だった。近くには今まで見

たことのないロシア墓地、射撃場などがあった。満洲での冬、それは聞きしにまさるものだったが、火鉢とこたつだけの東京の冬と異なり、部屋にはペチカがあり、暖かく快適だった。」という⁽³⁾。

教職員であった田中真省さんは「公主嶺小学校は駅の正面にあって、くろずんだ赤煉瓦を大きな青柳（どろやなぎ）の枝間にのぞかせ、^{にれ}櫛のまばらな生垣に囲まれていた。古色蒼然として、新設校の現代様式からは、およそ縁遠い非学校的なものであった。それもそのはず、ロシアが満洲占拠中、教会として建てたものとのこと、したがって校内にはその面影がまだ残っていた。（中略）また外国映画によくあるように、正面玄関の上にはバルコニーがあった。」と回想している⁽⁴⁾。

このように、公主嶺の人たちは「ロス建て」について重ねて語り、単に「ロシアによって作られた建物」を指すだけでなく、「ロス建て」へのノスタルジーが感じられる。

3. 現在の公主嶺

現在の公主嶺にも「ロス建て」は残存している。それらは、公主嶺駅の北側の一区画に限定した範囲のみである。多くの「ロス建て」は、ほとんど手を加えられておらず、そのまま野ざらしの状態になっており、家屋に面している道路は舗装が剥がれたままであった。さらに、ある「ロス建て」の家屋では、ごみが山積みになっていた。



「ロス建て」が面する道路

撮影日：2018年8月22日

撮影者：大野絢也



「ロス建て」にある山積みのごみ

撮影日：2018年8月22日

撮影者：大野絢也

「ロス建て」の建物は、家屋のほかにも公主嶺駅の旧駅舎が残っている。戦前は公主嶺駅の表玄関は線路の北側であった。つまり、公主嶺駅の北側は日本人街であり、インタビューをした土屋さんの住居も北側であった。しかし、現在ではその駅舎も使用されている様子がなく、シャッターも下りていた。現在の公主嶺駅の駅舎は、鉄道線路の南側に向けて建てられている。そのため、南側の方が人

通りも多く、商店やビルも立ち並んでいる。現在の町の中心が南側に移っているという印象を受けた。



上：旧公主嶺駅駅舎（北側）

下：現在の公主嶺駅駅舎（南側）

撮影日：2018年8月22日

撮影者：佐藤量



公主嶺南側の大通り

撮影日：2018年8月22日

撮影者：大野絢也

ここで新たな疑問も湧き上がってきた。それは「ロス建て」はなぜ残存しているのだろうか、ということである。現時点で開発が進められているのが南側であるから、北側の「ロス建て」に手が付けられていないのか。それとも、あえてそこに手を入れていないのか。もしくは、手を入れられない理由があるのだろうか。このことは公主嶺という町が、満洲国の歴史をどう捉えているかということと重なる部分があるだろう。今後はこうした視点からも調査を続けていく必要がある。

おわりに

本調査では、「ロス建て」を中心に公主嶺の景観調査を行なった。公主嶺の「ロス建て」はほとんど手を加えられておらず、放置されているような状態になっていることがわかった。

ロシア時代の建物をめぐっては、例えば、大連、ハルビンの場合、それぞれ「ロシア風情街」、「中央大街」と、観光資源

化されている。その一方で、公主嶺のように、保存されていないケースもある。後日、このような現状を土屋さんにお伝えしたところ、寂しがる一面を見せていた。

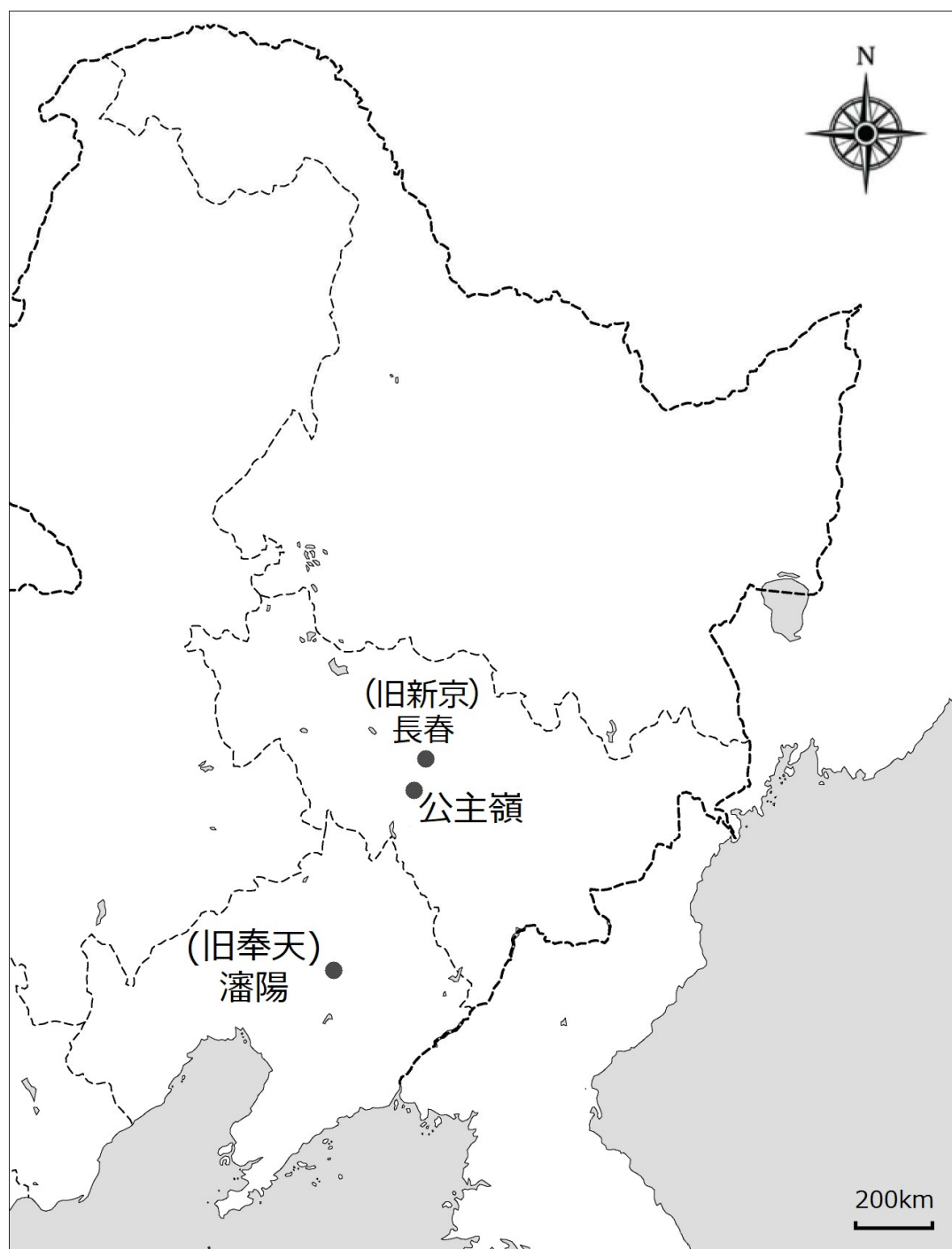
今後の公主嶺の行く末にも注目しつつ、他の地への調査も継続したい。

(1) 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会(1977)『満鉄附属地経営沿革全史 下巻』龍溪書舎、pp. 235-236。公主嶺小学校同窓会(1987)『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』公主嶺小学校同窓会、p. 14。

(2) 公主嶺小学校同窓会(1988)『満洲公主嶺—その過去と現在—』公主嶺小学校同窓会、pp. 32-35。

(3) 前掲『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』p. 285。

(4) 前掲『満洲公主嶺過ぎし40年の記録』p. 63。



公主嶺の位置図（作成者：大野絢也）

寄贈資料目録

本目録には、2017年8月1日から2018年7月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料をより多くの方々にご利用していただ

るように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後も継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願い申し上げます。

（50音順）

団体や個人が所蔵していた貴重な史料を多数ご寄贈いただいた方を紹介させていただきます。特に次の方々には、数多くの資料をご提供いただきました。紙幅上の関係により詳細な目録を省略させていただきます。

樋口優子氏

- ・竹内一郎氏関連資料

細谷和子氏、土屋洸子氏

- ・個人及び家族関連資料、公主嶺関連資料

また、鞍達朗氏からご寄贈いただいた資料は、2016年8月にご寄贈いただいたものであり、本来前号において記載予定でした。研究会の不注意により、掲載が大変遅くなりましたことを深くお詫び申し上げます。

鞍達朗氏（2016年にご提供）

- ・浅野幾代『初あられ』北国新聞社、1989年
- ・内村重義『おきな草は黙して』文芸社、2003年
- ・喜多由浩『満州唱歌よ、もう一度』産経新聞ニュースサービス、扶桑社、2003年

・大連市史編集委員会編『続大連市史』
大連会、2009 年

・大連を語る会『遙かなる大連——わたしと満洲（手記集）』大連を語る会、2001 年

他多数

飯塚洲一氏

・奉天教育専門学校附属小学校、奉天千代田小学校同窓会『会報 ちよだ』第 19 号

小坂宣雄氏

・小坂宣雄「旅順旅行の思い出」（原稿）
2017 年

・小坂宣雄「中国人（旧満人）との交流の思い出」（原稿）2017 年

・錦州会作成「錦州市街図」

佐藤治子氏

・錦州会『遙かな追憶の街へ——哈爾濱・新京・錦州・大連の旅——』私家版、2012 年

新谷陽子氏

・『「京大俳句」を読む会会報』第 3～4 号
・井筒紀久枝『大陸の花嫁』岩波書店、
2004 年

高山鞆則氏

・高山鞆則「大地の記憶」（原稿）2018 年

鶴見州宏氏

・錦州会『錦州会報』第 35～41 号

東郷量子氏

・延吉会訪中団記念文集『なつかしの延吉』1982 年

・阿部智行「満洲の忘れもの——生命の半ばに わが心の満洲・語り継ぎたいこと——」原稿

中島昭氏

・新京八島小学校同窓会『八島』終刊、
2007 年

・新京八島小学校同窓会八島会「長春（旧新京）思い出マップ八島」1987 年

・謙光社資料部「新江市街地図」1972 年

長尾道郎氏

・長尾道郎「1 人の小学生が見た感じた満州」（原稿）2017 年

西岡秀子氏

・蓮井秀義『シベリヤの月——わが捕虜記』かもがわ出版、2014 年

・蓮井秀義「瀬戸内海」（原稿）1969 年

・蓮井秀義「美しき古都遼陽」（原稿）執筆時期不明

秦源治氏

・秦源治、劉建輝、仲万美子『大連とところどころ——画像でたどる帝国のフロンティア』晃洋書房、2018 年

ハルビン学院

・哈爾濱学院同窓会『ハルビン』第60号
(最終号)

・哈爾濱学院連絡所『ABPOPA (アヴロー
ラ)』第1、3、4、7、10号

藤川琢馬氏

・国際善隣協会『善隣』第489号
・藤川琢馬『引揚者と歌の場面』(私家版)
2018年

村上敏明氏

・旧満洲・四平小学校同窓会閉会記念誌

『四季』2010年

・村上敏明『個人の尊厳を破壊し、国が
国民を棄てようとしたことを私は忘れない——母と妹の語られなかった遺言・過
ちを繰り返さないと誓った私 (講演録)』
2017年

渡辺是仁氏

・渡辺是仁「父よ妹よ」(原稿)

(文責：尹国花)

2017 年度（2017 年 8 月～2018 年 7 月）

「満洲の記憶」研究会活動記録

- 2017 年 8 月 14 日 第 73 回葛根廟事件遭
難者慰霊法要 参加者：湯川真樹江
- 2017 年 8 月 中国東北地方調査 参加者：
大野絢也、菅野智博、佐藤仁史、佐藤量
- 2017 年 9 月 3－4 日 秦源治氏訪問 参
加者：大野、佐藤（仁）、林志宏
- 2017 年 9 月 5 日 第 30 回定例会 参加
者：飯倉江里衣、大石茜、大野、菅野、
瀬尾光平、佐藤（仁）、佐藤（量）、森巧、
湯川、林
- 2017 年 9 月 10 日 錦州会総会 参加者：
大野
- 2017 年 9 月 21 日 中国残留日本人土屋
光弘氏インタビュー（第 1 回） 参加
者：森、湯川、林
- 2017 年 10 月 7 日 公主嶺会事務局長土
屋洸子氏訪問 参加者：大石、湯川
- 2017 年 10 月 10 日 土屋光弘氏インタビ
ュー（第 2 回） 参加者：菅野、森、
湯川、林
- 2017 年 10 月 14－15 日 史料スキャン
参加者：飯倉、大石、大野、菅野、瀬尾、
森、湯川
- 2017 年 10 月 17 日 土屋光弘氏インタビ
ュー（第 3 回） 参加者：菅野、森、
湯川、林
- 2017 年 10 月 27 日 公主嶺会懇親会 参
加者：大石、湯川
- 2017 年 10 月 31 日 土屋光弘氏インタビ
ュー（第 4 回） 参加者：菅野、森、
林
- 2017 年 11 月 22 日 公主嶺会細谷和子氏
訪問 参加者：大石
- 2017 年 11 月 29 日 第 62 回安東会大会
参加者：大石、甲賀真広
- 2017 年 12 月 29 日 秦源治氏訪問 参加
者：大野、佐藤（仁）
- 2018 年 1 月 28 日 細谷和子氏訪問 参
加者：大石
- 2018 年 2 月 3 日 第 31 回定例会・2017
年度秋季大会 参加者：大石、大野、菅
野、甲賀、佐藤（仁）、佐藤（量）、森
- 2018 年 2 月 3 日 国際ワークショップ
「植民地の社会と記憶」・「満洲の記憶」
研究会 2017 年度年次大会 参加者：大
石、大野、郭嘉輝、菅野、甲賀、佐藤（仁）、

- 佐藤（量）、森
 2018年4月16日 ハルビン学院慰霊祭
 参加者：菅野
- 2018年4月16日 細谷和子氏インタビュー（第1回） 参加者：大石、甲賀
- 2018年4月19日 土屋洸子氏インタビュー（第1回） 参加者：大石、菅野、甲賀
- 2018年4月22日 第32回定例会 参加者：尹、大野、菅野、甲賀、佐藤（仁）、佐藤（量）、森
- 2018年4月23日 土屋洸子氏インタビュー（第2回） 参加者：菅野、甲賀、佐藤（量）
- 2018年4月25日 土屋洸子氏インタビュー（第3回） 参加者：菅野、甲賀
- 2018年4月26日 細谷和子氏インタビュー（第2回） 参加者：菅野、甲賀
- 2018年5月9日 土屋洸子氏インタビュー（第4回） 参加者：大石、菅野、甲賀
- 2018年5月14日 山田典子氏訪問 参加者：大石、菅野
- 2018年5月16日 土屋洸子氏インタビュー（第5回） 参加者：大石、菅野、甲賀
- 2018年5月19日 公主嶺小学校37期同窓会 参加者：大石、菅野、甲賀
- 2018年5月23日 土屋洸子氏インタビュー（第6回） 参加者：菅野、甲賀、佐藤（仁）
- 2018年5月30日 岡山ハルビン会関係者訪問 参加者：大野、菅野、佐藤（仁）
- 2018年6月2-3日 福島調査 参加者：大野、菅野、甲賀、佐藤（仁）
- 2018年6月7日 土屋洸子氏インタビュー（第7回） 参加者：菅野、甲賀
- 2018年6月14日 土屋洸子氏インタビュー（第8回） 参加者：菅野、甲賀
- 2018年6月17日 資料整理 参加者：大野、菅野、甲賀、佐藤（量）
- 2018年6月18日 土屋洸子氏インタビュー（第9回） 参加者：菅野、甲賀
- 2018年7月6日 ひめゆり会関係者訪問 参加者：尹、菅野、甲賀
- 2018年7月15日 第33回定例会、2018年度春季大会 参加者：大野、菅野、甲賀、佐藤（仁）、佐藤（量）、施昱丞、森、湯川、林
- 2018年7月15日 「満洲の記憶」研究会 2018年度春季大会 参加者：大野、菅野、甲賀、佐藤（仁）、佐藤（量）、施、森、湯川、林

（文責：森巧）

國際ワークショップ「植民地の社会と記憶」

2017 年度年次大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2018 年 2 月 3 日に研究報告の場として、国際ワークショップ「植民地の社会と記憶」と題した 2017 年度年次大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、郭嘉輝氏と佐藤仁史氏、佐藤量氏、菅野智博氏による研究報告であった。当大会では約

30 名の方々に参加していただいた。2 部にわたる報告に対して、多数の示唆に富むコメントをいただき、興味深い議論が展開されるなど、所期の目的を達成できた。なお、日本語以外での報告の要旨は、発表時に使用された言語で掲載する。

第 1 報告

郭嘉輝（香港理工大学人文学院）「港英殖民統治下新界宗族的伝統与伝承」

是次報告希望討論何以中國大陸與香港新界雖同屬華人社會，但在傳統的祭祖禮儀、文化出現鉅大差異，並嘗從英國殖民統治對新界華人社會的影響作分析。是故，本報告首先則交代 1890 年代英國在新界建立殖民統治的經過。其一，英國在派員接管前，已於 1898 年委派香港政府輔政司（Colonial Secretary）兼華民政務司（Registrar-General）的駱克（Sir James Haldane Stewart Lockhart KCMG, 1858-1937）對新界進行調查並撰成《香港殖民地展拓界址報告書》（Report by Mr. Stewart Lockhart on the Extension of the Colony of Hong Kong.），因而對新界

地貌、農產、社會組織都有全面的認識，並建議「在新租借地的未來政府中，應該盡可能利用現有的機構」。其二，1899 年在英國接管新界的過程中，新界鄉民發起「六日戰爭」抗擊，雖以失敗告終，但港督卜力（Sir Henry Arthur Blake, 1840-1918）亦認為如果沒有鄉民領袖作為中介人的協助，將來對新界的管治則會非常困難。故此，英國殖民政府考慮這些因素下，盡量利用既有的地方秩序，嘗以最低成本管理這塊新取得的殖民地，因而對減場對新界華人社會的衝擊。

為此，英國於新界建立了有別於香港島、九龍地區の間接統治。1899 年 4 月通過《地方社會條例》將新界分為八個區（稱為約）及四十八個分約區，並於每分區任鄉事委員（committee for sub-

districts), 每百名村民一位, 少於百人的村落亦有代表, 作為「政府與居民之橋樑」。1902年《新界業權法案》與1910年《新界條例》不僅承認現有的男性繼承權系統, 同時更規定法院處理新界土地問題援引中國傳統習俗, 以法例確立了「祖」、「堂」系統的延續, 令宗族的族產模式得以維繫。1899年5月至7月, 新界的行政總部設於大埔, 集各種大權於駱克手上。自駱克離職後, 管理新界的官僚系統才漸漸出現。最初則分別由警察裁判司、助理田土官等處理治安、土地註冊及稅收問題。其後於1907年漸漸改為理民府官。而理民府官負責的工作包括: 收集地稅、土地管理、地區發展、生死註冊、平衡香港法律和中國傳統社會習俗中的矛盾, 以及聯絡地區內各大氏族。

第2報告

佐藤仁史（一橋大学）『写真記録「満洲」生活の記憶』の解説を執筆して

本報告では、筆者が監修に参加した、『写真記録「満洲」生活の記憶』全6巻・別巻（近現代資料刊行会、2017-2018年）に収録された写真資料から、①当時の生活はどの程度わかるのか、そもそもこれらは「生活の記録」なのか、②写真資料と満洲体験者の記憶との関係性はいかなるものであったのか、すなわち、満洲体験者が個々の写真を目にした時、いかなる体験や記憶を想起するのか、いかに記憶を喚起（創造）するのか、と

由此可見, 港英殖民政府在接管新界時, 考慮到駱克《報告書》及「六日戰爭」的鄉民激烈反抗, 所以採取「間接統治」(indirect rule), 只建立警署、法庭及土地法庭以維持治安及徵稅, 其餘各方面都仰賴原有地方的組織秩序。因此, 港英對新界土地的制度仍盡量維持原有的模式, 除了是考慮到新界的複雜性外, 更是為了保護原有地方勢力的利益, 以爭取他們對殖民政府的支持。正因為地方社會組織結構透過鄉民代表、土地制度等方式被延續下來, 所以宗族等傳統中國社會組織仍然發揮很大作用, 從而對於宗族春秋二祭、神誕慶典、太平清醮等各類傳統習俗、節慶儀式的延續有著關鍵的意義。

いった問題について初歩的な考察を行った。

『写真記録「満洲」生活の記憶』に収録された写真資料を分類すると、出版年は、1911年（大正10年）から1975年（昭和50年）の幅があるが、1911年刊行の1種と戦後に出された2種を除くと、13種の史料は1932年から1945年に集中している。また出版形態で分類をすると、（1）総合案内的な写真集、（2）芸術作品、（3）宣伝用パンフレット、（4）調査記録、（5）その他、に分類される。

このように分類していくと、様々な

「生活」が記録されているように思えるが、実際には発行者による様々な表象に基づいて恣意的に切り取られたものであることが明白であった。例えば、忠霊塔のごとく帝国に尽くした臣民を顕彰する施設や写真からは、帝国の「開発」の誇示という意図が端的に表れている。またこのような意識は一見してそのような意図をもっていないかのような写真にも現れている。例えば、類書でよく見られるのは、大連浪速町、大山通り、連鎖商店街など日本人集住地域の町並みの写真である。こののみをみれば、確かに日本人の「生活の記録」であるのかもしれない。しかし、満洲国を構成する大多数を占める「満人」のうち漢人たちの「生活」を描写する写真とし

佐藤量（立命館大学）「引揚者の生活再建と戦後社会——『引揚援護の記録』の写真資料から」

本報告では、『引揚援護の記録』（引揚援護庁、1950 年）の巻頭に採録された写真資料を取り上げ、何が写され何が写されていないかに注目しながら、戦後日本社会における引揚者の表象のあり方について考察した。なお『引揚援護の記録』とは、戦後間もない 1950 年に、厚生省の外局である引揚援護庁によって編纂された公的な引揚記録である。

まず写真に写されているシーンの特徴として、外地から日本内地への移動

てしばしばとりあげられているのが、「小児盗市場」（小偷市場）としてしられた小崗子の写真であった。ここからは、近代的な日本人居住地との対比において、「遅れた」中国人居住地という構図を読み取ることができ、中国人の生活を総体的に理解しようというまなざしは発見できない。

こうしたバイアスのかかった写真資料から当時の「生活」を読み取る方法の一つとして、1970 年代以降に陸続と発行された回想録や引揚者が結成した各種の団体が刊行した会報の読み込みが挙げられる。写真資料の有用性を引き出すには、当時の生活者の記憶に根気よく分け入っていく作業を積み重ねて行く必要があろう。

過程、内地上陸から引揚援護局での日々、そして日本各地に再移動していく様子などがあげられる。これらの写真からは、単に引揚者の足取りを時系列でまとめているというだけでなく、戦後日本社会が引揚者を暖かく迎え入れているというような表象意図も読み取れる。また、本書のタイトルが引揚「援護」を主題としていることから、全国各地の引揚施設を視察する皇室関係者の様子や、引揚援護団体主催の援護活動である「愛の運動」の活動内容を伝える写真も複数掲載されており、戦後日本社会が引揚者を包摂していく様が描かれている。

他方で、本書には写されていない引揚者の様子も指摘できる。例えば、本書には引揚者と日本内地の日本人との交流を写した写真は採録されていない。引揚者と内地の日本人との関係性については、引揚者による証言の中でも度々言及されるが、例えば、大連引揚者である映画監督の山田洋次は、「植民地・占領地に出かけた人びとへの差別と軽蔑を体験」を語る。こうした戦後日本における「他者」化された引揚者像は、本書の写真資料からは読み取りにくい。加藤聖文が「戦後日本は大日本帝国のなかでの多民族性・戦争犠牲者・植民地体験を忘却することからはじまっ

菅野智博（一橋大学大学院）「写された満洲の農村社会」

本報告は、『写真記録「満洲」生活の記憶』の中で取り上げられた満洲の農業や農民などの写真に焦点をあて、そこからみえてくる農村社会像や写真資料の有用性と限界性について初歩的検討を行った。満蒙開拓団を除き、在満洲日本人は主に都市で生活していたため、農村や農民との接点がほとんどなかった。これらの写真は、当時の満洲都市在住日本人や内地の日本人にとって満洲の農村を把握するためのツールであったと考えられる。しかし、写真に写しだされた満洲農村は、曠野、貧困、大豆経済、満蒙開拓の理想、「王道楽土」、「五

た」と指摘するように、『引揚援護の記録』の写真資料からも戦後日本の引揚者をめぐる忘却と排除の文脈を読み取ることができるだろう。

本報告では、『引揚援護の記録』の写真資料において、戦後日本社会の引揚者をめぐる包摂と排除の文脈が内在することを指摘した。また、引揚者は苦難の移動経験という部分が強調されがちだが、それだけではなく、国民再統合における他者化やそれに伴う生活再建の困難さなど、戦後も続いていく問題系としてとらえなおす必要性も重ねて指摘した。

族協和」など、日本人が想像しやすい「満洲像」であった。また、興味深いことに、本書の写真を相互に対照させると、同一写真が異なる時代の異なる資料集で再利用されていることがわかる。これら写真が繰り返して利用されることで、日本人の「満洲像」が作られ、さらにそれが固定化していったのであろう。

写真資料は、貴重な視覚資料ではあるが、同時に限界性を帯びていることにも注意を要する。撮影者や資料編集者の意図や時代背景を踏まえながら、複数の写真資料を比較したり、様々な文献資料と対照したりする作業は欠かせない。

第3報告

佐藤仁史（一橋大学）「秦源治（大連会・20世紀大連会議）コレクションについて」

本報告では秦源治氏の所蔵する満洲関連史料コレクションの内容と、研究における意義について紹介を行った。秦源治氏とは、「満洲の記憶」研究会の有志とともに2013年12月に山口県下関市の大連神社大連資料室の所蔵資料の調査を行う機会を得た際、水野直房赤間神宮名誉宮司よりご紹介いただいた。その後、2014年1月に三重県鈴鹿市の自宅を訪問して話を伺うとともに、コレクションを閲覧させていただいた。

秦源治氏は退職後満洲に関する書籍、雑誌、絵はがき、切手、写真、各種同窓会の会報などの蒐集をはじめ、現在では相当規模のコレクションを形成するにいたっている。特に貴重なのが、大連・旅順を中心に蒐集した700種をこえる絵はがきのコレクションである。大連・旅順に関してこれだけまとまっ

たコレクションは国内外を見渡しても珍しいと思われる。

秦氏のコレクションでもう一つ貴重なのが、各種同窓会・引揚者団体が発行した会報である。常盤小学校、大連第二中学校、南満洲工業専門学校の各同窓会会報と、大連会、及び20世紀大連会議（および後進の20世紀大連資料室）が発行した会報のほぼすべてが蒐集されている。これらに掲載された引揚者の回想文は、引揚者2世の満洲生活の実態を明らかにするのみならず、会報の刊行を通じて集合記憶がどのように形成され、個人の記憶の形成や変化にどのように影響をあたえたのかを分析する際の好個の史料群である。

なお、絵はがきのコレクションを含む秦源治氏所蔵の満洲関連資料は「満洲の記憶」研究会に寄贈いただくこととなり、2016年4月23日に寄贈同意書が交わされた。これらは整理・検討の上、広く公開をする予定である。

2018 年度春季大会報告要旨

「滿洲の記憶」研究会は、2018 年 7 月 15 日に研究報告の場として、2018 年度春季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、林志宏氏と西井麻里奈氏による研究報告であった。当大会では約 30 名の方々に参加していただいた。2

第 1 報告

林志宏（中央研究院近代史研究所）「大同學院——歴史、同窓会及其記憶」

大同學院出現於歷史上的滿洲國時期。它直屬國務院管轄，目的是「養成訓練官公吏或將為官公吏者之所」，共分為三部。院生來源包括來自日、滿各地，還有日本帝國殖民地的青年，以及比例上甚少的白俄人。各項課程中，值得注意的是「見學旅行」，畢業前夕到各地行政機構從事實務，然後完成報告書。1933 年出版的《滿洲國各縣視察報告》，即是例證；也樹立了日後縣政調查的模式，讓大同學院院生成為參事官之前，具有地方調查工作的經驗。

一九四五年八月一五日的日本敗戰，許多在「外地」的日本國民紛紛遣返回國。曾參與大同學院課程訓練的日本院生，於是組織同窓會。大同學院同窓會最初因戰後慰靈活動而開啟。主要工作項目有：(1)

部にわたる報告に対して、多数の示唆に富むコメントをいただき、興味深い議論が展開されるなど、所期の目的を達成できた。なお、日本語以外での報告の要旨は、発表時に使用された言語で掲載する。

遺族の救済及補助；(2) 確認抑留在「中共」及蘇聯的大同學院日本院生；(3) 整理、保存相關資料；(4) 設法聯絡其他地區的大同學院院生。隨著日本的政治和社會日益穩定，同窓會也朝向制度化發展，像建立會館、以家族形式進行聯誼活動等。一九六〇年代末到一九七〇年代，東亞政局波濤洶湧，包括中國掀起無產階級文化大革命、日本發生「東大安田講堂事件」、美國醞釀親中外交、中華民國正式退出聯合國、日台斷交及日中兩國外交正常化等。如此國際情勢的變化，大同學院同窓會也因應時代腳步而改變，扮演「民間外交」的渠道，褪去「反共」色彩。

除了組織團體延續既有的人脈外，同窓會還嘗試喚起「滿洲情懷」，形塑集體認同。主要由每個人針對滿洲國時發生的各種經驗，以文字紀錄下來，反覆挖掘「個人記憶」形成共同的價值觀。換句話說，這一

套敘事模式是參與者相互「創造」出來的，有意識地連結了過去和現在的關係。「個人經驗」和「記憶」邁向最高峰的時刻，是為了慶祝大同學院創立三十週年，同窗會打算編寫一部大同學院院史。一九六六年十一月刊行《大いなる哉満洲》，就是集大成的產物。這些「記憶」內容，不僅成為他們對自己人生道路的定位，也是向外駁斥、發聲的唯一管道。接下來《碧空綠野三千里》、《東天紅を告ぐ》、《天翔るべき》等作品，都肩負起個人回憶過去與聯繫現

在的功能。除了文字描述以外，也有著眼於以視覺圖像為主的文獻。後來隨著大同學院同窗會活動事業的發展，「記憶」還擴張到日本院生以外的群體。

大同學院固然是帝國日本殖民滿洲的一顆棋子，但究其真正精神，還在如何認識中國（大陸）地方基層社會。如此精神戰後仍被承繼下來。當一九七〇年代日中兩國關係日益正常化時，「如何認識中國」也成為同窗會成員共同關心的命題。

第2報告

西井麻里奈（日本學術振興會特別研究員PD）「広島・「復興」の戦後史—生活再建の語りに見る、場所の論理と空間の論理—」

戦後広島の復興については、これまで都市計画学・建築学研究（石丸 1988 等）や戦争記憶研究（福岡 2015）のなかで検討されてきた。それに対し、本報告では住民がその復興をいかに経験したのかに注目し、戦災復興土地区画整理事業（以下、区画整理）のなかで住民が行政に提出した事業への異議申立の陳情書を主な資料として考察した。住民との利害・感情のコンフリクトが生じる現場として、復興を再検討するためである。

まずマクロな視点として、広島での復興事業の展開とその特徴を指摘した。特別都市計画法の下での具体的な戦災復興事業は、被爆から約 1 年後に開始され、

原爆被害により財政的根拠が失われた広島では、国からの補助を求めて運動が展開された。1949 年に制定された広島平和記念都市建設法により、一定期間の高率国庫補助を受けることが可能になったが、ドッジ・プランのもと戦災復興事業全体が縮小され、補助対象事業も減少した。この時、平和記念公園等の「平和記念施設」の建設は、引続き国庫補助を受けることとなり、住宅事情も厳しい当時として不急と感じられていた記念空間の建設が、限られた年限で急速に進められるという歪みも生じた。

他方で、住民が生活再建の場所を求める陳情に目を向けると、こうした事業との衝突の具体像が浮かび上がるとともに、時期による陳情内容や陳情主体の変化も見えてきた。本報告では陳情事例を紹介しつつ、1940～50 年代初頭の陳情書と、それ以降の陳情書との性格の違いに注目

した。前者では、陳情者は旧来の土地・住居の権利者が中心である。主たる要求内容も換地変更や生業に適した土地を求めるもの等であり、社会的地位の強弱、財産、利害、家族・近隣関係の問題が複雑に絡みあった問題も見られた。後者では、陳情主体は前者と重なりつつも、不法占拠者による陳情が増加した。ここでは、復興をめぐる住民—行政間の対立だけでなく、住民間で生活再建レベルの格差が顕在化しており、報告全体を通じて「復

興」を実感しうる社会状況・景観との視覚的落差が時間とともに明確になっていく様を明らかにした。

参考文献

石丸紀興「「広島平和記念都市建設法」の制定過程とその特質」、『広島市公文書館紀要』、11号、1988年。

福間良明『戦跡の戦後史　せめぎあう遺構とモニュメント』岩波書店、2015年。

おしらせ

資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に

含まれる個人情報等には深甚な配慮をいたします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い入れの強い品でお手元に置いておかれたいものなどもありのことと思います。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複写・撮影等をさせていただくという方法もございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

カンパの御礼

「満洲の記憶」研究会では、皆様からカンパを募ることにしております。多くの方々より御厚意を賜りまして誠にありがとうございました。皆様方のあたたかい御支援に、あらためて心より御礼申し上げます。皆様からのカンパは研究会の活動が今後さらに発展できますよう、大切に使用させていただく所存でございます。

カンパをいただきました皆様の御厚意に対し感謝の意を込めて、ここに2017年度（2017年7月31日—2018年7月31日）に御支援いただいた皆様のお名前を掲載させていただきます。（50音順）

大島満吉様 1口

山田千里様 20口

カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、継続して皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者・大学院生が中心となって運営しているため、これまで編集委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。カンパは 1 口 1,000 円で、文末に記載している銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載し、御支援いただいたことを皆様に紹介させて

いただく予定です（お名前の掲載を希望されない方は事前に御連絡ください。そのように対応いたします）。また、カンパしてくださった方は、必ず本研究会宛にメールまたはお手紙で御連絡ください。

研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

「満洲の記憶」研究会銀行口座

銀行：三井住友銀行

支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金

口座番号：8088124

口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

会員募集及び情報配信のおしらせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

Facebook：「満洲の記憶」研究会

<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

《满洲记忆》(“满洲记忆”研究会通讯)第5期

中文目录

一位少年的大连记忆	作者: 秦源治 编辑: 甲贺真广、大野绚也
满洲纪行	作者: 竹内一郎 解说·编辑: 菅野智博
公主岭教育关联照片目录	解题: 大石茜 编辑: 甲贺真广
20 世纪大连会议会报《The Great Connection》目录	佐藤仁史、大野绚也
公主岭调查记	甲贺真广
2017 年度捐赠资料目录	
2017 年度“满洲记忆”研究会活动记录	
2017 年度“满洲记忆”研究会年次大会报告提要	
2018 年度“满洲记忆”研究会春季大会报告提要	
会务启示	

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”) No. 5

Contents

A Boy’s Memory of Dairen HATA Genji
Ed. KOGA Masahiro and OHNO Junya

A Visit to Manchuria TAKEUCHI Ichiro
introduction by KANNO Tomohiro

Index of Photography Related to Education in Koshurei
Ed. KOGA Masahiro, introduction by OISHI Akane

Index of Articles in the Bulletins of the 20 century Dairen Association “The Great Connection”
Ed. SATO Yoshifumi and OHNO Junya

Field Report in Gongzhuling KOGA Masahiro

2017 List of Donated Materials

2017 Annual Activities of the Society for “Memories of Manchuria”

Summary of the 2017 Meeting

Summary of the Spring 2018 Meeting

Announcements

編集後記

多くの方々のご協力のもと、『満洲の記憶』5号が刊行されました。年々解散する同窓会が増え、これまでご協力いただいた方の訃報を受けとることもあり、当時の体験をお聞きし続けることの難しさを日々感じています。そんな中、今年もたくさんの方から資料の提供を受け、インタビューをさせていただきました。この場を借りて感謝申し上げます。皆様のご尽力により、今号では、秦氏による大連の回想記、竹内氏が小学生のときに書かれた紀行文、大連及び公主嶺に関する目録2点、公主嶺の調査記を掲載することができました。

特に今号では公主嶺を大きく取り上げることとなりました。満洲の中でも小さな町ですが、大都市とは異なる特色を読みとっていただけるのではないかと思います。同窓会がどのような資料を収集し、どのような記憶を残していくのか。また、それぞれの町が、どのようにその町の歴史を捉え、現在の町づくりにつなげているのか。公主嶺という町を事例に非常に考えさせられました。

また今号から新たに、甲賀（言語学）と大石（保育史）が編集委員に加わりました。ディシプリンを異にする編集委員が増えたことで、「満洲の記憶」研究会の研究関心の幅も広がったと言えるでしょう。ご協力くださる方々との出会いに感謝し、ますます活発な研究活動となるよう皆で精進してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（大石茜）

『満洲の記憶』 第5号

発行日：2018年10月31日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会

編集委員：

飯倉江里衣 尹国花

大石茜 大野絢也

郭嘉輝 菅野智博

甲賀真広 佐藤仁史

佐藤量 施昱丞

瀬尾光平 森 巧

湯川真樹江 林志宏

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年9月に刊行されます。本会学年暦は、毎年8月1日から次年7月31日です。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

[http://hermes-ir.lib.hit-](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

[u.ac.jp/rs/handle/10086/27095](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

◇「満洲の記憶」研究会連絡先

メール：manshu-kioku@live.jp

研究会ブログ：

<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

研究会 Facebook：

[https://www.facebook.com/groups/359559330](https://www.facebook.com/groups/359559330877470/)

877470/